高崎市文化財調査報告書 423 集

群馬県高崎市

棟高南八幡街道遺跡 3

―店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

２０１９

高崎市教育委員会
株式会社カルチャー
山下工業株式会社

高崎市文化財調査報告書 423 集

群馬県高崎市

棟高南八幡街道遺跡 3

―店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2019
高崎市教育委員会
株式会社カルチャー
山下工業株式会社

例　言

1. 本書は、株式会社カルチャーによる店舗建設に伴う棟高南八幡街道遺跡３の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は高崎市教育委員会による指導のもと、事業者 (株式会社カルチャー) から委託を受けた山下工業株式会社 (代表取締役　山下 尚) が実施し、その費用については事業者が全額負担した。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地	群馬県高崎市棟高町字南八幡街道 138 番地、139 番地 1、143 番地 1、144 番地		
高崎市遺跡調査番号	717	調査面積	852.22㎡
期間　【現地調査】	平成 29 年 11 月 13 日～平成 30 年　1 月 10 日		
【整理作業】	平成 30 年　1 月 11 日～平成 30 年 12 月 25 日		
調査担当者	青木 利文 (山下工業株式会社)		
調査員	永井 智教・原野 真祐 (山下工業株式会社)		
調査監督員	矢島　浩 (高崎市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財担当 係長)		

4. 整理作業及び本書作成は青木･永井･原野を中心に石塚 久則･樺澤 礼子･鏑木 恭子･谷藤 龍太郎･堀地 文子 (山下工業株式会社) が行った。
5. 遺構図作成は田中 隆明 (タナカ設計) が行った。
6. 写真は、遺構を永井・原野が、遺物を石塚が撮影し、空中写真撮影は新井 一 (まりも工房) が行った。
7. 本書の執筆については、第Ⅰ章１を矢島が、第Ⅰ章２、第Ⅱ章、第Ⅲ章１・４～９を青木が、第Ⅲ章２を石塚が、第Ⅲ章３、第Ⅴ章２、第Ⅵ章を永井が、第Ⅳ章をパリノ・サーヴェイ株式会社が、第Ⅴ章１を外山 政子 (株式会社甲セオリツ)、第Ⅴ章２を高橋 実果 (株式会社甲セオリツ) が行った。
8. 本書の挿図・図版作成は青木・石塚を中心に谷藤が行った。
9. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、高崎市教育委員会文化財保護課のご指導を得たほか、下記の機関・諸氏からご助言・ご協力を賜った。(五十音順・敬称略)

株式会社カルチャー　池田 敏宏　小此木 真理　尾身 文　笠原 仁史　高橋 敦　中村 岳彦　野村 満
前原 豊　山崎 芳春

凡　例

1. 遺跡、全体図における X・Y 値は、平面直角座標Ⅸ系 (世界測地系) の座標値、挿図中の北は座標北である。
2. 本報告書で用いる座標値は、全て世界測地系測地成果 2011 である。
3. 本報告書で用いる遺跡地図・遺構図・遺物実測図等の縮尺はすべてにスケールを表示した。
4. 本書掲載の第１・２図は高崎市発行の 1/2,500「高崎市都市計画基本図」、第３図は国土地理院発行 1/25,000 地形図を用い一部改変・引用した。
5. 遺物写真については基本的に約 1/3 で掲載したが、それ以外の縮尺の場合は掲載ページに縮尺を示した。
6. 本文中及び計測表の (　) 内の長さを表す数値は残存値、観察表中の (　) 内の口径・底径は推定値、器高は残存値を表す。
7. 土器の色調観察は『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2011) を用いた。
8. 遺構図の網掛けについては、凡例を右に明示した。　炭範囲　粘土　焼土

目　次

例言
凡例
目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1
　1．調査に至る経緯　2．調査の経過

第Ⅱ章　遺跡を取り巻く環境 …… 2
　1．地理的環境　2．歴史的環境

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物 …… 6
　1．調査区概観　4．柵列　7．性格不明遺構
　2．竪穴住居　5．溝　8．土坑
　3．掘立柱建物　6．井戸　9．ピット

第Ⅳ章　分析 …… 41
　1．炭化材の樹種同定

第Ⅴ章　補遺 …… 45
　1．8号住居の竈 (カマド) 構造について　2．8号住居出土遺物について

第Ⅵ章　総括 …… 53
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　開発区と棟高南八幡街道遺跡3　位置図… 1
第 2 図　棟高南八幡街道遺跡群配置図…… 4
第 3 図　棟高南八幡街道遺跡3　周辺遺跡…… 5
第 4 図　棟高南八幡街道遺跡3　全体図…… 6
第 5 図　棟高南八幡街道遺跡2・3　基本層序…… 7
第 6 図　1号住居及び出土遺物…… 8
第 7 図　2号住居及び出土遺物…… 9
第 8 図　4号住居及び出土遺物…… 10
第 9 図　5号住居及び出土遺物…… 11
第 10 図　6号住居…… 12
第 11 図　6号住居出土遺物…… 13
第 12 図　7号住居…… 13
第 13 図　7号住居出土遺物…… 14
第 14 図　8号住居①…… 14
第 15 図　8号住居②…… 15
第 16 図　8号住居③及び出土遺物①…… 16
第 17 図　8号住居出土遺物②…… 17
第 18 図　9号住居①…… 18
第 19 図　9号住居②及び出土遺物…… 19
第 20 図　10号住居及び出土遺物 …… 20
第 21 図　11・12・13号住居①…… 21
第 22 図　11・12・13号住居②及び出土遺物…… 22
第 23 図　14号住居及び出土遺物 …… 23
第 24 図　15号住居及び出土遺物 …… 24
第 25 図　16号住居及び出土遺物① …… 25
第 26 図　16号住居出土遺物② …… 26
第 27 図　17号住居① …… 26
第 28 図　17号住居②及び出土遺物 …… 27
第 29 図　18号住居及び出土遺物 …… 28
第 30 図　18号住居　区画及び鍛造剥片と粒状滓 (合計) の重量分布 …29
第 31 図　19号住居及び出土遺物 …… 30
第 32 図　20号住居及び出土遺物 …… 31
第 33 図　21号住居 …… 31
第 34 図　22号住居 …… 31
第 35 図　1号掘立柱建物及び1号柵列…… 32
第 36 図　2号掘立柱建物…… 33
第 37 図　1号柵列出土遺物…… 33
第 38 図　1・2号溝…… 34
第 39 図　1号溝出土遺物…… 35
第 40 図　1号井戸及び出土遺物…… 36
第 41 図　性格不明遺構及び出土遺物…… 37
第 42 図　土坑及び出土遺物…… 39
第 43 図　ピット出土遺物…… 40
第 44 図　炭化材①…… 43
第 45 図　炭化材②…… 44
第 46 図　カマド断面解説…… 48
第 47 図　カマド断面 (焚口～煙道部) …… 48
第 48 図　セクションポイント模式…… 48
第 49 図　カマド断面 (煙道部～排出口) 合成 …… 48
第 50 図　煙道入口上部の充填土中に埋設された坏…49
第 51 図　カマド平面形　調査経過…… 49
第 52 図　カマド平面形　調査経過の解説…… 49
第 53 図　煙道空間と充填土 (SPB-B') …… 50
第 54 図　カマド横断面図 (SPB-B') …… 50
第 55 図　SI-8 出土の小型短頸壺 (掲載№ 65) …… 52

挿表目次

第 1 表　1号住居出土遺物観察表…… 8
第 2 表　2号住居出土遺物観察表…… 10
第 3 表　4号住居出土遺物観察表…… 11
第 4 表　5号住居出土遺物観察表…… 12
第 5 表　6号住居出土遺物観察表…… 13
第 6 表　7号住居出土遺物観察表…… 14
第 7 表　8号住居出土遺物観察表…… 17
第 8 表　9号住居出土遺物観察表…… 19
第 9 表　10号住居出土遺物観察表 …… 20
第 10 表　11号住居出土遺物観察表 …… 22
第 11 表　12号住居出土遺物観察表 …… 22
第 12 表　14号住居出土遺物観察表 …… 23
第 13 表　15号住居出土遺物観察表 …… 24
第 14 表　16号住居出土遺物観察表 …… 26
第 15 表　17号住居出土遺物観察表 …… 27
第 16 表　18号住居出土遺物観察表 …… 29
第 17 表　18号住居鍛造剥片分布 …… 29
第 18 表　19号住居出土遺物観察表 …… 30
第 19 表　20号住居出土遺物観察表 …… 31
第 20 表　1号柵列出土遺物観察表…… 33
第 21 表　1号溝出土遺物観察表…… 35
第 22 表　1号井戸出土遺物観察表…… 36
第 23 表　性格不明遺構出土遺物観察表…… 38
第 24 表　土坑出土遺物観察表…… 39
第 25 表　ピット計測表…… 40
第 26 表　ピット出土遺物観察表…… 40
第 27 表　樹種同定結果…… 41
第 28 表　竪穴建物出土土器一覧表…… 52
第 29 表　SI-8 須恵器器種一覧表…… 52

写真図版目次

図版 1　1. 調査区全景
　2. 調査区の立地 南東から (榛名山を望む)

図版 2　1. 調査区全景 南東から
　2. 基本土層
　3. 1号住居・2号住居・1号溝 東から
　4. 4号住居 東から
　5. 5号住居 東から

図版 3　1. 6号住居 西から
　2. 6号住居 遺物出土状況 西から
　3. 7号住居 西から
　4. 8号住居 北東から
　5. 8号住居 カマド　東から
　6. 8号住居 柱抜き取り痕跡断面 南から
　7. 8号住居 柱抜き取り痕跡 東から
　8. 8号住居 掘方 東から

図版 4　1. 10号住居 西から (9号住居を切る)
　2. 10号住居 カマド 西から
　3. 9号住居 南から (10号住居に切られる)
　4. 9号住居 カマド 南から
　5. 11号・12号・13号住居 (奥から)
　6. 11号住居 北西から
　7. 12号住居 西から
　8. 13号住居 西から

図版 5　1. 14号住居 西から
　2. 17号住居 西から (15号住居を切る)
　3. 17号住居 カマド 北西から
　4. 15号住居 西から (17号住居に切られる)
　5. 15号住居 カマド 西から
　6. 16号住居 西から
　7. 16号住居 カマド 北西から
　8. 16号住居 遺物出土状況 南西から

図版 6　1. 18号住居 西から
　2. 18号住居 鍛冶炉 近接
　3. 19号住居 西から
　4. 19号住居 カマド 北西から
　5. 20号住居 南から
　6. 20号住居 炭化物出土状況 東から
　7. 21号住居 北から
　8. 22号住居 北から

図版 7　1. 1号掘立柱建物 南から
　2. 1号土坑 東から
　3. 6号土坑 北から
　4. 7号土坑 北から
　5. 9号土坑 北から
　6. 1号井戸 セクション 南から
　7. 1号・3号性格不明遺構 西から
　8. 1号溝 遺物出土状況 南から

図版 8　出土遺物 (1)

図版 9　出土遺物 (2)

図版 10　出土遺物 (3)

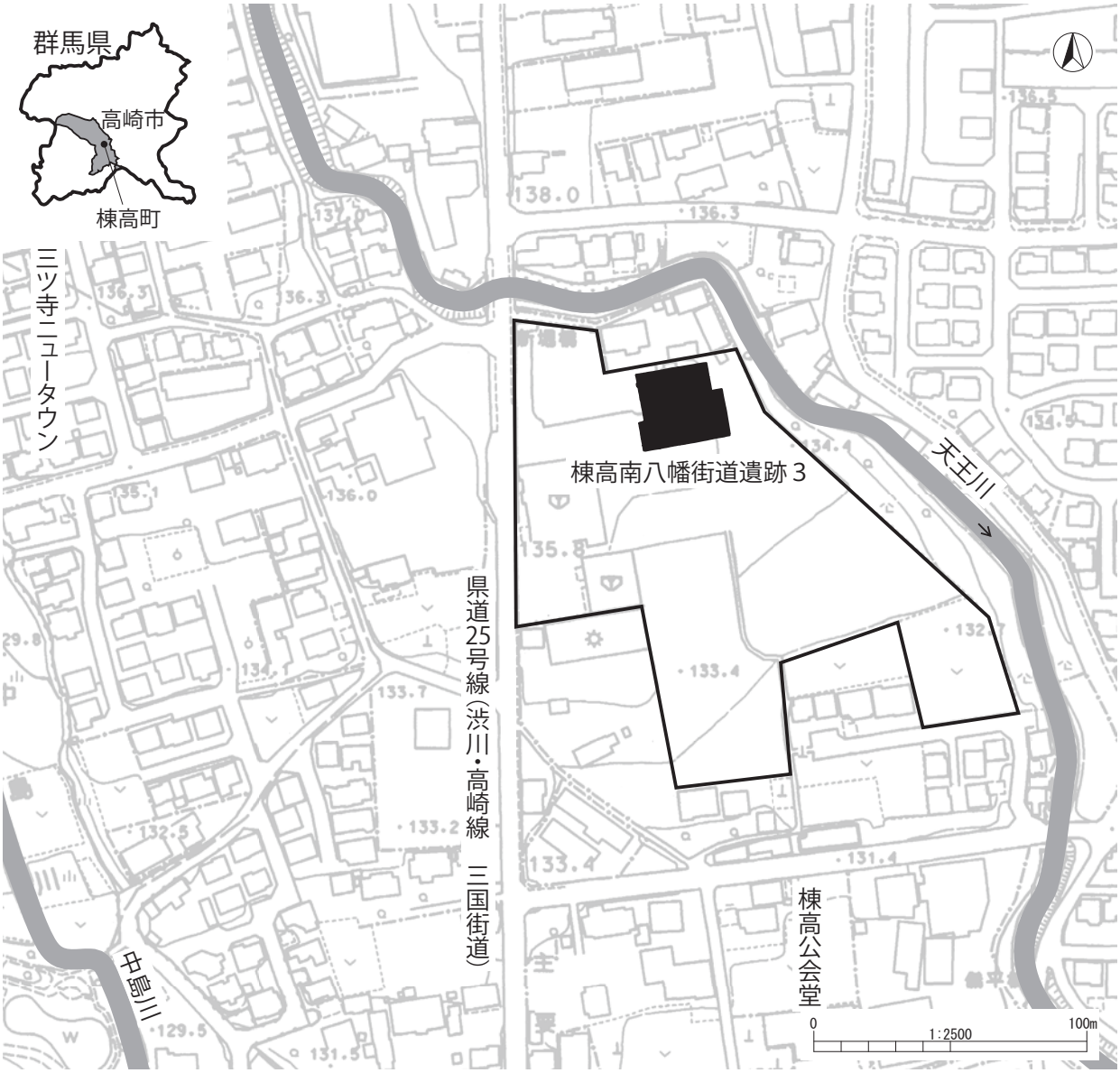
図版 11　出土遺物 (4)

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過

1．調査に至る経緯

平成 29 年９月、土地所有者齋藤和正氏・芳野一雄氏・株式会社エバーグリーンから、高崎市棟高町において計画しているドラックストアー建設に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課 (以下、市教委と略) にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である棟高南八幡遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年９月８日には、市教委へ埋蔵文化財試掘 (確認) 調査依頼書が提出され、同年 10 月３日に試掘 (確認) 調査を実施した。その結果、古墳時代の竪穴建物を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「棟高南八幡街道遺跡３」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成 29 年 10 月 30 日に工事主体者 株式会社カルチャーと民間調査機関 山下工業株式会社・市教委での三者協定を締結、平成 29 年 11 月 1 日に工事主体者 株式会社カルチャーと民間調査機関 山下工業株式会社との間で契約を締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。



第１図　　開発区と棟高南八幡街道遺跡３　位置図

２．調査経過

本遺跡は高崎市教育委員会文化財保護課による試掘調査の成果で地表から遺構確認面までは造成土および表土が 100 ～ 110cm 程であった。これらの上層土の除去はバックホーを用い掘削し、発生した大量の排土は遺跡外部にある専用の敷地にダンプで搬出した。その後の遺構の確認と掘削はジョレン、移植コテ、スコップを用い人力作業を行った。

遺構の記録は断面はメジャーを用いた手実測で行い、平面はトータルステーションを用いて計測を行っている。遺構の写真は堆積状況、遺物の出土状況、遺構の全景など、モノクロフィルム、リバーサルフィルムおよび、デジタルカメラによる撮影を行っている。遺跡の航空写真はラジコンヘリによる撮影を行った。

遺跡の位置は世界測地系座標値、X=43,010、Y=-74,690を原点とし、5mのグリッドを新たに設定し、このグリッドは東に向かって A ～ H、南に向かって 1 ～ 7 に該当した。

調査は 11 月 24 日から重機による表土掘削を行ったが、大量の表土のため約 10 日を要した。表土掘削と平行し、29 日からは人力により遺構確認精査を行い、遺構覆土には As-B 軽石を含むものと、As 軽石を含むものが確認され、翌 30 日からは As-B 軽石を含む遺構から掘削を行った。12 月 27 日には大半の遺構の掘削が終了し航空撮影を実施し、12 月 28 日に高崎市教育委員会文化財保護課による完了立会いを行い、残り調査の確認を行った。年内の調査は 29 日で一旦終了し、 1 月 4 日より作業を再開し残った遺構の記録を行った。 9 日には撤収準備を開始し、調査区の埋め戻しを一部開始したものの、16 号住居の下部に布堀状の掘方を持つ 1 号掘立柱建物が確認され、掘削を行った。 1 月 10 日にすべての作業を完了した。

第Ⅱ章　遺跡を取り巻く環境

１．地理的環境

棟高南八幡街道遺跡 3 は群馬県高崎市棟高町字南八幡街道 138 番地、139 番地 1、143 番地 1、144 番地に所在する。高崎駅の北方 4.5km に位置し、西は県道 25 号線 (渋川・高崎線、三国街道) に面し、西方 800m には上越新幹線が南北に走行している。本遺跡は天王川右岸に所在し、左岸にあたる東側一帯は住宅街として開けている。榛名山の火山活動による崩壊で発生した泥流により、広大な扇状地 (相馬ケ原扇状地) が形成され、本遺跡はその扇端部に位置し、南流する中島川、天王川に浸食されてできた標高 134 ～ 135m の帯状微高地に展開している。遺跡の北から西方向は赤城山と榛名山による広大な扇状地が見られ、谷筋からは幾筋もの湧水が流出し、古くから生活環境に適した土地であることは周辺の所在遺跡の数からも理解できる。

２．歴史的環境

縄文時代

本遺跡や近接する遺跡からは当該期の遺物・遺構は検出されていない。この地区が縄文時代の遺跡として周知されていないことをよく示している。一般的概念として縄文時代の生活拠点は安定した台地の縁辺部や平坦地、丘陵上の緩斜面地、河川の両縁辺部、高地に因るところがあると思われる。低地、帯状微高地といった複雑な地形には適さなかった時期もあったのだろうか。本遺跡からやや離れると、前期中葉から中期中葉までの住居や土坑を検出した三ツ寺Ⅱ遺跡 (57)、熊野堂遺跡 (67)、保渡田Ⅶ遺跡 (55) が所在している。北東には上野国分僧寺・尼寺中間地域 (68) が位置し、前期後半の住居 1 軒と中期後半の住居 30 軒からなる集落を確認している。後期には小規模な単位であるが微高地や低地にも進出する傾向が観られ、本遺跡から南方 2.3km の天王川左岸には後期初頭の柄鏡型住居を検出した小八木志志貝戸遺跡 (15) が確認されている。

弥生時代

前期～中期前半にかけては北東１km に位置する西三社免遺跡 (35)、小池遺跡 (37) から遺物が少量出土しているのみで、本遺跡の周辺では遺構は検出されていない。中期後半頃になると遺跡数は増え、雨壺遺跡 (９)、大八木・伊勢廻遺跡２(10) が集落を形成し、標高 100m 以上のところにまとまって所在する傾向が観られる。後期 (樽式期) になると遺跡数はさらに増え、それに伴い水田や墓域といった生産域や葬送の場も共伴してくる。代表的な遺跡としては、掲載はしていないが、南東３km に展開する後期の拠点集落として著名な史跡日高遺跡があげられる。縄文時代の集落は主に狩猟を生活形態としていることから必然的に高地が選択される。弥生時代では生産といった生活形態が主であり、拠点集落としての選択地は概念として高地、低地に二分され、標高が重要な要因となっている。標高 125m 以下に集中する後期の小規模集落には南方２km の諸口遺跡群 (12) をはじめ、井出村東遺跡 (59)、正観寺遺跡群 (20)、小八木志志貝戸遺跡 (15)、西浦北遺跡 (７)、熊野堂遺跡 (67) 等があげられる。

古墳時代

前期の遺跡は少なく、熊野堂遺跡 (67) や上野国分僧寺・尼寺中間地域 (68) で居住の痕跡が、同道遺跡 (60) は As-C 軽石下から水田跡､熊野堂遺跡 (67) では As-C 軽石下から畠跡が検出されている。中期の遺跡数は減少し、小八木志志貝戸遺跡 (15) や西浦北遺跡 (７) が確認されている。後期になると遺跡数は非常に増え、確認される周辺遺跡のほとんどに当該期の住居が検出されている。本遺跡から西方 1.5km に築造する井出二子山古墳 (56)、保渡田八幡塚古墳 (53)、保渡田薬師塚古墳 (54) はいずれも前方後円墳で、保渡田古墳群として周知されている。当時の首長クラスの被葬者が埋葬されていると考えられ、この地区の指標ともなっている。また、その約１km 圏内に位置する三ツ寺Ⅰ遺跡 (58) では古墳群から同時期の居館跡を確認しており、３基の古墳と時期を同じにしていることから、この区域が首長クラスの豪族の拠点であると推測されている。北方２km の北谷遺跡 (40) でも居館跡が確認されている。

５世紀後半以降の居住域は、山麓開発等によって上流域の標高 145 ～ 200m 付近まで継続して居住することが判明。６世紀初頭の榛名山の火山噴火により堆積した Hr-FA 軽石下の水田跡は同道遺跡 (60)、井出地区遺跡群 (52)、御布呂遺跡 (63)、菅谷石塚遺跡 (17)、畠跡は棟高遺跡群 (36) 等多くの遺跡で確認されている。

古墳時代後期～終末期には群集墳として毘沙門古墳群 (47)、足門村西古墳群 (45)、鶴巻古墳群 (44)、北寝保窪古墳群 (43)、屋敷古墳群 (46) が築造の最盛期を迎える。その後、井出地区遺跡群 (52)、正観寺古墳群 (22) も７世紀代まで築造が継続する。古墳後期の円墳を検出した正観寺古墳群 (22)、オトウカ山古墳 (14)、諸口遺跡群 (12) は本遺跡の南西方向に所在している。その古墳群内に展開する井出地区遺跡群 (52) や保渡田Ⅶ遺跡 (55) は縄文時代から中近世にかけての複合遺跡であり、井出地区遺跡群内では現在も調査がされている。西方 0.5km に在る堤上遺跡 (４) は古墳時代後期から平安時代後期の集落であり､本遺跡や隣接する棟高南八幡街道遺跡 (３) も含め、同時期の拠点および小規模集落として観ることができる。

奈良・平安時代

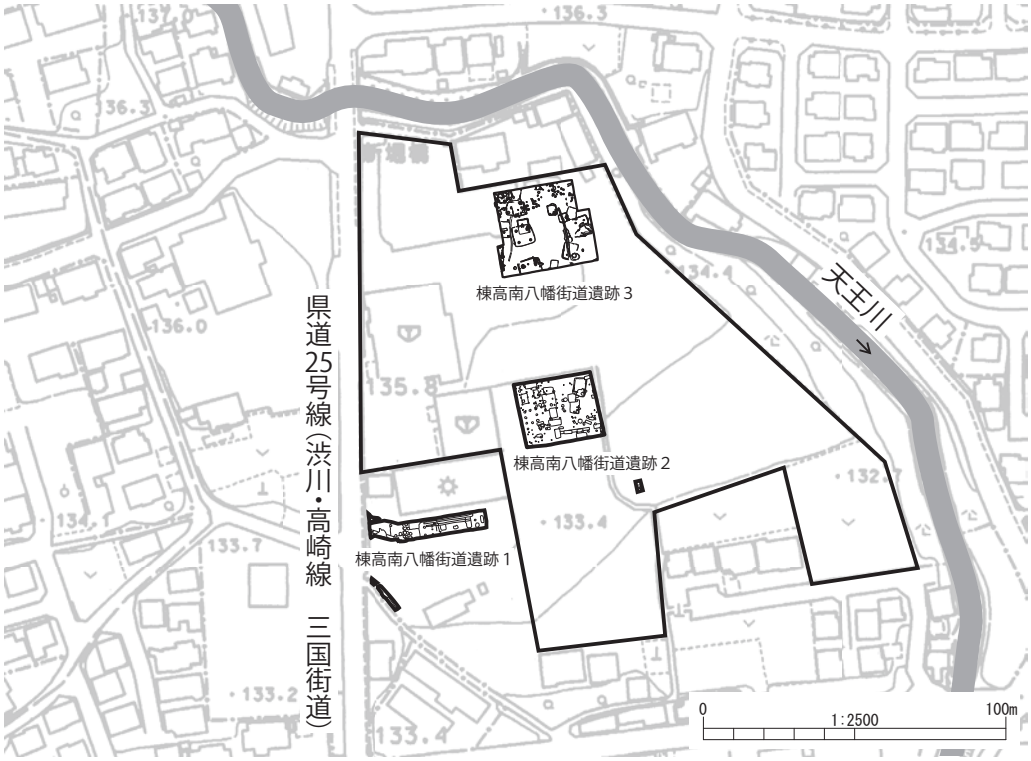
律令期の上野国の国府が置かれ、関連施設である上野国分僧寺 (32) や尼寺が建立され、交通網や居住域、生産域が規制されるようになった。当時の幹線道路として推定されている東山道駅路「国府ルート」は本遺跡の南方 1.7km を東西方向に走行するものと推測されている。高貝戸遺跡 (23)､福島飛地遺跡 (13)､正観寺遺跡群 (20) 等の周辺遺跡で検出された道路状遺構の存在から、９世紀後半に整備されたものと考えられている。本ルートの南方には時期がやや先行する「牛堀・矢ノ原ルート」も確認されている。居住域や交通網は律令体制の影響を受けたと考えられ、居住域の住居空白部 (上野国分僧寺 (32) 周辺) や住居拡散 (周辺遺跡全域)、住居集中範囲 (正

観寺遺跡群 (20)、菅谷地区遺跡群 (24)、菅谷・村東遺跡 (26)) といった形態が観られるようになったものと理解される。生産遺構として確認されている正観寺西原遺跡 (16)、棟高辻久保遺跡 (34)、同道遺跡 (60)、三ツ寺Ⅱ遺跡 (57)、井出村東遺跡 (59)、芦田貝戸遺跡 (66) は天仁元年 (1108 年) 噴火の As-B 軽石により埋没した水田跡を検出している。いずれも低地に居住域を展開する拠点遺跡に隣接するように設営されている。

棟高村北遺跡 (69) では災害の痕跡が認められ、確認された地割れが 7 世紀後半から 11 世紀前半代までの範囲に該当することから、文献や周辺地の調査を踏まえ、818 年 (弘仁 9 年) の地震痕跡としている。

中世以降

本遺跡の南方 300m には「胸形神社」が所在し、神社周辺は戦前まで「棟高館址」として推定されていた場所である。天王川と中島川に挟まれた微高地状の台地が棟高館址と伝承されている。胸形神社は『上野国神名帳』(尾崎喜佐雄著) に「胸形神社は神名帳総社本に『従四位　胸形明神』と記載されており、九州博多の宗像神社の分祀されたものであろう」と記述されている。天王川の新堀以南は棟高館址の北・東堀にあたり、現況ではクランク状に屈曲している。中世末期、村の防御と併せ水田の灌漑用に掘られたと考えられている。本遺跡は出土遺物や覆土、重複関係から検出した遺構は中世のものも多く、棟高館址と何らかの関わりを持つ遺構と推測される。南西 2.4km には寺ノ内館 (65) があり、13 世紀中頃の聖観音座像を出土しており長野氏武士団の居館で室町時代の遺構と考えられている。本郭は 116m、108m、幅 5 ～ 7 m の堀の方形館、掘立柱建物 18 棟、柵列、土坑、井戸、ピットが検出している。また、隣接する棟高南八幡街道遺跡 2 (2) では室町時代に該当する掘立柱建物群や竪穴状遺構が確認され、断片的であるものの集落的な様子が見受けられた。西方 1.2km には近現代の戦争遺跡として格納庫や対空機関砲が設置された掩体壕を調査した棟高辻久保遺跡 (34) があり、周辺は陸軍前橋飛行場として広大な敷地を占めていた。



第 2 図　棟高南八幡街道遺跡群配置図

第３図　　棟高南八幡街道遺跡３　周辺遺跡

周辺遺跡

１：棟高南八幡街道遺跡３、２：棟高南八幡街道遺跡２、３：棟高南八幡街道遺跡、４：堤上遺跡、５：中林遺跡、６：三ツ寺大下遺跡群、７：南部遺跡群（西浦北遺跡など）、８：西浦南遺跡、９：雨壺遺跡、10：大八木・伊勢廻遺跡２、11：大八木箱田池遺跡、12：諸口遺跡群、13：福島飛地遺跡（推定東山道）、14：オトウカ山古墳、15：小八木志志貝戸遺跡、16：正観寺西原遺跡、17：菅谷石塚遺跡、18：菅谷石塚Ⅱ遺跡、19：菅谷遺跡、20：正観寺遺跡群、21：小八木村東遺跡、22：正観寺古墳群、23：高貝戸遺跡（推定東山道）、24：菅谷地区遺跡群、25：菅谷城跡、26：菅谷・村東遺跡、27：稲荷台・北金尾遺跡、28：菅谷万年貝戸遺跡、29：国府南部遺跡群、30：元総社西川・塚田中原遺跡、31：元総社西川遺跡、32：上野国分僧寺、33：引間六石遺跡、34：棟高辻久保遺跡、35：西三社免遺跡、36：棟高遺跡群、37：小池遺跡、38：後疋間遺跡群、39：西国分遺跡群、40：北谷遺跡、41：冷水村東遺跡、42：諏訪西遺跡、43：北寝保窪古墳群、44：鶴巻古墳群、45：足門村西古墳群、46：屋敷古墳群、47：毘沙門古墳群、48：保渡田遺跡、49：保渡田東遺跡、50：徳昌寺前遺跡、51：三ツ寺Ⅲ遺跡、52：井出地区遺跡群、53：保渡田八幡塚古墳（保渡田古墳群）、54：保渡田薬師塚古墳（保渡田古墳群）、55：保渡田Ⅶ遺跡、56：井出二子山古墳（保渡田古墳群）、57：三ツ寺Ⅱ遺跡、58：三ツ寺Ⅰ遺跡、59：井出村東遺跡、60：同道遺跡、61：道場遺跡群、62：浜川館、63：御布呂遺跡、64：寺ノ内遺跡、65：寺ノ内館、66：芦田貝戸遺跡、67：熊野堂遺跡、68：上野国分僧寺・尼寺中間地域、69：棟高村北遺跡

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物

1．調査区概観

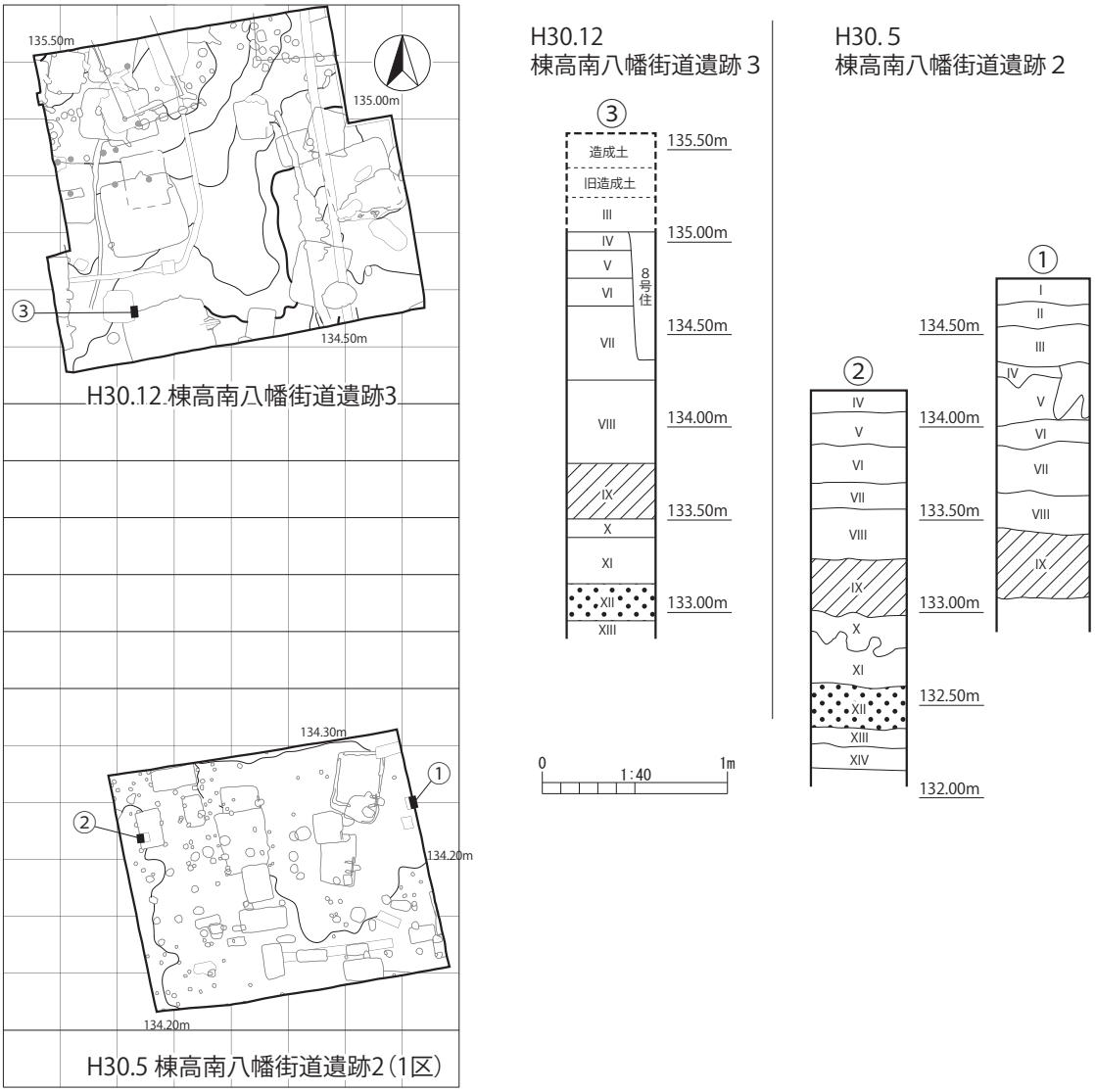
調査の外観

本遺跡では調査区全域に検出され、竪穴住居 22 軒、掘立柱建物２棟、溝２条、土坑５基、井戸１基、性格不明遺構２基、ピット 72 基を数える。カマドが確認された住居は 15 軒で、東カマドが８件、北カマドが１件、新旧の作り替えが認められる住居が１件、南東カマドが５軒ある。なお南東カマドの住居は平安時代に帰属するものであった。特筆されるものとしては９号と８号住居で、９号から８号住居に建て替えが指摘され、また、８号住居には柱穴の脇に柱の抜き取りによる排土痕跡が認められた。また、18 号住居には遺構の中央に鍛冶炉とみられる被熱痕跡があり、鍛造剥片が多数検出されている。掘立柱建物は２棟ともに遺構外となるが３×３間以上の建物となり、１号掘立柱建物は溝状掘方となる可能性がある。ピットは調査区の北に偏り、調査区外に広がりが予想され、さらに掘立柱建物となる可能性がある。中世の遺構は１号・２号溝、１号井戸、１号性格不明遺構があり、覆土には As-B 軽石を含み、出土遺物に在地系の軟質陶器が出土している。しかしながら、前回調査された棟高八幡街道遺跡２に比べ中世遺構は少なかった。本遺跡で検出された遺構は奈良・平安時代から中世までと考えられる。

第４図　棟高南八幡街道遺跡３　全体図

基本土層

基本土層は調査区に散在する撹乱部を深く掘り地山の観察を行った。土層観察箇所は８号住居北西にあたる土層とした。なお、本遺跡では開発により造成され、場所によって確認面付近まで砕石盛土となる箇所もあり、本来的な堆積は明瞭に把握できなかった。本遺跡の土層は同年５月の棟高南八幡街道遺跡２で行った土壌分析で確認された層位との対比を行っており、Ⅲ層からⅩⅢ層までの対比が可能となった。遺跡の地形は遺構確認面となるⅣ層下位付近では棟高南八幡街道遺跡２に比べ70㎝程高く、全体的には北西から南東に傾斜する傾向となり、天王川に沿う地形であったものとみられる。



基本層序　（棟高南八幡街道遺跡２より）

Ⅰ　暗褐色、しまりあり、粘性弱い、現耕作土。
Ⅱ　暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-B 軽石混在土。
Ⅲ　暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-B・As-C 軽石混在土。
Ⅳ　黄灰褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石混在土、遺構検出面は本層下位。
Ⅴ　橙灰色、しまりあり、粘性強い、灰白色軽石を含む、本層上位が遺構検出面。
Ⅵ　灰橙色、しまり強い、粘性弱い、灰白色軽石を多量に含む。
Ⅶ　灰橙色、しまり弱い、粘性強い、砂質粘質土の互層、地震等の影響か。
Ⅷ　灰黄白色、しまりあり、粘性強い、上位は灰白色砂質粘質土、下位は橙灰白色砂質粘質土。
Ⅸ　暗茶褐色、しまりあり、粘性強い、粗粒の灰白色軽石 (As-Sj) を多量に含む上位は軽石が少なく、下位に進むにつれ軽石の量が増す。
Ⅹ　淡茶褐色、しまりあり、粘性強い、所謂漸移層。
ⅩⅠ　橙灰褐色、しまりあり、粘性強い、砂質粘質土。
ⅩⅡ　灰白色、しまり弱い、粘性あり、軟質、淡黄白色の軽石層 (As-YP) を極めて多量に含む。
ⅩⅢ　橙灰褐色、しまりあり、粘性あり、砂質粘質土。
ⅩⅣ　橙灰褐色、しまりあり、粘性強い、砂質粘質土。
ⅩⅤ　青灰色、しまり非常に強い、粘性あり、硬質の砂質土。

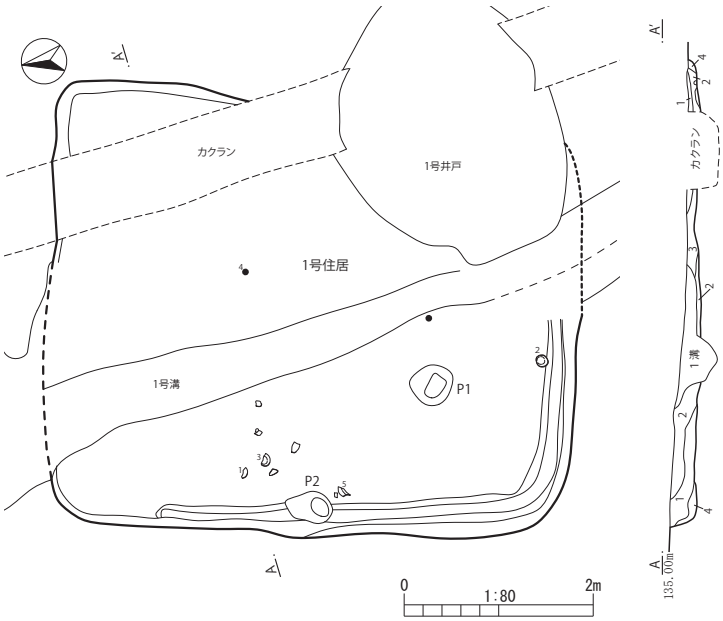
第５図　棟高南八幡街道遺跡２・３　基本層序

２．竪穴住居

竪穴住居は 22 軒が検出された。竪穴住居は奈良時代が 13 軒、平安が 7 軒、時期不明が 1 件である。住居の重複は 4 号住居が 2 号・5 号住居、10 号住居が 9 号住居、12 号住居が 11 号・13 号住居、17 号住居が 15 号住居である。

１号住居

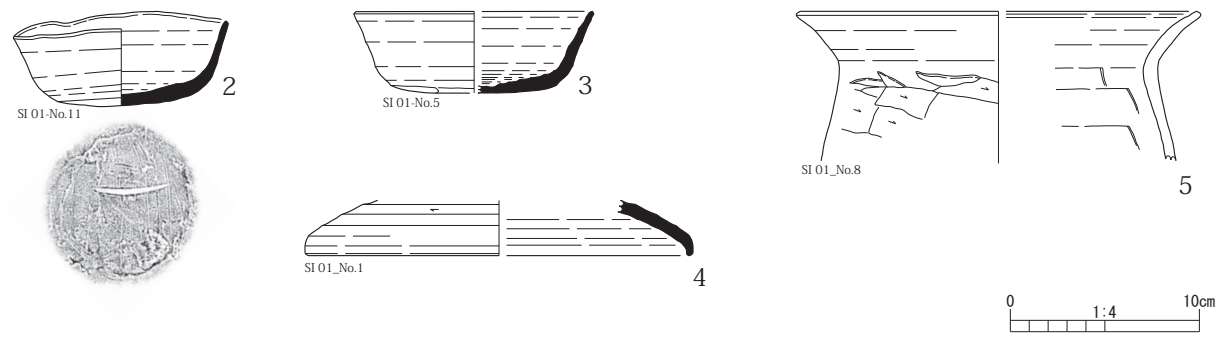
位置　調査区南東部の F-5,6,G-5 区から検出。**状況**　南北方向の撹乱溝が 1 条、遺構は 1 号溝 (新) → 1 号井戸 → 1 号住居 (古) の順で切り合っている。**形状・規模**　東西辺が長い長方形住居。長軸 544㎝、短軸 468㎝、深さ 28㎝。方位 N-12° -E。**床面**　張り床層は確認されていない。**柱穴**　２基検出されている。**カマド**　検出されない。**貯蔵穴**　検出されていない。**壁周溝**　南から西にかけて検出されている。**遺物**　土器は破片類で 147 点、土師器坏、須恵器坏など 5 点を図化掲載した。**時期**　出土遺物から 7 世紀後半代と考えられる。



１号住居
1．住居覆土、褐灰色、しまりあり、粘性あり、As-C 粒多量、焼土粒多量、黄褐色ブロック多量。
2．住居覆土、灰黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 粒少量、黄褐色ブロック微量。
3．住居覆土、褐灰色、しまりあり、粘性弱い、As-C 粒多量。
4．住居覆土、褐灰色、しまりあり、粘性あり、As-C 粒多量、焼土粒多量、黄褐色ブロック少量。

１号住居ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
1 住 -P1	44	41	11
1 住 -P2	51	32	14



第 6 図　1 号住居及び出土遺物

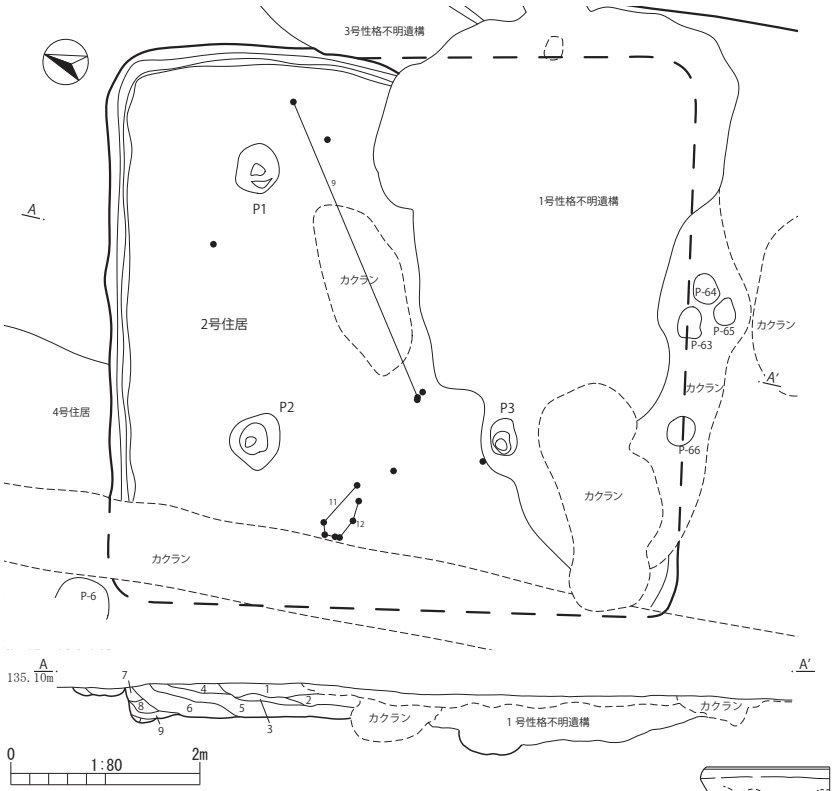
第 1 表　1 号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ) ・底径 (幅) ・器高 (厚さ) ＝cm

掲載 No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
1	1 号住居	覆土	土師器坏	3/8	(11.0)・—・(2.9)	明赤褐色	雲母・白色粒	体部外面手持ちヘラケズリ 内面横ナデ	
2	1 号住居	覆土	須恵器坏	完形	11.2・7.3・4.9	明褐色	白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ 「二」ヘラ記号	
3	1 号住居	覆土	須恵器坏	1/2	(13.4)・(8.8)・(4.3)	褐灰色	白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ 弱丸底、ロクロ目強	
4	1 号住居	床面	須恵器蓋	口縁部片	(20.0)・—・(2.9)	灰色	雲母・白色粒	体部外面回転ヘラケズリ	
5	1 号住居	覆土	土師器甕	口縁～胴部片	(21.0)・—・(7.9)	明褐色	雲母・白色粒	胴部外面上端横位ヘラケズリ 内面横ナデ	

２号住居

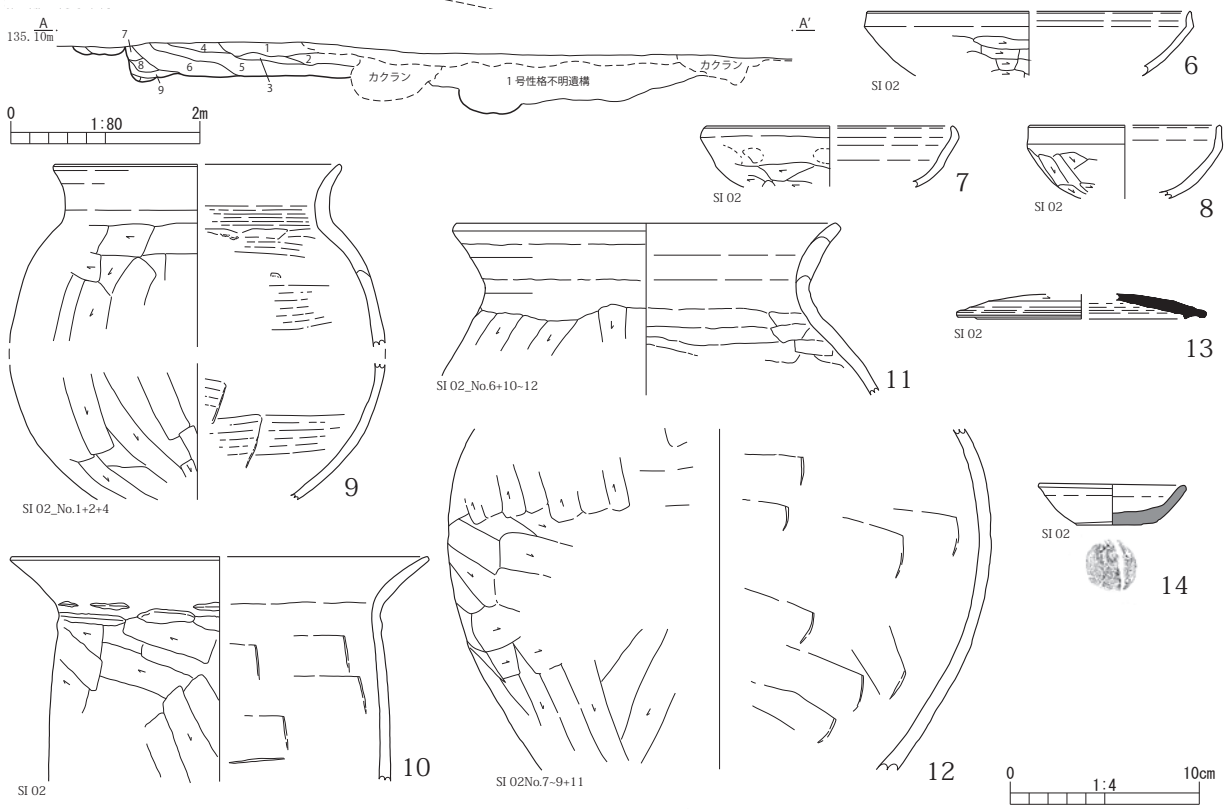
位置　調査区東辺中央の F,G-3,4 区より検出。４号住居と重複する。**状況**　南北方向の撹乱溝１条、住居中央に撹乱土坑２基あり。遺構は新しい順から１号性格不明遺構→３号性格不明遺構→４号住居→２号住居と切り合っている。**形状・規模**　やや南北方向が長い住居。長軸 (510)㎝、短軸 (440)㎝、住居の検出深さ 36㎝。方位 N-70°-E。**床面**　貼り床の土層はない。**柱穴**　３基検出される。**カマド**　住居東辺の南側に存在すると考えられたが１号性格不明遺構により壊されていると考えられる。**貯蔵穴**　検出されない。**壁周溝**　北東部に検出される。**遺物**　土師器、須恵器破片 295 点出土。土師坏３点、須恵器の坏、坏蓋各１点、土師器の甕３点合計８点を掲載した。**時期**　４号住居より古く、出土遺物から７世紀中頃と考えられる。



２号住居
1．住居覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリアブロック状大粒。
2．住居覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量。
3．住居覆土、暗褐色、しまりあり、粘性強い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア少量。
4．住居覆土、暗褐色、しまりあり、粘性強い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量。
5．住居床面、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、炭化物少量。
6．住居床面、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、炭化物多量含む。
7．住居壁隅、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリアブロック状含む。
8．住居壁隅、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア多量。
9．住居壁隅、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、炭化物含む。

２号住居ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
２住 -P1	53	45	53
２住 -P2	57	51	66
２住 -P3	39	28	80



第７図　２号住居及び出土遺物

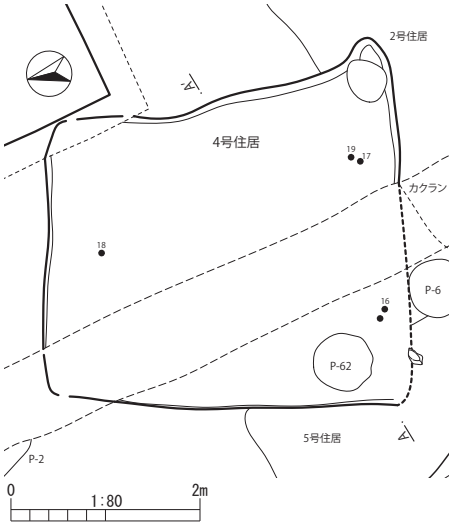
第２表　２号住居出土遺物観察表

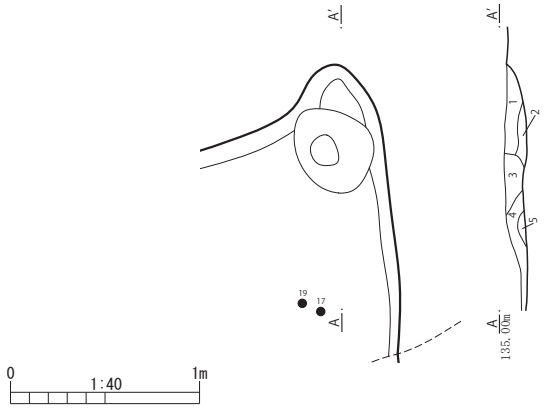
各単位は口径 (長さ) ・底径 (幅) ・器高 (厚さ) ＝cm

掲載No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
6	２号住居	覆土	土師器 坏	口縁～体部片	(17.0)・―・(3.4)	橙色	雲母・白色粒	体部外面手持ちヘラケズリ	
7	２号住居	覆土	土師器 坏	口縁～底部片	(13.0)・―・(3.2)	明赤褐色	雲母・白色粒	体部外面上端指頭痕・下端手持ちヘラケズリ、内面横ナデ	
8	２号住居	覆土	土師器 坏	口縁～底部片	(10.0)・―・(3.9)	にぶい黄褐色	雲母・白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ	
9	２号住居	覆土	土師器 甕	口縁～胴部片	(15.0)・―・(17.7)	にぶい橙色	雲母・白色粒・小礫	胴部外面黒斑 内面横ナデ	２片合成 (口縁～胴部＋胴下部)
10	２号住居	覆土	土師器 甕	口縁～胴上部	(22.0)・―・(10.9)	明褐色	雲母・白色粒	胴部外面上端横位ヘラ・中場斜位ヘラ、内面横ナデ	
11	２号住居	覆土	土師器 甕	口縁～胴部片	20.0・―・(9.1)	明黄褐色	白色粒・赤色粒・雲母	胴部外面上端縦位ヘラ 内面横ナデ	
12	２号住居	覆土	土師器 甕	胴部片	―・―・(18.0)	明黄褐色	雲母・白色粒	胴部外面斜位ヘラケズリ 内面横ナデ	
13	２号住居	覆土	須恵器 蓋	1/4	(13.0)・―・(1.3)	褐灰色	白色粒	天井部回転ヘラケズリ	口縁部かえりあり
14	２号住居	覆土	須恵器 小皿	1/2	7.6・4.4・2.1	にぶい黄橙色	雲母・石英・白色粒	底部外面回転糸切り離し	

４号住居

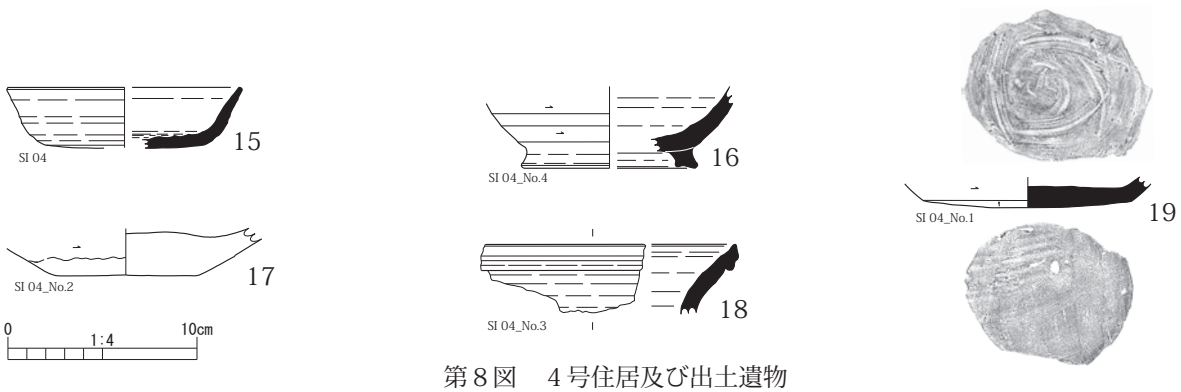
位置　調査区東辺部、F-2,3 区より検出。**状況**　住居の中央を南北に撹乱溝が切っている。５号住居が一番古く、続いて２号住居が古く、４号住居が一番新しい住居である。**形状・規模**　東西辺がやや長い住居。長軸 388㎝、短軸 372㎝、深さ 16㎝を測る。方位 N-16°-E。**床面**　貼り床堆積層なし。**柱穴**　検出されない。**カマド**　南東隅に造られる。軸方位はN-105°-E。**貯蔵穴**　検出されない。**壁周溝**　検出されない。**遺物**　土器類破片 52 点出土。須恵器の坏２点、甕破片２点、土師器の甕１点の計５点を掲載した。**時期**　出土遺物から８世紀代と考えられる。





４号住居
１．覆土、褐色、しまりあり、粘性ややあり、焼土粒多量。
２．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性ややあり、As-C 粒多量、焼土粒多量。

４号住居カマド
１．褐灰色、しまりあり、粘性ややあり、焼土粒多量。
２．赤褐色、しまりあり、粘性ややあり、As-C 粒少量、焼土粒少量。
３．褐灰色、しまりあり、粘性あり、As-C 粒少量、焼土粒少量。
４．赤褐色、しまりあり、粘性あり、白色粘土多量、焼土粒ブロック少量。
５．灰黄褐色、しまりあり、粘性ややあり、焼土粒多量。



第８図　４号住居及び出土遺物

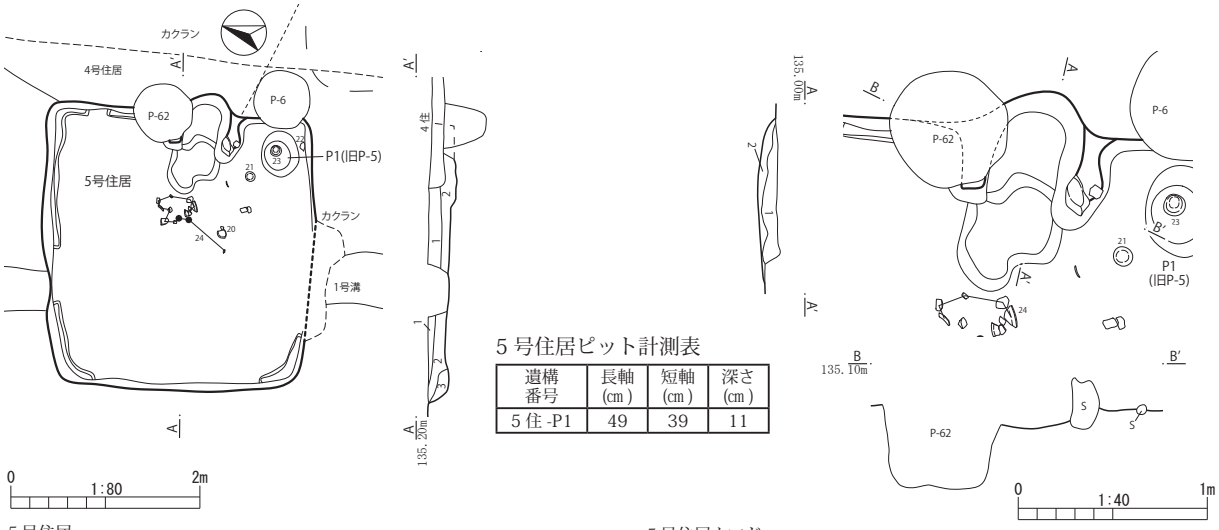
第３表　４号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝cm

掲載No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
15	４号住居	覆土	須恵器坏	1/4	(12.0)・(8.2)・(3.2)	褐灰色	白色粒	口～体部直線的 底部外面静止ヘラケズリ	
16	４号住居	床面	須恵器長頸壺	体～高台部片	―・(9.0)・(4.3)	内：褐灰色 外：黒褐色	白色粒	胴部外面下端回転ヘラケズリ 自然釉	ハの字状高台
17	４号住居	覆土	土師器壺	底部	―・7.6・(2.5)	にぶい黄橙色	雲母・白色粒	胴部外面下端横位ヘラ	
18	４号住居	覆土	須恵器甕	口縁部片	―・―・(3.7)	灰白色	黒色片岩	口縁部内面回転横ナデ	
19	４号住居	覆土	須恵器甕	底部片	―・(11.0)・(1.1)	褐灰色	白色粒	底部外面ヘラ・胴部下端回転ヘラ	

５号住居

位置　調査区東辺中央部の E,F-3 区より検出。　**状況**　住居の中央を１号溝が南北に切る。５号住居が古く新しい４号住居がカマド付近に重なる。**形状・規模**　東西辺が短い長方形住居。長軸 316㎝、短軸 290㎝、深さ 26㎝。方位 N-75°-E。**床面**　床面貼り床層なし。**柱穴**　検出されていない。**カマド**　東壁のほぼ中央に造られる。軸方位は N-90°-E。**貯蔵穴**　カマド右袖に検出されている。**壁周溝**　北部、北東部、南西部に浅く検出。**遺物**　土器類 16 点出土。土師器の坏４点、長甕上半部１点を掲載した。**時期**　出土遺物から６世紀末から７世紀初めの所産と考えられる。

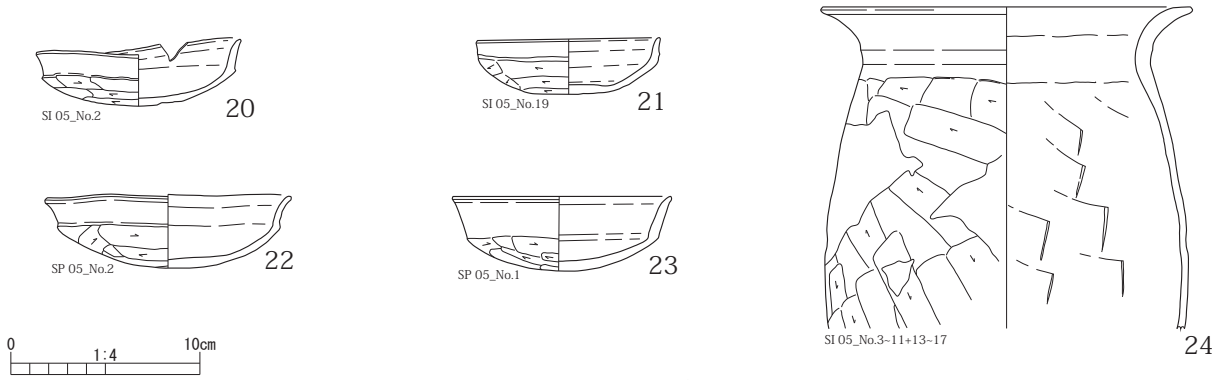


５号住居ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
５住 -P1	49	39	11

５号住居
1．覆土、褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 粒少量、焼土粒少量含む。
2．覆土、暗黄褐色、しまりあり、粘性あり、白色粘土多量、焼土粒ブロック少量含む。
3．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性ややあり、焼土粒多量に含む。

５号住居カマド
1．赤褐色、しまりあり、粘性なし、灰多量含む、焼土多量に含む。
2．褐灰色、しまりあり、粘性なし、焼土粒多量に含む、灰多量に含む。



第９図　５号住居及び出土遺物

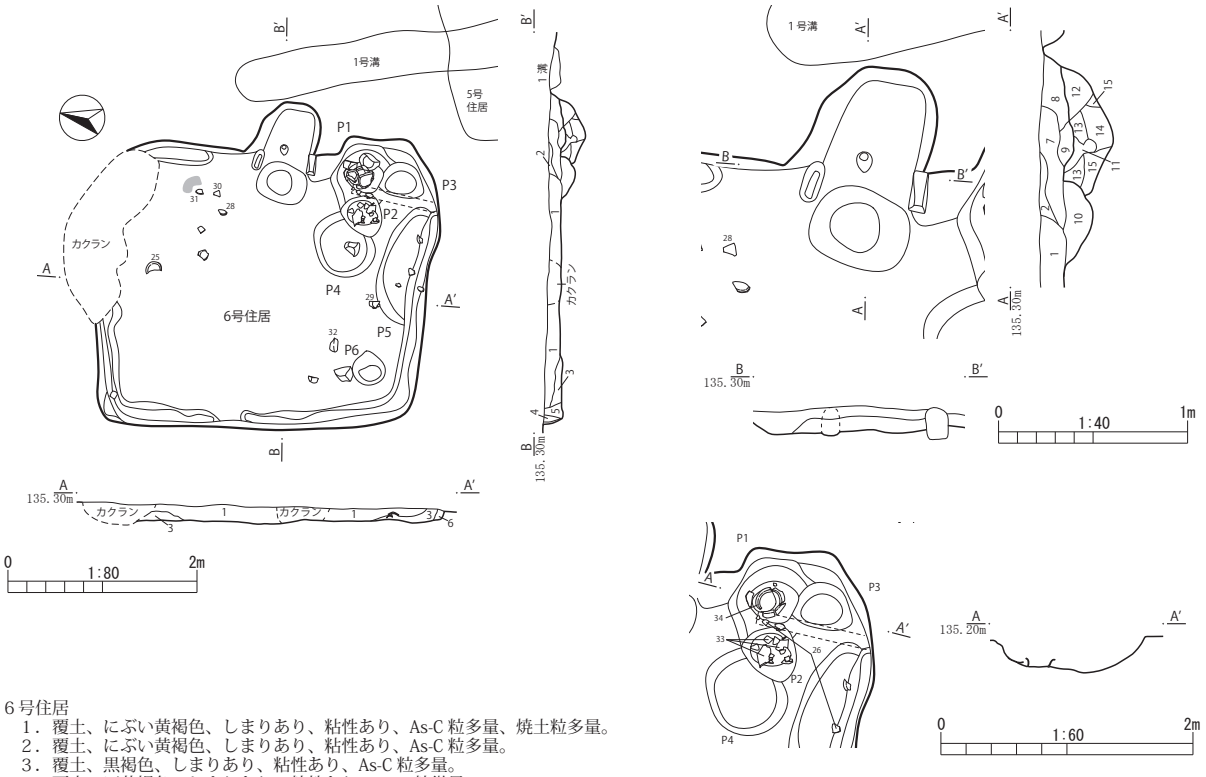
第４表　５号住居出土遺物観察表

各単位は口径（長さ）・底径（幅）・器高（厚さ）＝cm

掲載No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
20	５号住居	床面	土師器坏	ほぼ完形	10.8・―・2.8	橙色	長石・雲母・石英・白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ	
21	５号住居	床面	土師器坏	完形	9.6・―・2.9	明赤褐色	小礫・雲母・長石・白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ、内面横ナデ	
22	５号住居	貯穴	土師器坏	口縁～底部	12.8・―・3.9	橙色	雲母・石英・白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ	
23	５号住居	貯穴	土師器坏	ほぼ完形	11.4・―・4.0	橙色	雲母・石英・白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ	
24	５号住居	床面	土師器甕	口縁～胴部片	19.4・―・(17.0)	灰褐色	雲母・白色粒	胴部外面上場横位ヘラ・中場斜位ヘラ、内面横ナデ	

６号住居

位置　調査区北東寄りのE-2,3区から検出。**状況**　住居北辺は撹乱土坑。東辺カマドに接して１号溝が南北に走る。**形状・規模**　東西辺が長い住居。長軸350㎝、短軸300㎝、深さ22㎝。方位N-78°-E。**床面**　貼り床土層なし。**柱穴**　ない。**カマド**　東壁のほぼ中央に造られる。両袖に袖石座る。カマド外に灰掻き穴あり。カマドの軸方位はN-95°-E。**貯蔵穴**　Ｐ１～Ｐ５まで貯蔵穴。他に南辺下にＰ５土坑。南西隅にＰ６土坑あり。**壁周溝**　東壁の一部以外。**遺物**　土器片210点出土。土師器坏２点、須恵器坏２点、須恵器の坏蓋１点、土師器長甕上半部２点、須恵器長頸瓶体部１点の合計８点を掲載した。**時期**　出土遺跡から８世紀の前半代と考えられる。

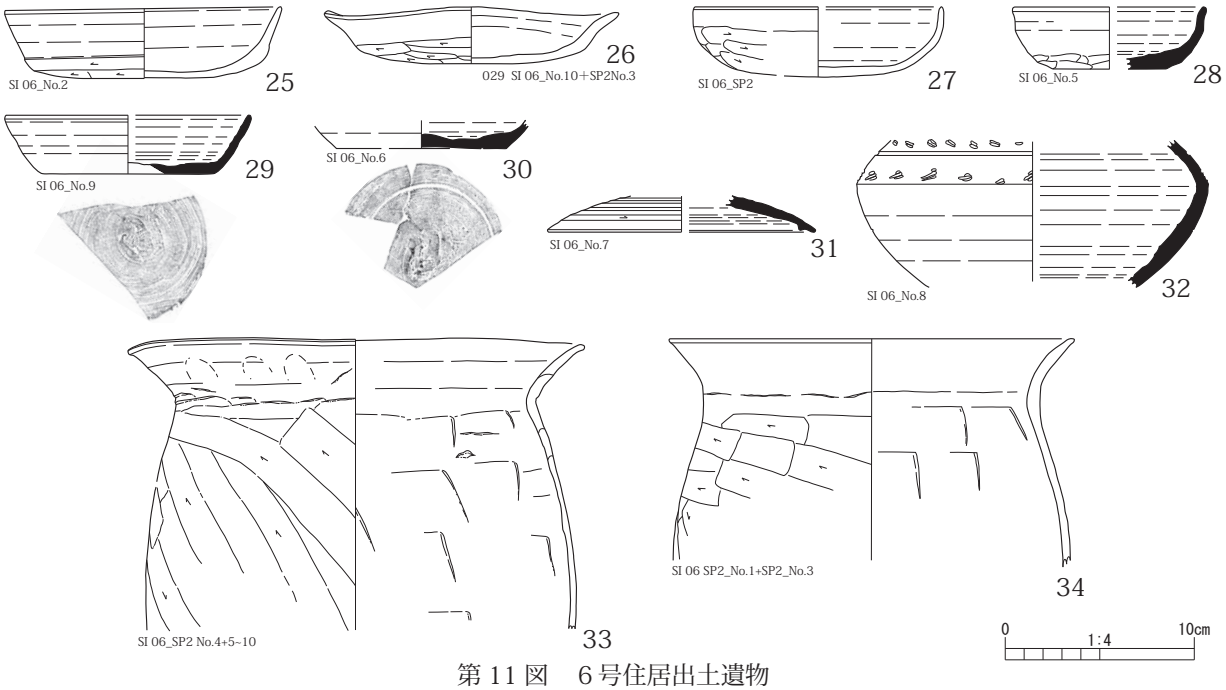


６号住居
1．覆土、にぶい黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C粒多量、焼土粒多量。
2．覆土、にぶい黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C粒多量。
3．覆土、黒褐色、しまりあり、粘性あり、As-C粒多量。
4．覆土、灰黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C粒微量。
5．覆土、明黄褐色、しまりあり、粘性あり、黄褐色ブロック微量。
6．覆土、明黄褐色、しまりあり、粘性あり、黄褐色ブロック少量。
7．カマド、褐色、しまりあり、粘性あり、As-C粒微量、焼土粒ブロック多量。
8．カマド、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C粒微量、焼土粒・ブロック少量。
9．カマド、黒褐色、しまりあり、粘性あり、As-C粒微量、焼土粒・ブロック、灰層微量。
10．カマド、暗灰褐色、しまりあり、粘性あり、As-C粒微量、焼土粒多い。
11．カマド、灰褐色、しまりあり、粘性あり、As-C粒微量、焼土粒・ブロック微量。
12．カマド、灰褐色、しまり少ない、粘性ない、As-C粒微量、焼土粒・ブロック少量。
13．カマド、灰赤褐色、しまりない、粘性ない、As-C粒微量、焼土粒・ブロック少量。
14．カマド、赤褐色、しまりない、粘性ない、As-C粒微量、焼土粒少ない。
15．カマド、赤褐色、しまりない、粘性ない、As-C粒微量、焼土粒多い。

６号住居ピット計測表

遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
６住-P1	41	32	8
６住-P2	44	38	16
６住-P3	(45)	38	13
６住-P4	70	60	10
６住-P5	126	(34)	10
６住-P6	37	35	23

第10図　６号住居



第 11 図　6 号住居出土遺物

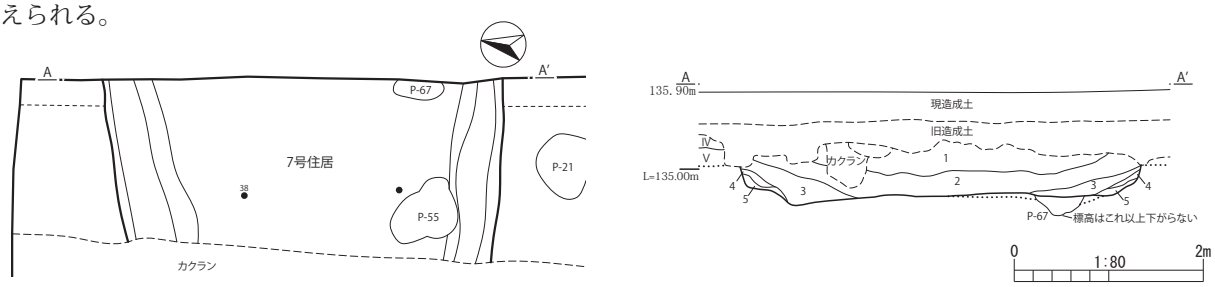
第 5 表　6 号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝cm

掲載No.	遺構名	出土位置 (注記)	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
25	6 号住居	覆土	土師器坏	3/5	14.5・—・3.7	明赤褐色	長石・雲母・白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ 黒色	
26	6 号住居	貯穴 (P1)	土師器皿	口縁～底部	(15.5)・—・(3.0)	橙色	雲母・白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ	北武蔵型皿
27	6 号住居	貯穴	土師器坏	3/5	12.8・—・3.7	橙色	石英・雲母・白色粒	体～底部外面手持ちヘラケズリ	
28	6 号住居	覆土	須恵器坏	口縁～底部片	(9.8)・(6.0)・(3.3)	褐灰色	片岩・白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ	
29	6 号住居	No.9	須恵器坏	口縁～底部	(12.8)・(9.0)・(3.1)	褐灰色	黒色岩片・白色粒	口縁～体部直線的 底部外面全面回転ヘラケズリ	
30	6 号住居	覆土	須恵器坏	体～底部	—・(9.0)・(1.5)	にぶい黄橙色	赤色岩片・白色粒	底部外面全面回転ヘラケズリ	
31	6 号住居	覆土	須恵器蓋	天井～口縁部	(14.0)・—・(1.9)	褐灰色	白色粒	体部～天井部回転ヘラケズリ	口縁部内面かえりあり
32	6 号住居	覆土	須恵器長頸瓶	肩～胴部	—・—・(7.4)	灰白色	黒色岩片・白色粒	胴部外面沈線 2 条 刺突痕？・自然釉	
33	6 号住居	貯穴 (P2)	土師器甕	口縁～胴部	23.7・—・(15.5)	赤褐色	雲母・石英・白色岩片	胴部外面上端横位ヘラケズリ・中場斜位ヘラケズリ、内面横ナデ	
34	6 号住居	貯穴 (P1)	土師器甕	口縁～胴部	(21.4)・—・(11.7)	橙色	雲母・白色粒・赤色岩片	胴部外面上端横位ヘラケズリ・中場斜位ヘラケズリ、内面横ナデ	

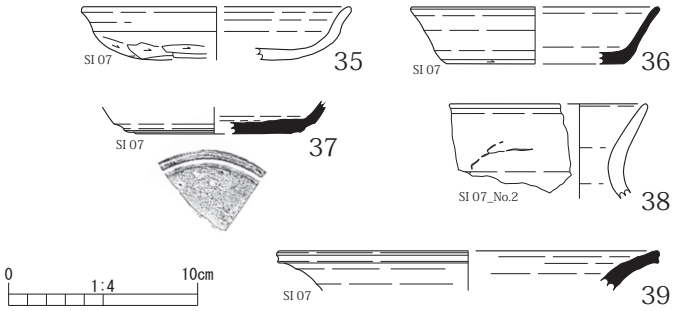
7 号住居

位置　調査区北東隅の F-1 地区から検出。**状況**　撹乱溝が住居西辺を走る。**形状・規模**　北辺と南辺に平行する壁がある。東壁の長軸 (420)㎝、南壁の短軸 (190)㎝、深さ 56㎝。方位 N-11°-W。**床面**　床面直上に薄い土層残る。**柱穴**　住居以前の 2 号掘立柱建物のピット P 55 と P 67 あり。**カマド**　検出されていない。**貯蔵穴**　検出されていない。**壁周溝**　南東隅、北東部以外に検出される。**遺物**　土器破片 169 点出土。土師器坏 1 点、須恵器坏 2 点、土師器の長甕口縁一部 1 点、須恵器甕口縁部 1 点の合計 5 点を掲載した。**時期**　出土遺物から 8 世紀前半代と考えられる。



第 12 図　7 号住居

7号住居
1．覆土、褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量含む。
2．覆土、褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア少量、炭化物少量含む。
3．覆土、褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量　炭化物多量に含む。
4．壁隅、褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量　炭化物少量含む。
5．壁隅、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック多量に含む。



第 13 図　7号住居出土遺物

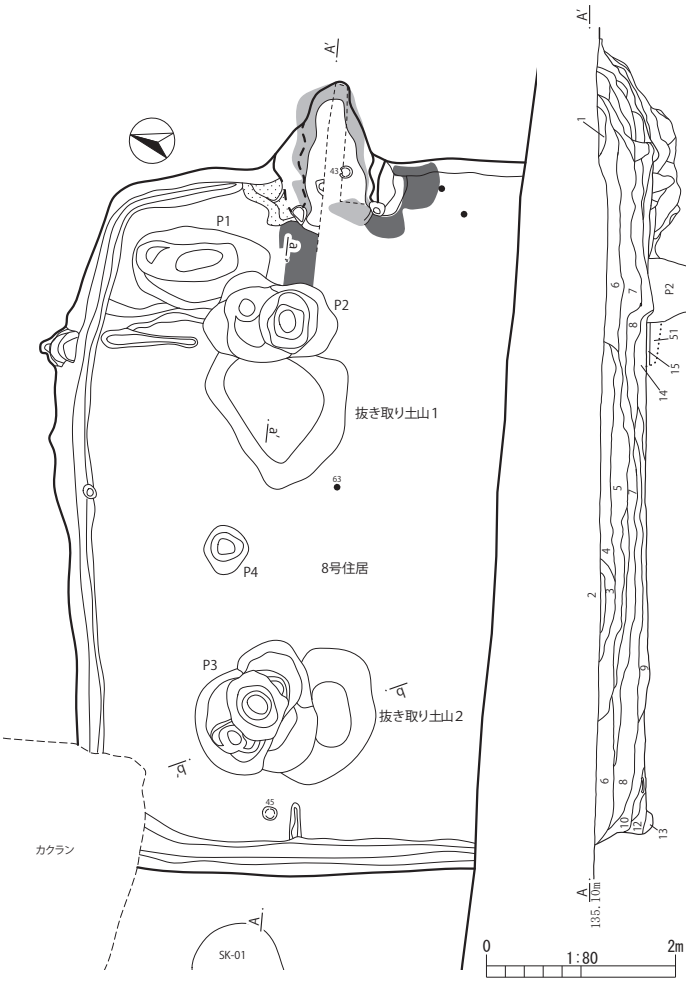
第6表　7号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ) ・底径 (幅) ・器高 (厚さ) ＝cm

掲載No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
35	7号住居	覆土	土師器 坏	口縁～底部	(14.0)・—・(2.8)	にぶい橙色	雲母・石英・白色粒	底部外面手持ちヘラケズリ	
36	7号住居	覆土	須恵器 坏	口縁～底部片	(13.0)・(9.4)・3.0	褐灰色	白色粒	口縁部直線的 底部外面回転ヘラケズリ	
37	7号住居	覆土	須恵器 坏	底部片	—・(8.2)・(1.4)	褐灰色	白色粒	底部外面全面回転ヘラケズリ	
38	7号住居	覆土	土師器 甕	口縁部片	—・—・(4.7)	明赤褐色	雲母・白色粒	口縁部横ナデ	
39	7号住居	覆土	須恵器 甕	口縁部片	(20.0)・—・(2.1)	褐灰色	片岩・白色粒	内面横ナデ	

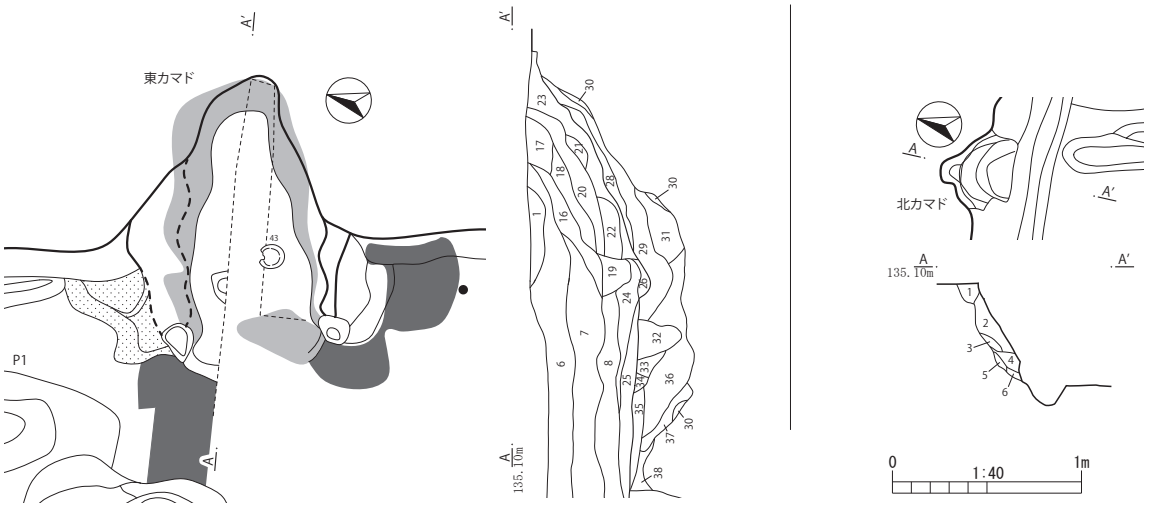
8号住居

位置　調査区南端西部に位置する。**状況**　南半調査区外。**形状・規模**　竪穴部の平面形は方形で、東西 760㎝、南北は調査区外にかかるために不明だが、最大 470㎝までを確認した。深さは 54㎝、方位Ｎ -77°- Ｅ。柱穴の位置を勘案すれば、ほぼ正方形の竪穴部と推定され、北隣の９号住居と同等の規模と形態であったと考えられる。**床面**　全体に締りが良いが、東側のカマド前を中心に貼り床状の硬化面が発達している。また、西辺北寄りと北辺東寄りには竪穴壁に直行した小溝があり、転ばし根太の痕跡と考えれば西辺と北辺の壁際は板張り床であったと考えられ、状況的には新段階の東カマド段階に伴うらしい。**柱穴**　３か所確認しており、Ｐ２とＰ３は主柱穴、Ｐ４は補助柱穴と考えられる。Ｐ２・Ｐ３は深く大きく、柱のアタリが２ケ所認められ、断面観察では深い方のアタリが古く、浅い方が新しい。また、Ｐ２・Ｐ３の最大の特長は、柱抜き取りに伴う残土の山 (図中では抜き取り土山) の存在である。竪穴部の掘り下げ途中から地山土の集中として認識されたもので、Ｐ２・Ｐ３共に竪穴部の内側に形成されていることから、上屋の架かった状況下で柱の根入りを掘っ



第 14 図　8号住居①

たようである。**カマド**　北辺東寄りと東辺北寄りに２ケ所確認され、北辺のそれ(北カマド)が古く、東辺のそれ(東カマド)の方が新しい。北カマドは燃焼室奥壁から煙道への移行部分のみ残存で、煙道は垂直に近く立ち上がる構造であったらしい。東カマドは非常に残りが良く、多量の灰層を伴っている。(詳細はＶ章にて補説する)**貯蔵穴**　Ｐ１は北カマドに伴うと思われる貯蔵穴で、南北軸の長楕円形プラン、地山ブロック主体土で埋め戻されていた。北隣９号住居のそれと形態的に類似している。東カマドに伴う貯蔵穴は確認できなかった。**壁周溝**　東カマドの南側以外で確認された。基本的に新段階の東カマド段階に伴う造作と考えられるので、東カマドの南側(左側)に壁周溝が無いということは、東カマドの左右で壁構造が異なっていた傍証と言える。つまり東辺には二つ以上のカマドが並んでいた可能性があり、カマド間の壁構造は他の壁と異なる構造であったと考えられる。**遺物**　996点の土器片が出土しているが、大半は竪穴覆土中から出土した接合率の低いものである。東カマド対面の床面上から出土した土師器坏(45)は完形で、出入口付近に置かれた雰囲気である。(出土遺物についてはＶ章にて補説)　**時期**　出土遺物から８世紀初頭と考えられる。



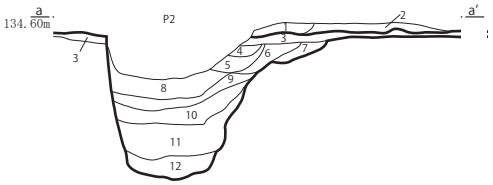
８号住居
1．覆土、褐灰色、しまりあり、粘性強い、白色軽石少量、焼土粒微量、上層にやや少量のAS-B含み撹乱あり。
2．覆土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、黄色強く、焼土粒中量、白色軽石少量。
3．覆土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、焼土粒中量、白色軽石少量、黄褐色土多量に含む。
4．覆土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、褐色強く、焼土粒中量、白色軽石少量、黄色土含む。
5．覆土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、焼土粒中量、白色軽石少量、黄色地山土含む。
6．覆土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、焼土粒少量、白色軽石少量、黄色地山土含む。
7．覆土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、焼土粒中量、白色軽石少量、黄色地山土含む。
8．覆土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、焼土粒多量、白色軽石少量、黄色地山土含む。
9．覆土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、焼土粒中量、白色軽石少量、黄色地山土含む。
10．三角堆積土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、黄褐色地山、焼土粒中量、白色軽石少量。
11．三角堆積土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、焼土粒中量、白色軽石少量、黄色地山土含む。
12．三角堆積土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、焼土粒中量、白色軽石少量、黄色地山土含む。
13．三角堆積土、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、暗色粘質が強、軽石、焼土粒少ない。
14．抜き取り土山、黄褐色、しまりあり、粘性強い、黄褐色粘土質土多量、焼土粒中量、白色軽石少量。
15．貼り床、にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、黄色土強く、焼土粒少量、白色軽石少量含む。
16．東カマド、灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、焼土粒少量、白色軽石少量、地山(黄色土)中量。
17．東カマド、にぶい黄褐色、しまりあり、粘性強い、焼土粒中量、白色軽石少量、地山(黄色土)多量。
18．東カマド、灰黄褐色、しまりあり、粘性あり、焼土粒微量、地山(黄色土)ブロック主体。
19．東カマド、灰黄褐色、しまりややあり、粘性あり、地山(黄色)主体、焼土粒少量、カマド構築材。
20．東カマド、赤褐色、しまり弱い、粘性あり、焼土主体、焼土粒多量。
21．東カマド、暗赤褐色、しまり弱い、粘性あり、焼土粒主体、カマド構築材。
22．東カマド、明赤褐色、しまりなし、粘性あり、焼土主体、カマド構築材。
23．東カマド、褐灰色、しまりなし、粘性やや弱い、灰多量、焼土ブロック多量、灰層。
24．東カマド、褐灰色、しまりなし、粘性あり、灰多量、焼土ブロック微量、流入土。
25．東カマド、赤褐色、しまり弱い、粘性あり、焼土主体、焼土粒多量、カマド構築材。
26．東カマド、灰黄褐色、しまりなし、粘性あり、灰多量、焼土粒少量、支脚痕。
27．東カマド、明赤褐色、しまりなし、粘性あり、焼土主体、カマド構築材。
28．東カマド掘方、灰黄褐色、しまりあり、粘性あり、焼土粒多量、灰多量、掘方上層、上面が使用面。
29．東カマド掘方、灰黄褐色、しまりあり、粘性あり、焼土灰層多量、掘方中層。
30．東カマド掘方、黄褐色ブロック、しまりあり、粘性あり、地山ブロック層主体でやや褐色土含む。
31．東カマド掘方、暗褐色、しまりあり、粘性あり、焼土灰層多量、掘方下層。
32．東カマド掘方、暗灰褐色、しまりなし、粘性なし、ざらざらした白色軽石多量に含む、焼土少量含む。
33．東カマド掘方、暗赤褐色、しまりなし、粘性なし、白色軽石少量、焼土粒少量、焼土灰少量含む。
34．東カマド掘方、暗灰褐色、しまりなし、粘性なし、白色軽石多量に含む、焼土少量含む。
35．東カマド掘方、暗赤褐色、しまりなし、粘性なし、白色軽石少量、焼土粒少量、焼土灰層少量含む。
36．東カマド掘方、赤褐色、しまりなし、粘性あり、焼土灰層少量、黄色ブロック少量、掘方下層。
37．東カマド掘方、暗褐色、しまりなし、粘性あり、暗色土強く、白色軽石多量、焼土粒少量含む。
38．東カマド掘方、黄褐色ブロック、しまりあり、粘性あり、地山ブロック中量、褐色土少量含む。

８号住居北カマド
1．構築材、にぶい灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、焼土粒中量、白色軽石少量、地山(黄色)粒多量。
2．構築材、灰黄褐色、しまりあり、粘性あり、地山(黄色)ブロック主体、焼土粒微量。
3．構築材、灰黄褐色、しまり強い、粘性ややあり、地山(黄色)主体、焼土粒少量、焼土粒微量。
4．構築材、赤褐色、しまり強い、粘性あり、白色軽石少量、赤褐色粒少量含む。
5．構築材、赤褐色、しまり強い、粘性あり、白色軽石少量、As-C多量に含む、赤褐色粒少量含む。
6．構築材、赤褐色、しまり強い、粘性あり、白色軽石少量、As-C中量、赤褐色粒少量含む。

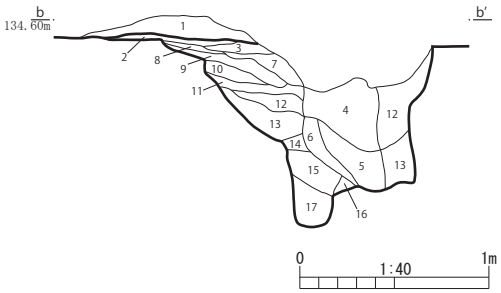
８号住居ピット計測表

遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
８住-P1	146	85	73
８住-P2	142	86	112
８住-P3	141	128	131
８住-P4	53	47	36

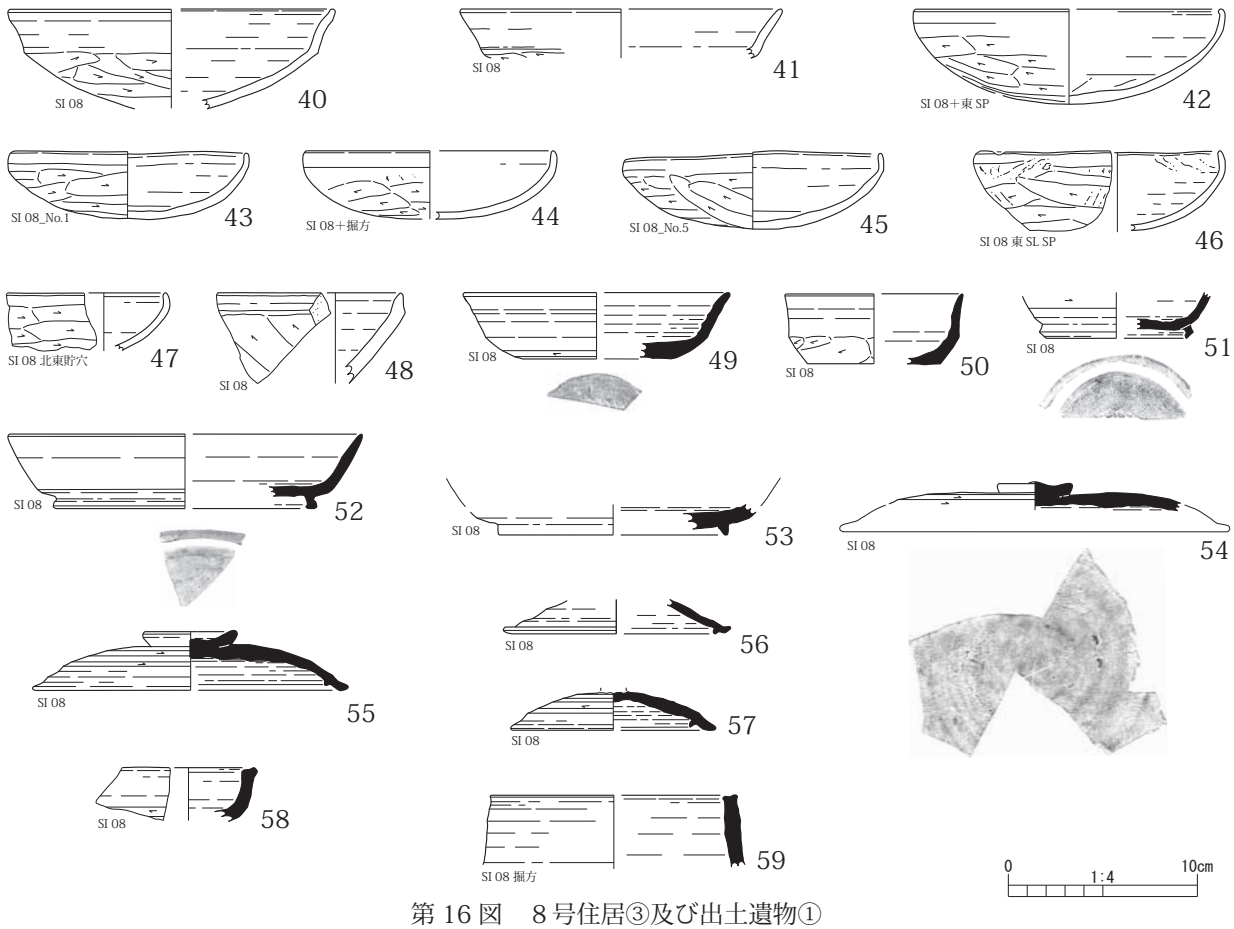
第15図　８号住居②



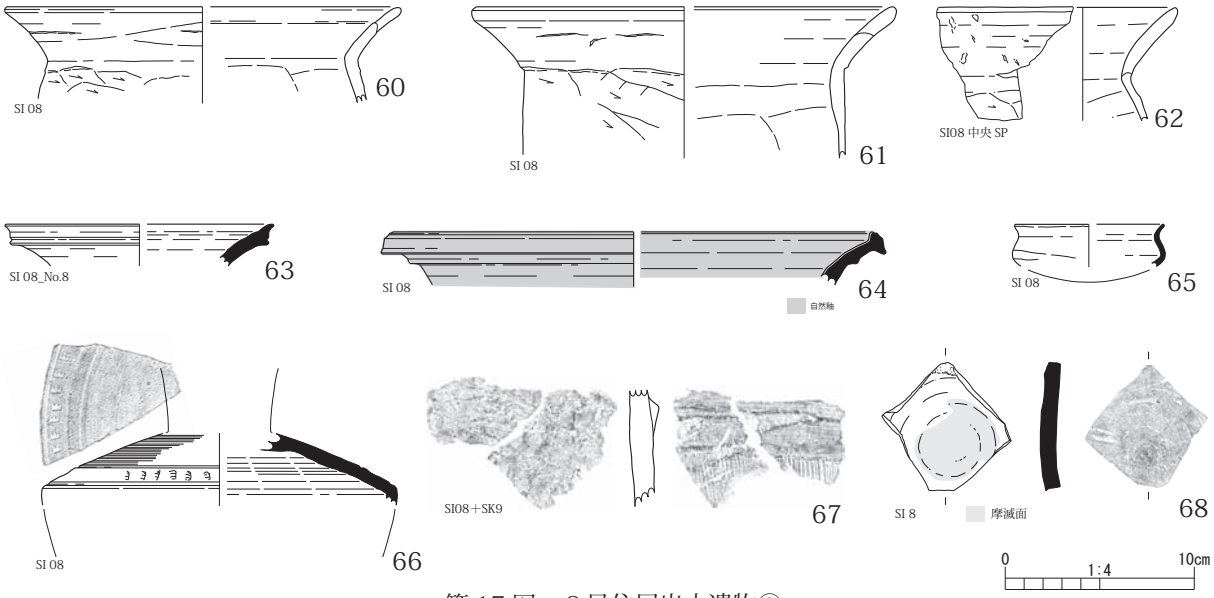
８号住居Ｐ２
1．８号住居の土層８と同じ。
2．８号住居の土層 14 と同じ。
3．８号住居の土層 15 と同じ。
4．黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混土　黄色ブロック少量。
5．黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混土　黄色ブロック少量。
6．暗黄色褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混土　黄色ブロック少量。
7．黒褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混在　黄色ブロック少量、炭化物少量含む。
8．暗黄色褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混土　黄色ブロック少量。
9．暗黒褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混土　黄色ブロック少量。
10. 暗黒褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混在　黄色ブロック少量、炭化物少量含む。
11. 暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混在　黄色ブロック少量、炭化物少量含む。
12. 黒褐色、強い、あり、As-C 軽石少量混在　黄色ブロック少量、炭化物多量含む。



８号住居Ｐ３
1．８号住居の土層 14 と同じ。
2．８号住居の土層 15 と同じ。
3．にぶい灰黄褐色、しまりあり、粘性強い、黄褐色地山、焼土粒中量、白色軽石少量。
4．暗褐色、しまり弱い、粘性ない、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア少量、炭化物少量含む。
5．暗褐色、しまり弱い、粘性ない、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア少量、炭化物少量含む。
6．暗褐色、しまり弱い、粘性ない、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア少量、炭化物少量含む。
7．黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混土、黄色ブロック多量。
8．黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混土、黄色ブロック多量。
9．暗黄色褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混土、黄色ブロック少量。
10. 暗黄色褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混土、黄色ブロック少量。
11. 暗黒褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混土、黄色ブロック少量。
12. 暗黒褐色、しまり強い、粘性ない、As-C 軽石少量混在、黄色ブロック少量。
13. 黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混在、黄色ブロック多量、炭化物少量含む。
14. 暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混在、黄色ブロック少量、炭化物少量含む。
15. 暗黒褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混在、黄色ブロック少量、炭化物少量含む。
16. 暗黒褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混在、黄色ブロック少量、炭化物多量に含む。
17. 暗黒褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混在、黄色ブロック少量、炭化物多量に含む。



第 16 図　８号住居③及び出土遺物①



第 17 図　８号住居出土遺物②

第７表　８号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝cm

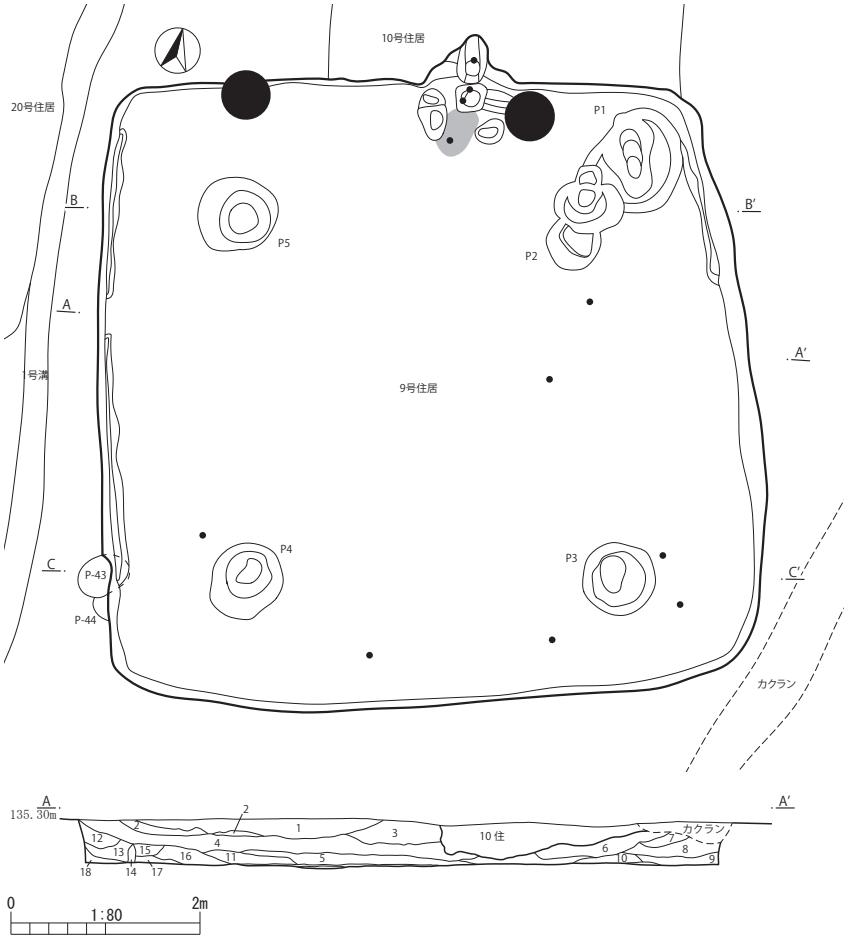
掲載 No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
40	８号住居	覆土	土師器坏	1/5	(14.8)・—・(5.6)	外 : 赤褐色 内 : 橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	外面口縁部ナデ・底部ヘラケズリ 内面ナデ	
41	８号住居	覆土	土師器坏	口縁部片	(17.0)・—・(2.6)	明赤褐色	白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母・石英	内外口縁部横ナデ、体部外面ヘラケズリ	
42	８号住居	柱穴 (P2)	土師器坏	口縁～底部片	(16.4)・—・5.0	橙色	白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母	外面口縁部横ナデ・体～底部ケズリ 内面口縁～体部横ナデ・体～底部ヘラナデ	
43	８号住居	カマド	土師器坏	ほぼ完形	12.5・—・3.6	橙色	白、黒、赤色粒・黒雲母・石英・小礫	内外口縁部横ナデ・体～底部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	
44	８号住居	覆土 堀り方	土師器坏	口縁～底部片	—・—・(3.6)	外 : にぶい黄・黒 内 : にぶい褐	白色粒・黒色粒・石英	内外口縁部横ナデ、体～底部外面ヘラケズリ、内面摩滅	
45	８号住居	床面	土師器坏	完形	13.6・—・3.8	明黄褐色	白、黒、赤色粒・石英・黒雲母・小礫	内外口縁部横ナデ・体～底部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	
46	８号住居	床下ピット	土師器坏	口縁～底部片	—・—・(4.2)	橙色	白、黒、赤色粒・石英・黒雲母	内外口縁部横ナデ、体～底部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	口縁部に歪み修正痕
47	８号住居	貯穴 (P1)	土師器坏	口縁～体部片	—・—・(3.0)	外 : にぶい黄橙 内 : 橙	白色粒・黒色粒・雲母	外面口縁部横ナデ・体部ケズリ、内面ヘラナデ	
48	８号住居	覆土	土師器鉢	口縁～体部片	—・—・(4.8)	明赤褐色	白色粒、雲母、小礫	外面口縁部横ナデ・体部ケズリ、内部ヘラナデ	
49	８号住居	覆土	須恵器坏	1/4	(13.9)・(7.7)・3.5	灰色	白色粒・黒色粒	内外面ロクロナデ、外面糸切後外周ヘラケズリ	８C 第３四半紀～ 産地:群馬東部？
50	８号住居	覆土	須恵器坏	1/7	(9.2)・(6.9)・3.7	灰色	白色粒・黒色粒	内外面ロクロナデ、外面体部下端手持ちヘラケズリ・底部手持ち (？) ヘラケズリ	産地：不明
51	８号住居	覆土	須恵器坏	体～底部片	—・(7.5)・(2.4)	灰色	白色粒・黒色粒	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	産地:群馬西部？
52	８号住居	覆土	須恵器坏	1/6	(18.6)・(13.9)・4.0	外 : 淡灰色 内 : 濃灰色	白色粒・黒色粒	内外面ロクロナデ 高台貼付け	産地:群馬西部？
53	８号住居	覆土	須恵器坏	体～底部片	—・(12.1)・—	白色	黒色粒緻密	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	産地:東海地方？
54	８号住居	覆土	須恵器蓋	1/4	—・鈕径 4.0・(1.5)	灰色	白色粒・黒色粒	外面回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ、ヘラ記号「×」	環状つまみ 産地：秋間？
55	８号住居	覆土	須恵器蓋	2/3	(16.6)・鈕径 4.8・3.1	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	外面天井部回転ヘラケズリ ロクロナデ、内面ロクロナデ	環状つまみ 産地：秋間
56	８号住居	覆土	須恵器蓋	体～口縁部片	(12.0)・—・(1.7)	白色	黒色粒	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	産地:東海地方？
57	８号住居	覆土	須恵器蓋	1/2	(10.8)・—・(2.0)	灰色	白色粒・黒色粒	内外面ロクロナデ 外面上部ヘラ削り	宝珠状つまみ 産地：太田
58	８号住居	覆土	須恵器盤	口縁～体部片	—・—・(2.8)	淡灰色	白色粒・黒色粒緻密	内外面ロクロナデ 口縁端部内側に沈線が巡る	産地：不明
59	８号住居	堀り方	須恵器マリ	口縁部片	(13.0)・—・(3.8)	灰色	白色粒・黒色粒微密	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	産地：東海地方
60	８号住居	覆土	土師器甕	口縁部片	(19.8)・—・(5.1)	赤褐色	白色粒・黒色粒・雲母	外面ケズリ・ナデ 内面ヘラナデ	
61	８号住居	覆土	土師器甕	口縁～胴部片	(22.0)・—・—	赤褐色	白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母・小礫	外面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ 内面ナデ	
62	８号住居	柱穴 (P4)	土師器甕	口縁部片	—・—・(6.0)	赤褐色	白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母	外面ナデ 内面ナデ	

各単位は口径 (長さ) ・底径 (幅) ・器高 (厚さ) ＝cm

掲載№	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
63	８号住居	床面	須恵器壺	口縁部片	(14.1)・―・(2.2)	灰色	白色・黒色粒	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	産地：群馬西部
64	８号住居	覆土	須恵器甕	口縁部片	(25.2)・―・―	灰緑色 (自然釉)	白色粒・黒色粒	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	産地：湖西
65	８号住居	覆土	須恵器短頸壷	口縁～体部片	(7.9)・―・(2.3)	白灰色	黒色粒緻密	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	産地:東海地方？仏具
66	８号住居	覆土	須恵器有肩壺	肩部片	―・―・(3.8)	淡灰色	微密	外面肩部端に刺突痕 (模様？) ロクロナデ、内面ロクロナデ	産地：湖西
67	８号住居	覆土	円筒埴輪	胴部片	―・―・(6.3)	赤褐色	白色粒・赤色粒・雲母・小礫	外面縦ハケ目 内面ナデ	９号土坑と接合
68	８号住居	覆土	須恵器転用硯	破片	(長さ)・(幅)・(厚さ) (6.7)・(6.7)・0.8	灰色	白色粒・黒色粒	外面手持ちヘラケズリ 内面ロクロ・摩滅面 (使用面あり)	甕類底部の転用硯

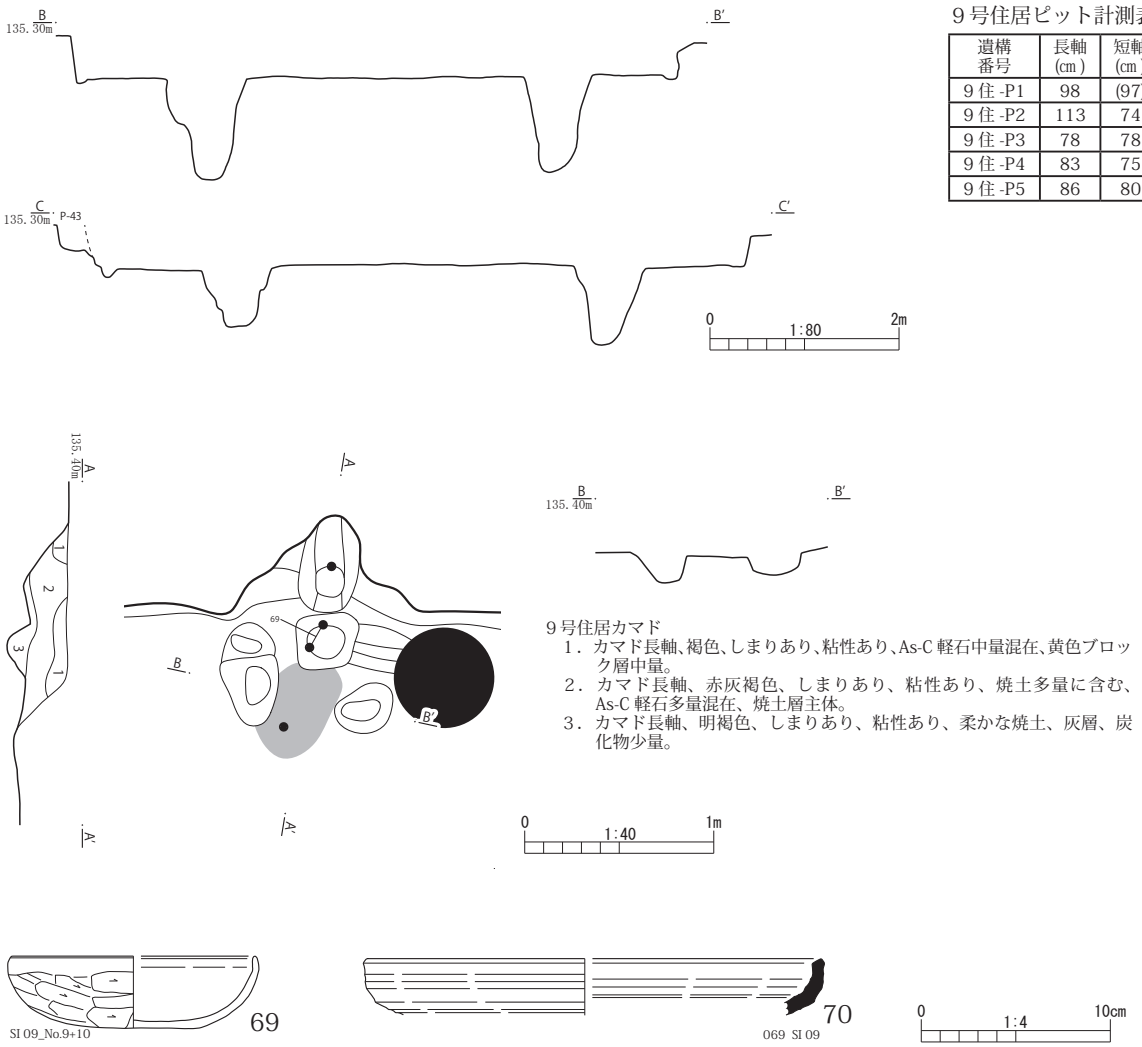
９号住居

位置　調査区西部中央寄り B,C,D-4, C-5 区。**状況**　北側のカマドを持つ 10 号住居は新しく、重複する本住居は古い。**形状・規模**　平面形はほぼ正方形。長軸 710㎝、短軸 670㎝、深さ 52㎝。方位 N-77°-E。**床面**　全体的に固く締まる、整地した貼り床層が認められた。**柱穴**　柱穴４基 (Ｐ２～Ｐ５) が検出される。**カマド**　北壁のやや東寄りに造られる。軸方位は N-10°-W。**貯蔵穴**　Ｐ１が貯蔵穴である。北東隅に掘られ不整円形をしている。**壁周溝**　西壁全体と東壁の北隅に溝がめぐる。**遺物**　土器破片が 188 点出土している。カマドから土師器の坏１点と盤の口縁部が出土している。２点を掲載。**時期**　出土遺物から７世紀後半代と考えられる。



９号住居
1．再堆積土２、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、焼土層少量。
2．再堆積土２、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア多量、焼土層少量。
3．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、赤褐色細粒含む。
4．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、大粒黄色ブロック層とスコリア細粒中量含む。
5．床面直上、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量，炭化物少量。
6．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア多量混在。
7．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック多量に混在。
8．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量。
9．三角堆積土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック層中量、炭化物少量。
10．床面直上、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック層中量、炭化物少量。
11．床面直上、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、大粒黄色ブロック混入、炭化物少量。
12．壁隅堆積土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、大粒黄色ブロック中量、炭化物少量。
13．壁隅堆積土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック層中量、炭化物少量。
14．壁隅堆積土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック層中量、炭化物少量。
15．壁隅堆積土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック層中量、炭化物少量。
16．床面直上、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック層スコリア中量、炭化物少量。
17．床面直上、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、大粒黄色ブロック中量、炭化物少量。
18．三角堆積土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量混在、黄色ブロック層少量、炭化物少量。

第 18 図　９号住居①



9号住居カマド
1．カマド長軸、褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石中量混在、黄色ブロック層中量。
2．カマド長軸、赤灰褐色、しまりあり、粘性あり、焼土多量に含む、As-C 軽石多量混在、焼土層主体。
3．カマド長軸、明褐色、しまりあり、粘性あり、柔かな焼土、灰層、炭化物少量。

9号住居ピット計測表

遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
9住-P1	98	(97)	70
9住-P2	113	74	64
9住-P3	78	78	83
9住-P4	83	75	66
9住-P5	86	80	107

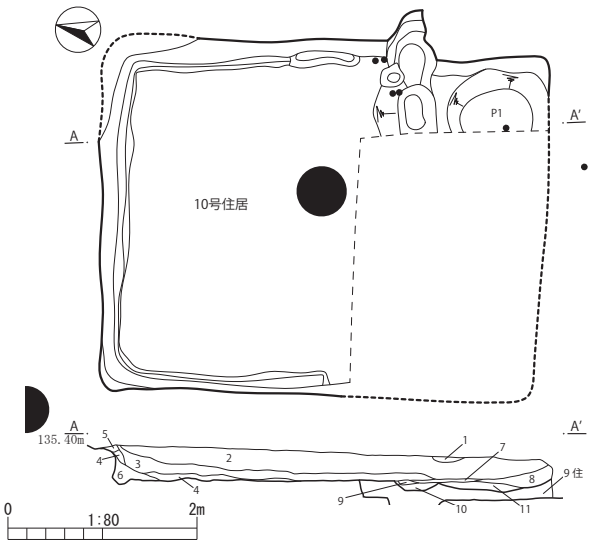
第19図　9号住居②及び出土遺物

第8表　9号住居出土遺物観察表　　各単位は口径(長さ)・底径(幅)・器高(厚さ)＝cm

掲載No.	遺構名	出土位置(注記)	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
69	9号住居	カマド	土師器坏	口縁～底部	(12.8)・―・3.8	橙色	雲母・白色粒	体～底部外面手持ちヘラケズリ	
70	9号住居	覆土	須恵器盤	口縁～底部	(25.0)・―・(3.0)	褐灰色	雲母・白色粒	内面自然釉	産地不明

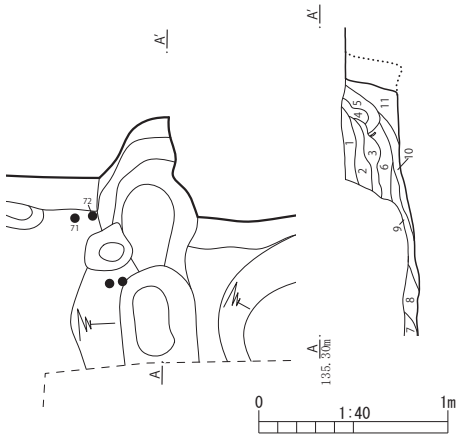
10号住居

位置　調査区西寄り中央のC-3,4区に位置する。**状況**　9号住居が古くカマドを伴う10号住居が新しい。遺構プランの確認段階では9号住居が新しいものと判断して掘削を行ったが、結果として本住居が新しい住居と確認できた。しかし、9号住居の床面まで掘削しているため、高い位置にあった本住居の南西部を壊している。**形状・規模**　東西の 辺が長い長方形。長軸480㎝、短軸370㎝、深さ40㎝。方位N-12°-W。**床面**　貼り床面はない。**柱穴**　1基検出される。**カマド**　東壁のやや南寄りに造られる。軸方位はN-78°-E。**貯蔵穴**　カマド右側に検出されている。**壁周溝**　9号住居と重ならない部分に検出される。**遺物**　土器片が43点検出されている。土師器の甕が2点出土しており掲載している。**時期**　出土遺物から、おおむね8世紀代と考えられる。



10 号住居ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
10 住 -P1	(106)	(70)	15

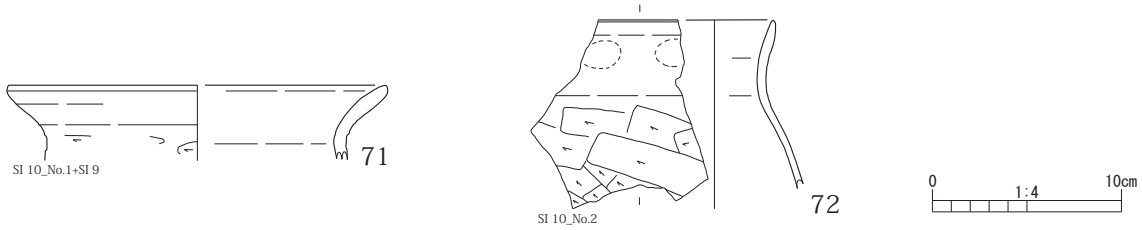


10 号住居

1. 覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石少量混在、黄色スコリア中量、褐色土。
2. 覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量。
3. 覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量。
4. 覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石中量混在、黄色スコリア、暗色土強く粘質強い。
5. 覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量　炭化物少量。
6. 壁際周溝、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量に含む、黄褐色土中量、炭化物少量。
7. 覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量。
8. 覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量。
9. 覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、灰層あり。
10. 覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、灰層あり。
11. Ｐ１覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量　炭化物少量。

10 号住居カマド

1. カマド、明赤褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石少量混在、赤色の強い黄色ブロック中量、焼土層あり。
2. カマド、明赤褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石少量混在、赤色の強い黄色ブロック中量、焼土層あり。
3. カマド、明赤褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石多量、赤色の強い黄色ブロック多量、焼土、灰層あり。
4. カマド、明赤褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、赤色の強い黄色ブロック中量、焼土層あり。
5. カマド、明赤褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、灰層あり。
6. カマド、明赤褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、赤色の強い黄色スコリア少量、灰層あり。
7. カマド、明赤褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石少量混在、赤色を帯びた黄色スコリア少量、灰層あり。
8. カマド、明赤褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石少量混在、赤色を帯びた黄色スコリア少量、灰層あり。
9. カマド、明赤褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石少量混在、赤色を帯びた黄色スコリア少量、灰層あり。
10. カマド、明赤褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石少量混在、黄色ブロック少量、灰層あり、赤色土あり。
11. カマド掘方、明褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石少量混在、黄色ブロック少量。



第 20 図　10 号住居及び出土遺物

第９表　10 号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝cm

掲載 No.	遺構名	出土位置 (注記)	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
71	10 号住居	カマド	土師器甕	口縁部片	(20.0)・―・(4.0)	橙色	小礫・雲母・石英	頸部外面横位ヘラケズリ	
72	10 号住居	カマド	土師器甕	口縁～胴部片	―・―・(8.6)	明赤褐色	雲母・白色粒	外面口縁部指頭痕・胴部上端横位ヘラケズリ、内面横ナデ	

11 号住居

位置　調査区の南西隅の B-6 区に位置する。**状況**　12 号住居と並行して検出。土層の切り合いから 12 号住居より古いと考えられる。**形状・規模**　東の一辺を検出したのみで形状不明。検出された寸法は長軸 (310)㎝、短軸 (100)㎝、深さ 100㎝。方位 N-11°-W。**床面**　貼り床面はない。**柱穴**　検出されていない。**カマド**　東壁やや南寄りに造られている。軸方位は N-77°-E。**貯蔵穴**　Ｐ１がカマド右脇の貯蔵穴と思われる。調査区境界壁により切られているが楕円形と思われる。**壁周溝**　カマド両サイドの北方向と南方向の全体に巡る。**遺物**　貯

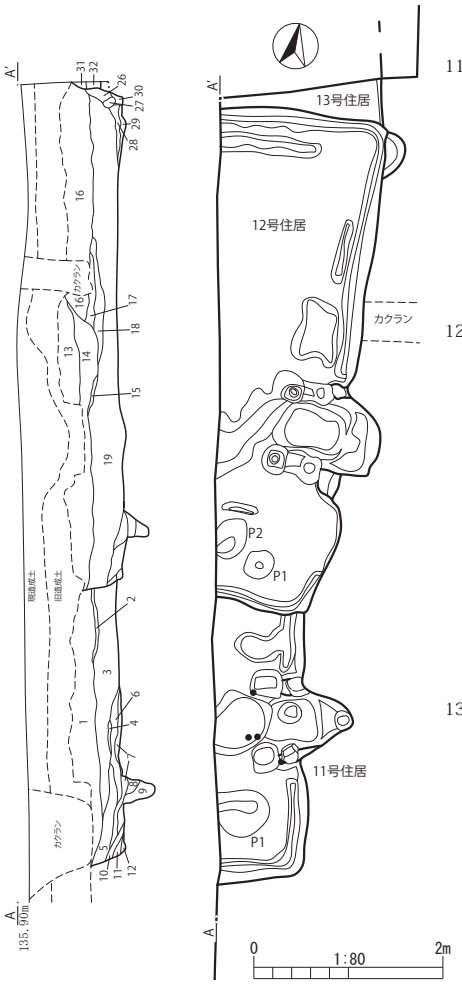
蔵穴から土師器の甕が出土しており図化掲載した。**時期**　12 号住居に切られるが、カマド形態は類似しており、12 号住居に近い時期とみられ、おおむね 7 世紀後半と考えられる。

12 号住居

位置　調査区西端南部の A-5 区から検出。**状況**　12 号住居は南側の 11 号住居と北の 13 号住居より新しい。**形状・規模**　東側の一部のみの検出で形状・規模は不明。検出された東辺の長軸 530㎝、北辺の残存長は (170)㎝、深さ 104㎝。方位 N-1°-W。**床面**　貼り床面はない。**柱穴**　検出されていない。**カマド**　東壁のやや南寄りに造られる。軸方位は N-95°-E。両袖先端に袖石の抜痕あり。**貯蔵穴**　Ｐ１・Ｐ２が貯蔵穴と思われる。形状は不定形の円形。**壁周溝**　カマド脇全体に巡っていると考えられる。**遺物**　土師器が主体の土器片が 233 点出土。土師器の坏、須恵器の坏、土師器の甕底部各 1 点図化掲載。**時期**　11 号住居と 13 号住居を切り新しい。出土遺物から 7 世紀の終わり頃と考えられる。

13 号住居

位置　調査区南端南部の B-5 区出土。**状況**　13 号住居 (古) は 12 号住居 (新) に切られ、さらに調査区境の壁に切られ本遺構は一部のみ。**形状・規模**　形状、規模不明。検出された東辺は長軸 (170)㎝、南北方向は短軸 (50)㎝、深さ 94㎝。方位 N-79°-E。**床面**　床面は一部の検出。**柱穴**　検出されない。**カマド**　カマド煙道部先端検出。**貯蔵穴**　確認されない。**壁周溝**　確認されない。**遺物**　カマドから土器片 6 点出土。図化できなかった。**時期**　遺物は少ないが、12 号住居に切られ古い。



11 号住居
1．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量。
2．覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア多量、炭化物少量含む。
3．覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリアブロック少量。
4．覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア少量、炭化物少量。
5．覆土、黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア多量。
6．覆土、黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、炭化物少量。
7．壁隅土、黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量。
8．Ｐ１埋土、暗黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア多量、炭化物少量。
9．Ｐ１埋土、黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、炭化物少量。
10．壁隅土、暗黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリアブロック多量。
11．壁隅土、黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア多量。
12．床面直上、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、炭化物少量。

12 号住居
13．覆土、黄褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石中量混在、黄色スコリア中量。
14．覆土、黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量、　黄色スコリア中量。
15．覆土、黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック含む。
16．覆土、黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量。
17．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリア中量。
18．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、炭化物含む。
19．床直面、暗灰褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、炭化物少量。
20．壁崩落部、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック含む。
21．壁崩落部、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック含む。
22．壁崩落部、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック中量。
23．壁崩落部、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア中量、炭化物少量。
24．Ｐ２埋土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア微量。
25．Ｐ２埋土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア微量、粘質黒灰色微量。
26．壁崩落部、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、炭化物少量。
27．壁崩落部、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、炭化物少量。
28．壁崩落部、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色スコリア中量、炭化物少量。
29．壁崩落部、黄色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色ブロック多量。
30．壁崩落部、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量含む。

13 号住居
31．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量。
32．覆土、黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリア中量　炭化物少量。

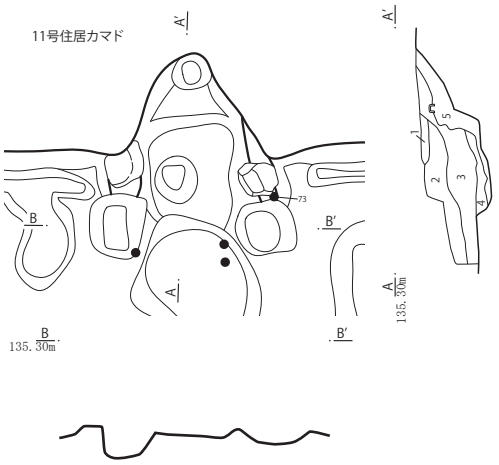
11 号住居ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
11 住 -P1	(54)	49	37

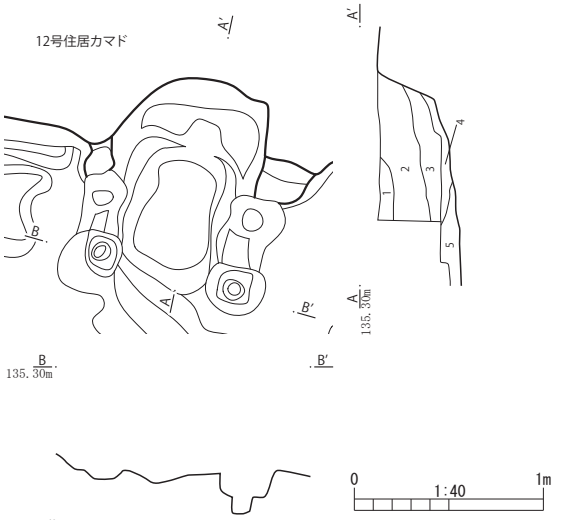
12 号住居ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
12 住 -P1	34	30	26
12 住 -P2	(44)	35	28

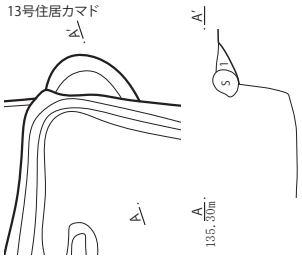
第 21 図　11・12・13 号住居①



11 号住居カマド
1．カマド構築材、暗赤褐色、しまりあり、粘性あり、カマド天井、側壁材、灰層含む。
2．カマド構築材、暗赤橙色、しまりあり、粘性あり、カマド天井、側壁材。
3．カマド構築材、暗赤灰褐色、しまりあり、粘性あり、カマド天井、側壁材、灰層、焼土層含む。
4．カマド床下材、暗灰赤褐色、しまりあり、粘性あり、赤色ブロック、灰層多量に含む。
5．カマド構築材、暗灰赤褐色、しまりあり、粘性あり、カマド底部材、灰褐色土多量。

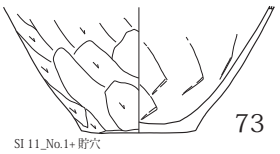


12 号住居カマド
1．カマド構築材、赤橙色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック多量。
2．カマド構築材、赤橙色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック中量。
3．カマド構築材、赤橙色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量、炭化物少量。
4．カマド底部、暗赤橙色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリア中量、 炭化物中量。

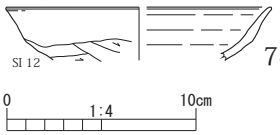


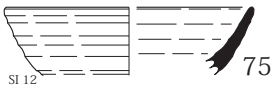
13 号住居カマド
1．カマド構築材、赤褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量。

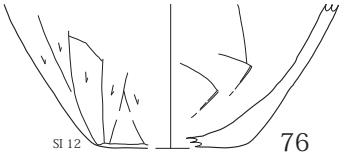
11 号住居



12 号住居







第 22 図　11・12・13 号住居②及び出土遺物

第 10 表　11 号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ) ・底径 (幅) ・器高 (厚さ) ＝cm

掲載No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
73	11 号住居	貯穴	土師器甕	胴～底部片	—・(6.0)・(5.7)	にぶい黄褐色	雲母・石英・赤褐色岩片	胴部外面下端斜位ヘラケズリ 胴部内面下端ナデ	

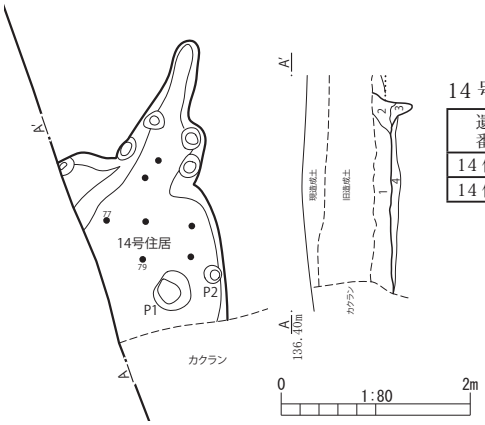
第 11 表　12 号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ) ・底径 (幅) ・器高 (厚さ) ＝cm

掲載No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
74	12 号住居	覆土	土師器坏	口縁部片	(14.0)・—・(2.8)	にぶい橙色	雲母、白色粒	体部下端外面手持ちヘラケズリ	
75	12 号住居	覆土	須恵器坏	胴～体部片	(13.0)・—・(3.6)	灰白色	小礫	口縁～体部弱内湾	
76	12 号住居	覆土	土師器甕	胴～底部片	—・(8.0)・(7.6)	にぶい赤褐色	雲母・石英・白色粒	胴部外面下端斜位ヘラケズリ 胴部内面下端横ナデ	

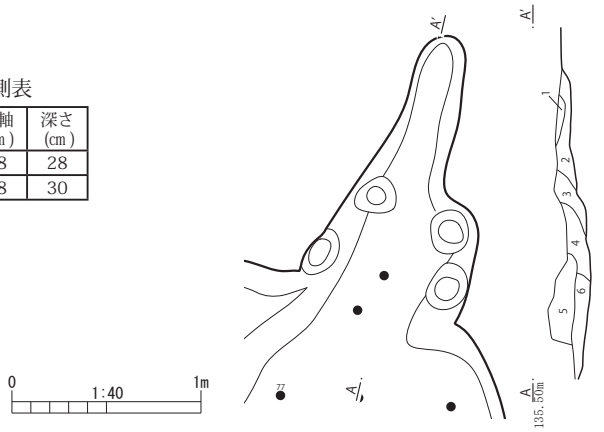
14 号住居

位置　調査区北壁中央の D-1 区。**状況**　発掘区北壁と西側の撹乱により住居カマド部分残存。**形状・規模**　形状、規模不明。残存する長軸 (200)㎝、短軸 (140)㎝、深さ 13㎝。方位 N-1° -E。**床面**　貼り床層あり。**柱穴**　２基検出される。**カマド**　軸方位は N-113° -E。**貯蔵穴**　検出されない。**壁周溝**　検出されない。**遺物**　土器片 54 点出土。須恵器の坏２点、須恵器の擂鉢、合計３点を掲載。**時期**　出土遺物は少ないが、８世紀前半代頃と考えられる。



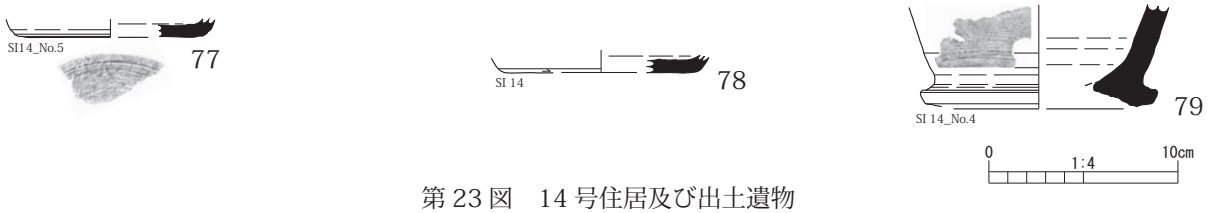
14 住ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
14 住 -P1	42	38	28
14 住 -P2	19	18	30



14 号住居
1．覆土、茶褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量。
2．隅土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量、炭化物少量。
3．隅土、黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック多量。
4．覆土下部、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量。

14 号住居カマド
1．カマド構築土、褐灰色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量。
2．カマド構築土、赤褐色、しまりあり、粘性あり、焼土粒微量、黄色スコリア少量。
3．カマド構築土、明褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、炭化物少量。
4．カマド構築土、灰黄褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、焼土粒微量。
5．カマド構築土、にぶい黄褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石多量、黄色スコリア微量、灰層微量。
6．カマド構築土、黒褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石微量、黄色スコリア微量、焼土粒微量。



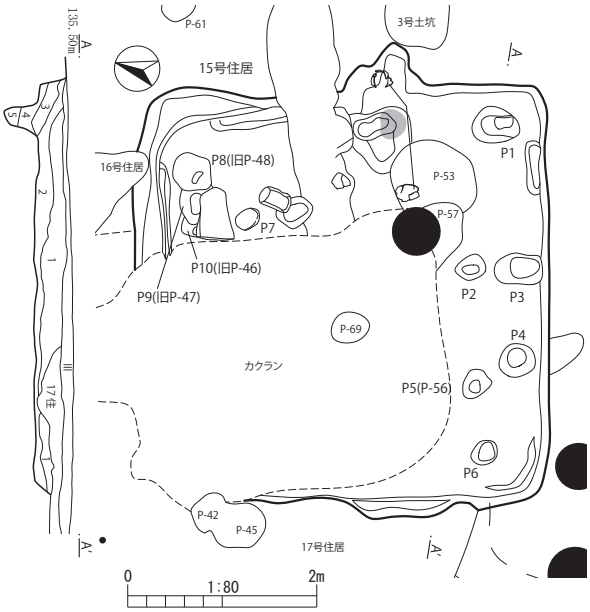
第 23 図　14 号住居及び出土遺物

第 12 表　14 号住居出土遺物観察表　　各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝㎝

掲載No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
77	14 号住居	床面	須恵器坏	底部片	―・(9.6)・(0.9)	褐灰色	白色粒	底部外面回転ヘラケズリ	
78	14 号住居	覆土	須恵器坏	底部片	―・(10.0)・(1.2)	褐灰色	白色粒	体部下端～底部外面回転ヘラケズリ	
79	14 号住居	床面	須恵器擂鉢	胴～底部片	―・(12.0)・(5.5)	褐灰色	白色粒	胴部外面平行タタキ	

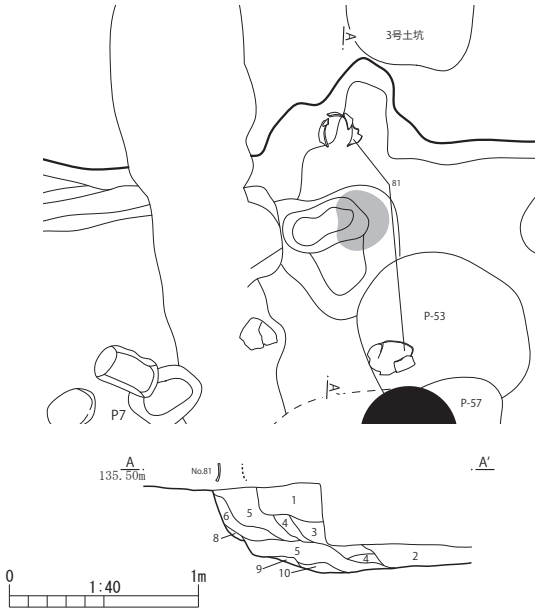
15 号住居

位置　調査区北西隅、C-2,3 区出土。**状況**　最古の段階では 1 号掘立柱建物遺構と 1 号柵列が、次に本住居が、最新遺構は 16 号住居と 17 号住居である。**形状・規模**　正方形。長軸 460㎝、短軸 440㎝、深さ 40㎝。方位 N-76° -E。**床面**　貼り床面はなし。**柱穴**　ない。**カマド**　東壁のやや南寄りに造られる。軸方位は N-78。**貯蔵穴**　検出されない。**壁周溝**　南西部に検出される。**遺物**　土器片が 51 点出土している。土師器甕上半部２点を実測掲載した。**時期**　17 号住居に切られ古い。出土遺物から９世紀前半代と考えられる。



15 号住居

1．覆土、暗黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック中量。
2．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量、炭化物少量。
3．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性強い、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、炭化物多量。
4．Ｐ１、黒褐色、しまりあり、粘性強い、As-C 軽石中量、黄色スコリア少量、炭化物多量。
5．Ｐ１、黒褐色、しまりあり、粘性強い、As-C 軽石中量、黄色スコリア少量、炭化物多量。

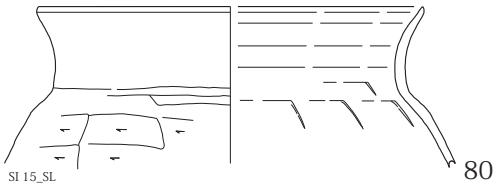


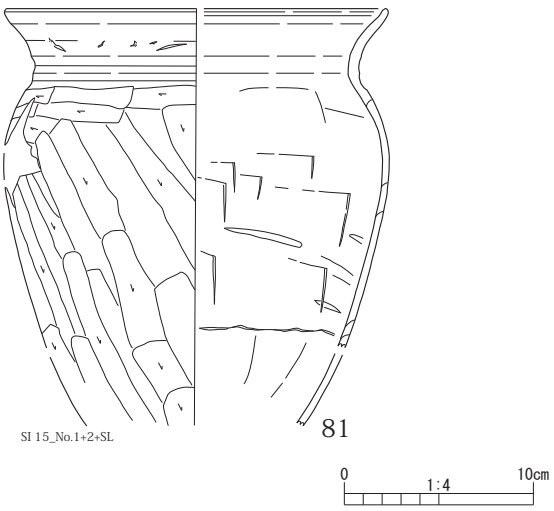
15 号住居カマド

1．覆土、暗灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリアブロック少量、焼土粒微量。
2．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック多量、炭化物少量。
3．カマド構築材、暗灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリアブロック中量、焼土粒微量。
4．カマド構築材、暗灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック少量、灰多量。
5．カマド構築材、暗灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリアブロック多量、焼土粒多量。
6．カマド構築材、暗灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリアブロック多量、焼土粒微量。
7．カマド床面構成土、暗灰褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリアブロック中量、焼土粒中量。
8．カマド構築材、赤灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック多量、焼土粒少量。
9．カマド構築材、赤灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック多量、焼土粒多量。
10．カマド床、暗褐色土、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量。

15 号住居ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
15 住 -P1	50	39	49
15 住 -P2	33	26	9
15 住 -P3	51	33	26
15 住 -P4	39	35	23
15 住 -P5	34	24	16
15 住 -P6	29	(25)	12
15 住 -P7	40	32	9
15 住 -P8	46	42	26
15 住 -P9	(36)	(32)	26
15 住 -P10	(16)	(14)	17





第 24 図　15 号住居及び出土遺物

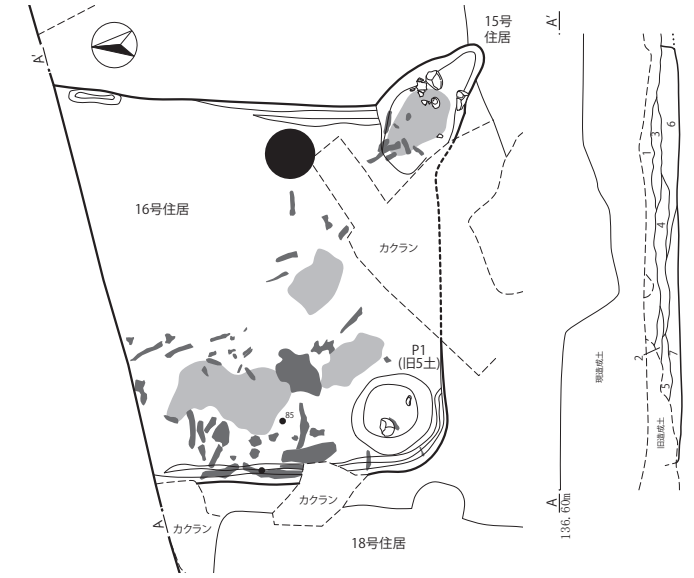
第 13 表　15 号住居出土遺物観察表

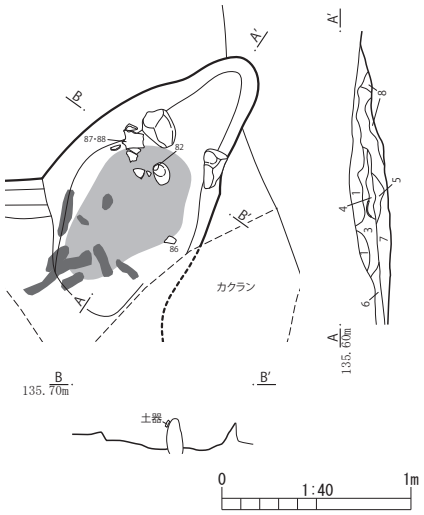
各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝cm

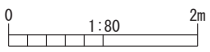
掲載 No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
80	15 号住居	カマド	土師器甕	口縁～胴部片	(20.2)・―・(8.3)	にぶい赤褐色	雲母・結晶片岩・白色粒	胴部外面上端横位ヘラケズリ内面横ナデ	
81	15 号住居	カマド	土師器甕	口縁～胴部片	20.0・―・(17.9)	明赤褐色	石英・雲母・白色粒	外面胴部上端横位ヘラ・中場斜位ヘラ、内面横ナデ	

16 号住居

位置　調査区北西隅のB-1。**状況**　本住居(新)は15号住居(古)と重複。1号掘立柱建物布掘り溝(古)が重なる。**形状・規模**　東西辺が長い長方形と推測。長軸 (380)㎝、短軸 (410)㎝、深さ 42㎝。方位 N-10°-E。**床面**　貼り床面はない。また、東部に焼土・炭化物が多く分布する。南西隅に土坑1基とピット1基ある。**柱穴**　検出されていない。**カマド**　南東隅に造られる。軸方位はN-135°-E。**貯蔵穴**　検出されない。**壁周溝**　南西部、東部の一部に検出。**遺物**　土器片が21点出土している。カマド周辺から小型坏3点、土師器甕3点、須恵器擂鉢口縁部1点合計7点を掲載した。**時期**　出土遺物から11世紀代と考えられる。





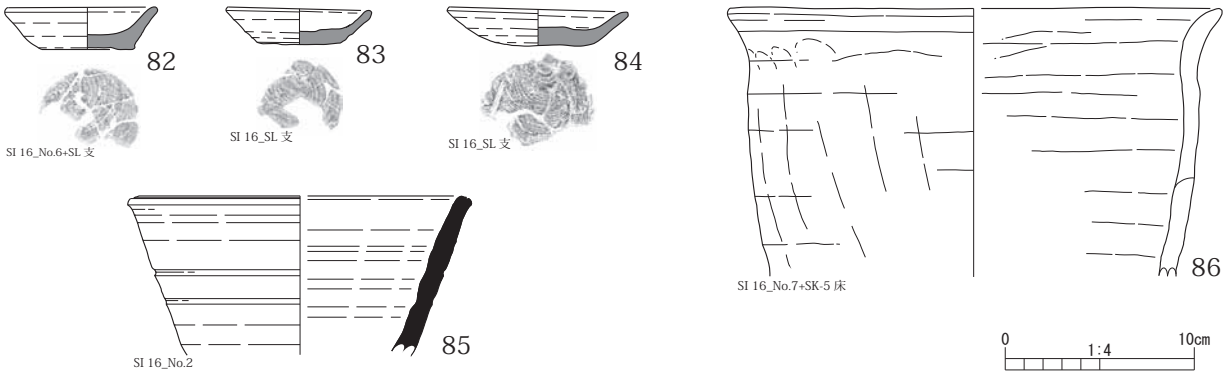


16 号住居ピット計測表

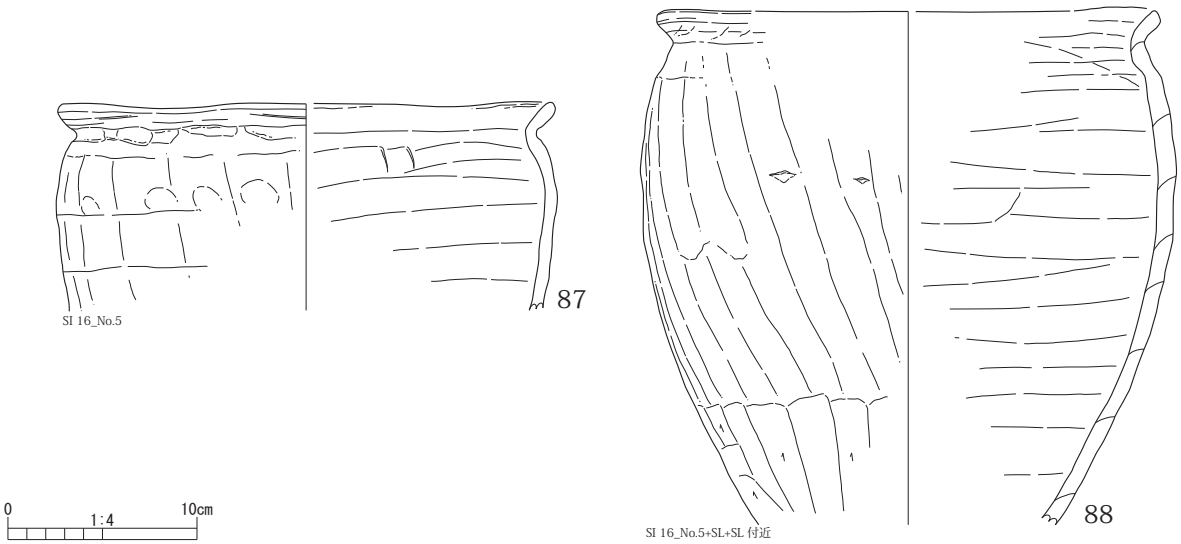
遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
16住-P1	86	84	51

16 号住居
1．住居覆土、暗赤褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリアブロック中量。
2．住居覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量、炭化物少量。
3．住居覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量。
4．住居覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量、炭化物少量。
5．住居覆土、暗赤褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリアブロック 中量、炭化物少量。
6．住居床面、暗褐色、しまりあり、粘性強い、黄色スコリアブロック土、灰層少量。
7．住居床面、暗褐色、しまりあり、粘性強い、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック中量、炭化物下層に多い。

16 号住居カマド
1．カマド構築材、暗灰黄色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石中量、黄色スコリアブロック 中量、焼土粒少量。
2．カマド天井材、暗灰黄色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、焼土粒含む。
3．カマド崩落材、暗灰黄色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、焼土粒少量。
4．カマド崩落材、暗灰黄色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、焼土粒多量。
5．支脚保持材、暗灰黄色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石中量、黄色スコリアブロック 中量、炭化物少量。
6．カマド構築材、暗灰黄色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石中量、黄色スコリア中量、焼土粒含む。
7．カマド構築材、暗灰黄色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石微量、黄色スコリア微量、焼土粒少量。
8．カマド構築材、褐灰色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石微量、黄色スコリア微量、焼土粒含む。



第 25 図　16 号住居及び出土遺物①



第 26 図　16 号住居出土遺物②

第 14 表　16 号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ) ・底径 (幅) ・器高 (厚さ) ＝cm

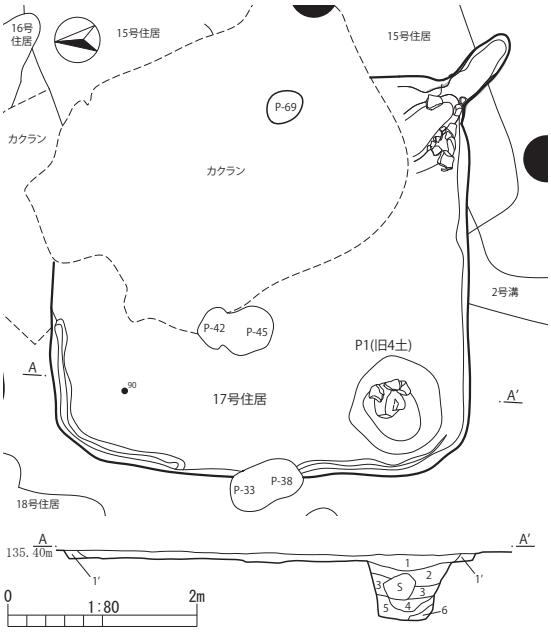
掲載No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
82	16 号住居	カマド	須恵器小皿	4/5	7.8・4.8・2.3	にぶい橙色	雲母・白色粒	底部外面回転糸切り離し	
83	16 号住居	カマド	須恵器坏	3/5	7.5・4.4・1.9	橙色	雲母・石英・白色粒	底部外面回転糸切り離し	
84	16 号住居	カマド	須恵器小皿	3/4	9.4・5.2・2.0	褐灰色	白色粒	底部外面回転糸切り離し	
85	16 号住居	床面	須恵器擂鉢	口縁～胴部片	(17.0)・―・(8.4)	褐灰色	雲母・白色粒	胴部外面沈線 2 条 内面横ナデ	
86	16 号住居	カマド床面	須恵器土釜	口縁～胴部片	(26.0)・―・(13.5)	橙色	赤褐色岩片・雲母・白色粒	内外面横ナデ	
87	16 号住居	カマド	須恵器土釜	口縁～胴部片	(26.0)・―・(10.9)	明赤褐色	雲母・石英・小礫	頸部外面押圧ナデ痕	
88	16 号住居	カマド	須恵器土釜	口縁～胴部片	(30.0)・―・(25.5)	明赤褐色	小礫・片岩・白色岩片	外面横ナデ・胴部下端縦位ヘラケズリ、内面横ナデ	

17 号住居

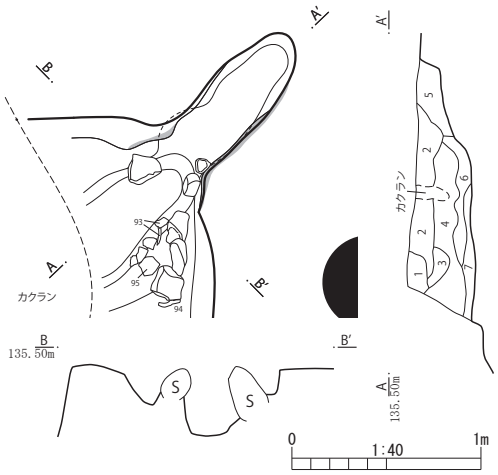
位置　調査区北西　B-2。**状況**　本遺構のおよそ東半分が 15 号住居と重複。**形状・規模**　正方形と推測。長軸 440㎝、短軸 430㎝、深さ 14㎝。方位 N-5° -E。**床面**　貼り床面はない。**柱穴**　1 基検出される。**カマド**　南東隅に造られる。軸方位は N-142° -E。**貯蔵穴**　検出されない。**壁周溝**　北西隅と南西部に検出される。**遺物**　カマドから埴輪および須恵器の坏、カマド覆土から須恵器の坏が出土。7 点を掲載した。**時期**　出土遺物から 10 世紀中頃と推定される。

17 号住居ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
17 住 -P1	105	98	62

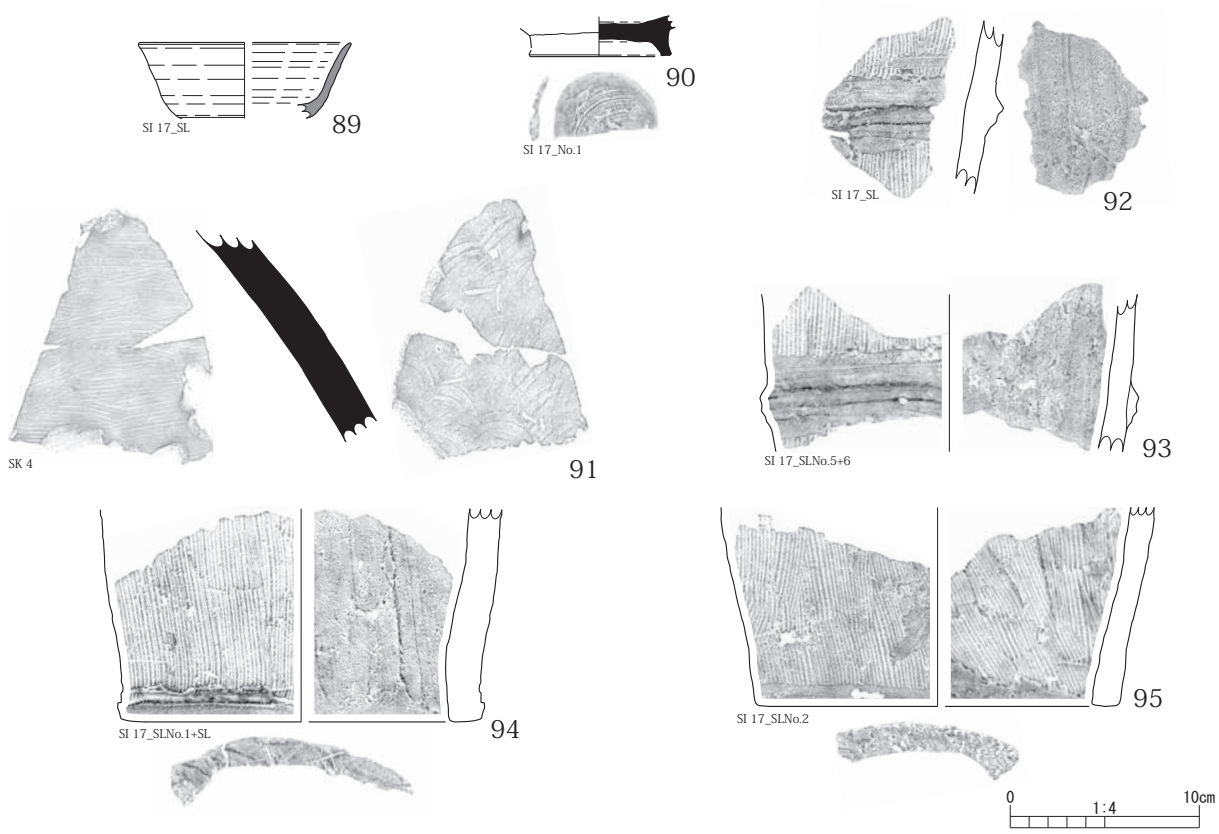


第 27 図　17 号住居①



17 号住居
1．床土、暗黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリア中量、炭化物少量。
2．覆土、暗黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック中量。
3．覆土、暗黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量、炭化物少量。
4．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリア中量、炭化物少量。
5．床土、暗灰褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリア中量、炭化物多量。
6．床土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量、炭化物少量。

17 号住居カマド
1．撹乱土層、赤黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-B 微量、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量。
2．カマド構築材、赤灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック多量、焼土粒多量に含む。
3．カマド構築材、赤灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック多量、焼土粒含む。
4．カマド構築材、赤灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック多量、焼土粒多量に含む。
5．カマド構築材、灰黄褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック多量、焼土粒多量に含む。
6．カマド構築材、暗灰褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック多量、灰層少量含む。
7．カマド構築材、暗灰褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリアブロック多量、灰層多量。



第 28 図　17 号住居②及び出土遺物

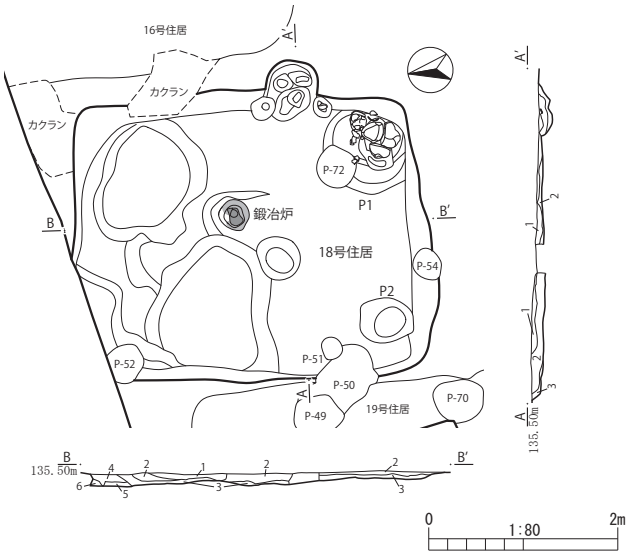
第 15 表　17 号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ) ・底径 (幅) ・器高 (厚さ) ＝cm

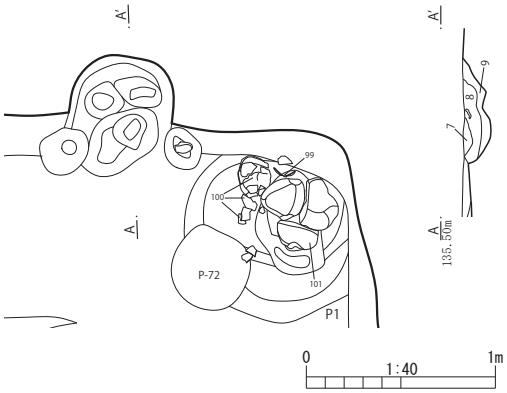
掲載No.	遺構名	出土位置(注記)	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
89	17 号住居	カマド	須恵器 坏	口縁～底部	(11.0)・—・(4.0)	褐灰色	白色粒	底部外面ヘラケズリ	
90	17 号住居	床面	須恵器 高台埦	体～高台部	—・(7.5)・(2.1)	褐灰色	白色粒	底部外面回転糸切り離し	
91	17 号住居	貯穴 (P1)	須恵器 甕	胴部片	—・—・(11.1)	灰白色	黒色片岩・白色粒・小礫	外面平行タタキ 内面同心円状当て具痕	
92	17 号住居	カマド	円筒埴輪	胴部片	—・—・(8.5)	橙色	小礫・白色粒	外面突帯	カマド構築材
93	17 号住居	カマド	円筒埴輪	胴部片	—・—・(6.2)	明赤褐色	小礫・白色粒	外面突帯	カマド構築材
94	17 号住居	カマド	円筒埴輪	胴～底部	—・(19.0)・(11.2)	明赤褐色	雲母・石英・白色粒	外面縦ハケ 内面縦ナデ・指頭痕	カマド構築材 チャート含？
95	17 号住居	カマド	円筒埴輪	胴～底部	—・(19.0)・(10.5)	明赤褐色	小礫・雲母・白色粒	内外面縦ハケ	カマド構築材

18 号住居

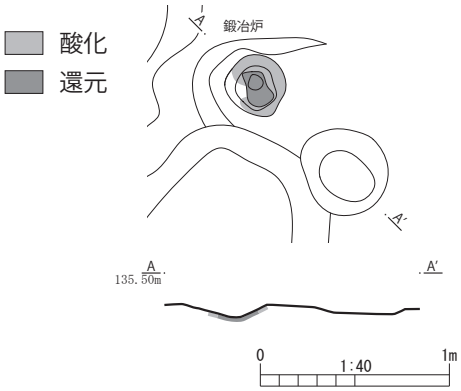
位置　調査区北西隅　B-2。**状況**　19 号住居の東壁中央に隣接。**形状・規模**　長方形と推測。長軸 380㎝、短軸 310㎝、深さ 18㎝。方位 N-9° -E。**床面**　貼り床面はない。北部には起伏が多い。**柱穴**　3 基検出される。**カマド**　東壁のやや南寄りに造られる。軸方位は N-108° -E。**貯蔵穴**　遺物を伴い検出される。**壁周溝**　検出されない。**鍛冶炉**　床面中央に酸化および還元した被熱痕の窪みが確認された。**遺物**　カマドから須恵器と土師器の坏、カマドと貯蔵穴より土師器の甕が出土。砥石を含め 6 点を掲載した。また、遺構覆土中から鉄滓および鍛造剥片を検出している。**時期**　出土遺物から 9 世紀後半代と考えられる。



18 号住居・カマド
1．覆土、暗褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石微量、黄色スコリア微量。
2．覆土、褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石微量、黄色スコリア微量。
3．覆土、褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石微量、黄色スコリア少量、焼土粒微量。
4．壁隅土、暗褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石微量、黄色スコリア微量、炭化物少量。
5．壁隅土、暗褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石微量、黄色スコリア微量。
6．壁隅土、暗褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石微量、黄色スコリアブロック少量。

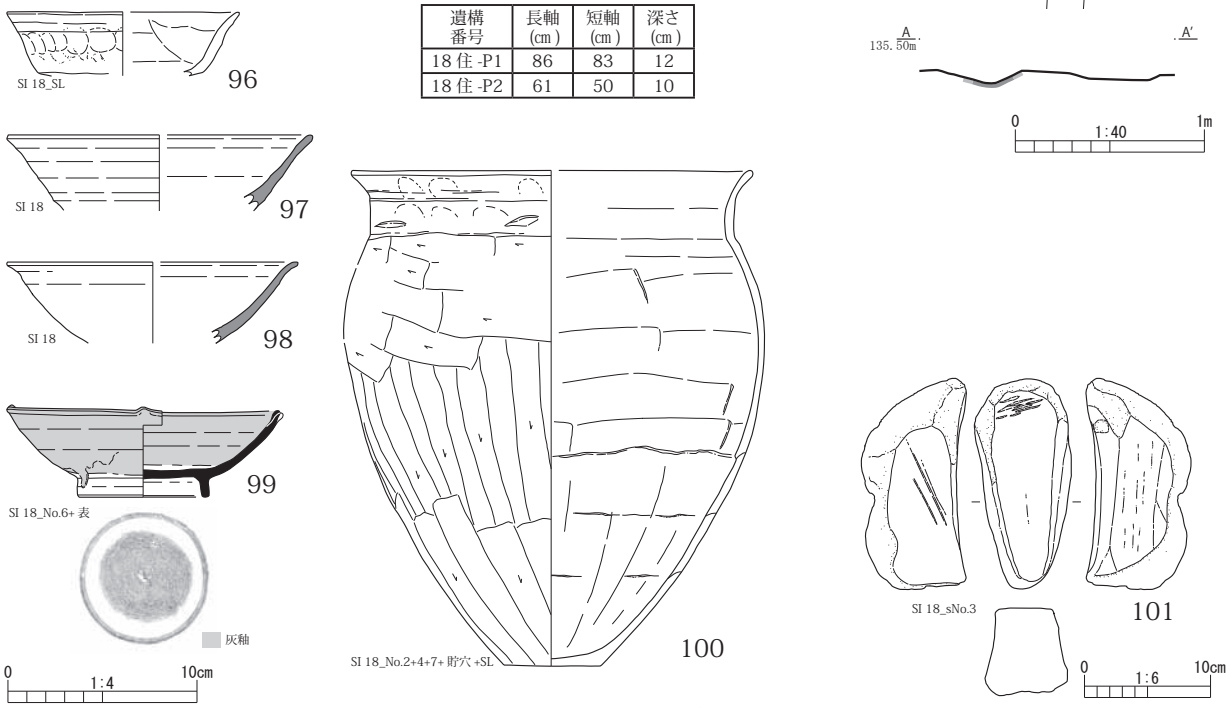


18 号住居カマド
7．カマド構築材、暗褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石微量、黄色スコリア微量、焼土粒微量。
8．カマド構築材、暗褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、焼土粒微量。
9．カマド構築材、暗褐色、しまり弱い、粘性弱い、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック多量、焼土粒微量。



18 号住居ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
18 住 -P1	86	83	12
18 住 -P2	61	50	10



第 29 図　18 号住居及び出土遺物

第 16 表　18 号住居出土遺物観察表

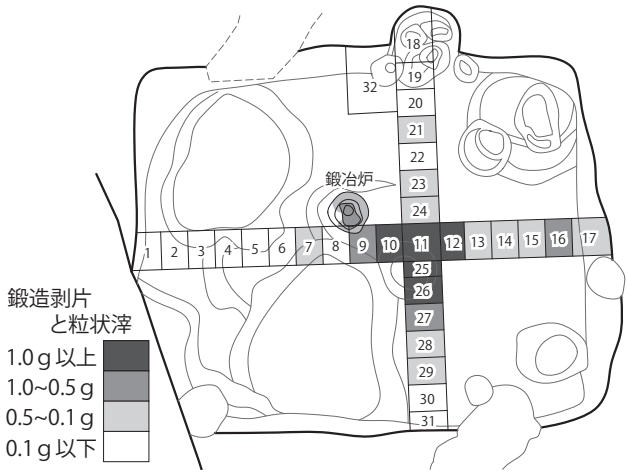
各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝㎝

掲載 No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	計測値 (cm) 口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
96	18 号住居	カマド	土師器 坏	口縁～底部	(12.0)・―・(3.4)	にぶい橙色	雲母・石英・白色粒	外面口縁部指頭痕・底部手持ちヘラケズリ	
97	18 号住居	覆土	須恵器 坏	口縁～体部	(16.0)・―・(4.0)	褐灰色	白色粒	口縁部外反	
98	18 号住居	覆土	須恵器 坏	口縁～体部	(15.4)・―・(4.3)	にぶい黄橙色	石英・雲母・白色粒	口縁部外反	酸化焔焼成？
99	18 号住居	覆土 表土	灰釉陶 輪花埦	口縁～高台部	14.1・(高台)6.8・4.9	灰黄色 (オリーブ灰色)	白色粒	口～体部内外面施釉、底部外面回転ヘラケズリ	
100	18 号住居	覆土 貯穴 カマド	土師器 甕	3/4	21.0・5.0・26.2	赤褐色	雲母・赤褐色岩片・白色粒	胴部外面上半横位ヘラケズリ・下半斜位ヘラケズリ、内面横ナデ	コの字状口縁

掲載 No.	遺構名	出土位置	種別	長さ・幅・厚さ (cm)・重さ (g)	石材	形態・特徴	備考
101	18 号住居	覆土	研石	25.1・12.0・10.4・3367	輝石安山岩	正面と両側面の 3 面が砥面となり、ほかは自然面。正面の砥面は使用により中央が減り弧状の砥面となる。また各砥面には刃立の痕跡があり。	

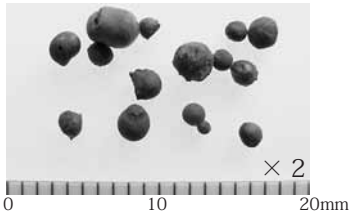
18 号住居　鍛冶関連遺物

18 号住居では遺構の床面中央に鍛冶炉とみられる被熱痕跡が確認された。ただしこの炉は土層確認ベルトを残し、床面まで覆土を掘り下げた状態で確認されたものである。そこでベルト部に残った覆土をサンプルとして持ち帰り、水洗篩別を行った。土壌のサンプルは土層観察ベルト部を 32 分割し採集した。また、水洗篩別は 0.5 ㎜、0.25㎜、0.1㎜の網目を用い、鍛冶作業によるものと考えられる鍛造剥片などを検出した。各区での検出状況は 17 表に示している。その結果、鍛造剥片の分布から、鍛冶炉の南西側の小凹み付近で鍛造行為があったと推定された。従ってこの小凹みは、台座を据えていた穴と考えられる。



第 30 図　18 号住居　区画及び
鍛造剥片と粒状滓 (合計) の重量分布

鍛造剥片 (23 区　0.13g)



粒状滓 (10 区　0.13g)

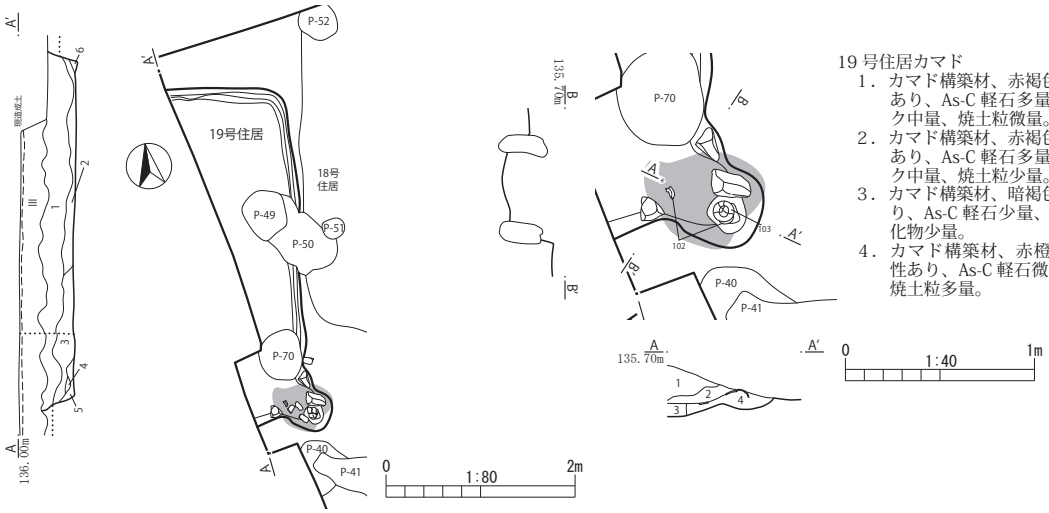
第 17 表　18 号住居鍛造剥片分布

区画	鍛造剥片 (g)	粒状滓 (g)	その他の鉄滓類 (g)
1	0.02	-	0.09
2	0.06	-	-
3	0.04	-	0.00 以下
4	0.02	-	-
5	0.06	-	-
6	0.05	-	-
7	0.12	-	0.74
8	0.07	-	0.19
9	0.73	-	1.67
10	4.49	0.13	8.40
11	4.08	0.06	9.71
12	1.78	-	3.34
13	0.35	-	1.65
14	0.12	0.03	0.80
15	0.37	-	0.28
16	0.91	0.03	1.10

区画	鍛造剥片 (g)	粒状滓 (g)	その他の鉄滓類 (g)
17	0.43	0.02	1.83
18	0.08	-	0.12
19	0.03	-	1.09
20	0.00 以下	-	0.12
21	0.11	-	0.00 以下
22	0.03	-	0.00 以下
23	0.13	-	0.19
24	0.33	-	0.26
25	1.53	-	0.59
26	1.76	0.05	0.82
27	0.80	0.00 以下	1.36
28	0.45	0.00 以下	1.10
29	0.29	-	0.26
30	0.05	-	0.09
31	0.05	-	0.26
32	0.08	-	0.22
合計	19.40	0.32	36.28

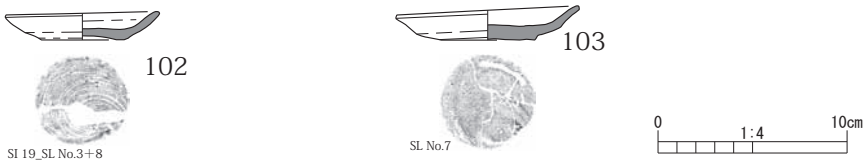
19 号住居

位置　調査区北西隅　A-2。**状況**　東壁中央部が 18 号住居南西壁の一部と重複。**形状・規模**　一辺のみ検出のため不明。長軸 (360)㎝、短軸 (120)㎝、深さ 34㎝。方位 N-5°-E。**床面**　貼り床面はない。**柱穴**　検出されない。**カマド**　南東隅に造られる。軸方位は N-124°-E。**貯蔵穴**　検出されない。**壁周溝**　南東部以外に検出される。**遺物**　カマドから須恵器の小皿 (102・103) が完形で出土し、２点を掲載した。**時期**　出土遺物から 11 世紀後半代と考えられる。



19 号住居カマド
1．カマド構築材、赤褐色土、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック中量、焼土粒微量。
2．カマド構築材、赤褐色土、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック中量、焼土粒少量。
3．カマド構築材、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、炭化物少量。
4．カマド構築材、赤橙色土、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石微量、黄色スコリア微量、焼土粒多量。

19 号住居
1．覆土、黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック中量、炭化物少量。
2．床土、暗褐色、しまり強い、粘性強い、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量。
3．床土、暗黒褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石中量、黄色スコリア中量。
4．壁隅土、暗黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量　黄色スコリア中量。
5．壁隅土、黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリアブロック多量。
6．壁隅土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石多量、黄色スコリア中量、炭化物少量。



第 31 図　19 号住居及び出土遺物

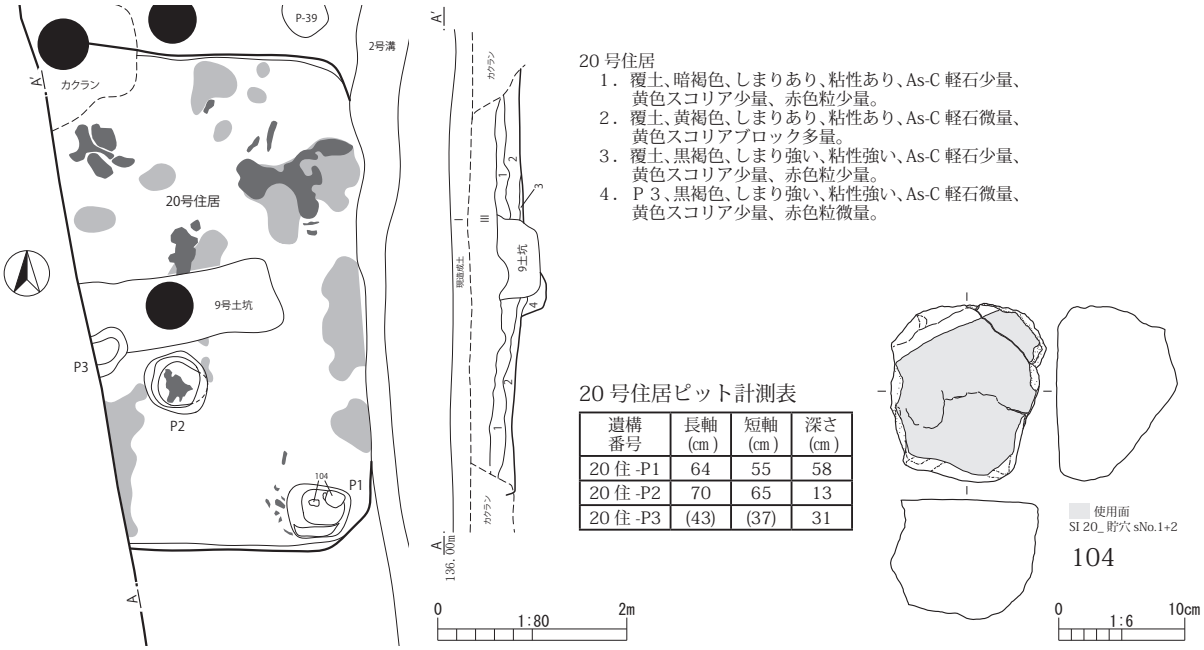
第 18 表　19 号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝cm

掲載 No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
102	19 号住居	カマド	須恵器小皿	4/5	8.0・4.4・1.4	橙色	雲母・小礫・白色粒	底部外面回転糸切り離し	酸化焔焼成
103	19 号住居	カマド	須恵器小皿	完形	9.4・5.0・1.6	橙色	雲母・石英・白色粒	底部外面回転糸切り離し	酸化焔焼成

20 号住居

位置　調査区南西隅　B-4。**状況**　２号溝に切られる。**形状・規模**　一辺のみ検出のため不明。長軸 525㎝、短軸 (310)㎝、深さ 70㎝。方位 N-1°-E。**床面**　貼り床面はない。また、全体に焼土・炭化物の分布がある。**柱穴**　３基検出される。Ｐ１は貯蔵穴と思われる。丸隅方形。**カマド**　検出されていない。**貯蔵穴**　南東隅に検出。長方形。長軸 64㎝、短軸 44㎝、深さ 58㎝。**壁周溝**　検出されていない。**遺物**　土器類出土なし。貯蔵穴より砥石が出土。**時期**　土器などの出土遺物はないが、おおよそ古代に該当するものとみられる。



20 号住居ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
20 住 -P1	64	55	58
20 住 -P2	70	65	13
20 住 -P3	(43)	(37)	31

第 32 図　20 号住居及び出土遺物

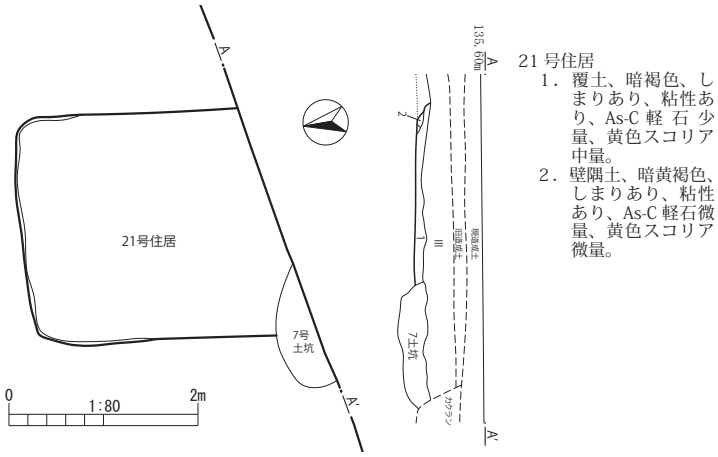
第 19 表　20 号住居出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝cm

掲載 No.	遺構名	出土位置	種別	長さ・幅・厚さ (cm)・重さ (g)	石材	形態・特徴	備考
104	20 号住居	貯穴 (P1)	石製品	20.9・17.6.0・14.3・7467	輝石安山岩	1 面のみが平坦面で、そのほかは石材の自然面や剥離面となる。平坦面の中央部は使用により平滑となる。石材は全体的に剥離やクラックが入る。	金床石か？

21 号住居

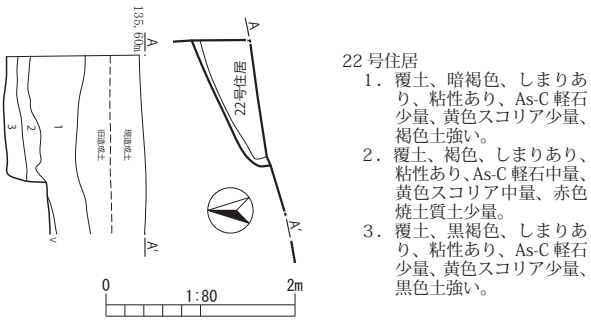
位置　調査区南東隅　E-6。**状況**　7 号土坑を切る。**形状・規模**　一辺を検出しただけで不明。長軸 (280)㎝、短軸 240㎝、深さ 75㎝。方位 N-7°-E。**床面**　貼り床面はない。**柱穴**　検出されない。**カマド**　検出されない。**貯蔵穴**　検出されない。**壁周溝**　検出されない。**遺物**　出土していない。**時期**　土器などの出土遺物はないが、おおよそ古代に該当するものとみられる。



第 33 図　21 号住居

22 号住居

位置　調査区北東　E-2。**状況**　住居の隅部分のみ検出のため不明。殆どが調査区外。**形状・規模**　不明。長軸 (145)㎝、短軸 (60)㎝、深さ 148㎝。方位 N-24°-W。**床面**　貼り床はない。**柱穴**　検出されない。**カマド**　検出されない。**貯蔵穴**　検出されない。**壁周溝**　検出されない。**遺物**　出土していない。**時期**　土器などの出土遺物はないが、おおよそ古代に該当するものとみられる。



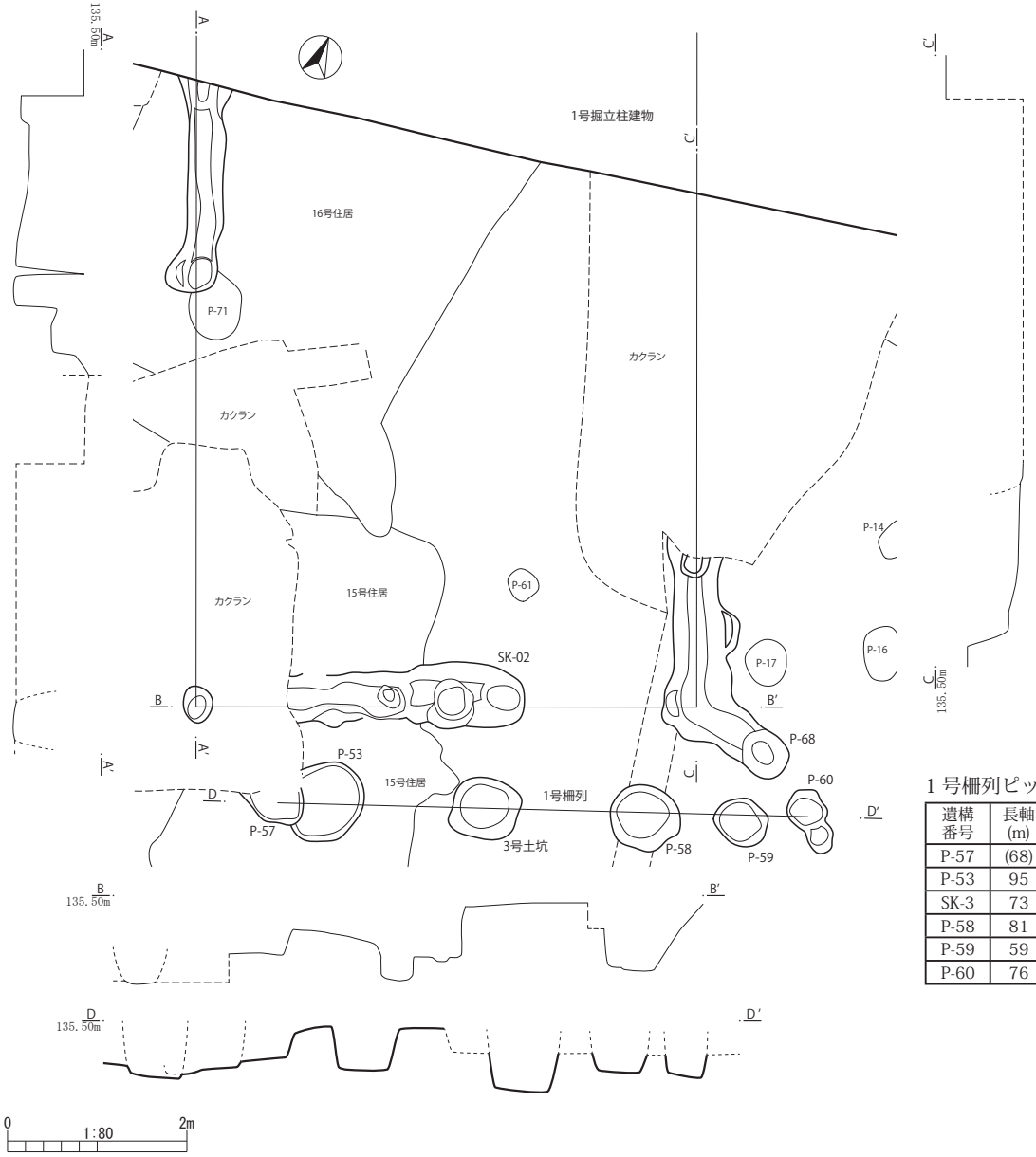
第 34 図　22 号住居

３．掘立柱建物

掘立柱建物は２棟が検出された。

１号掘立柱建物

位置　調査区北端西寄り。**状況**　15・16 号住居と重複し、共に本遺構を切っている。北側は調査区外にかかる。15 号住居の掘り下げ完了時点で不明遺構として確認していたが、16 号住居の調査終盤で布掘りの掘立柱建物であることを確信、東辺の撹乱下を探って掘り上げた。調査上の不備は正直否めないものである。また、１号柵列とした南辺にほぼ並行するピット列は、本遺構に伴う廂等の可能性もある。**形状・規模**　東西 558㎝、南北は 699㎝までを確認した。方位Ｎ -23°- Ｗの南北棟である。**柱間**　調査の不備もあり柱位置を明確に捉えることが出来なかったが、細長い断続的な土坑状に確認した堀り方の端や屈曲部、あるいは堀り方底面が一段窪む部分を繋ぐと梁行２間、桁行は３間と推定されるが、それ以外にも丸く窪む部分が不定間隔で認められるので、大壁建物のような平地式建物の一種である可能性も想起される。**遺物**　時期の明らかなものは出土していない。**時期**　南辺に並行する１号柵列出土遺物 (105) を根拠に、８世紀初頭と考えたい。



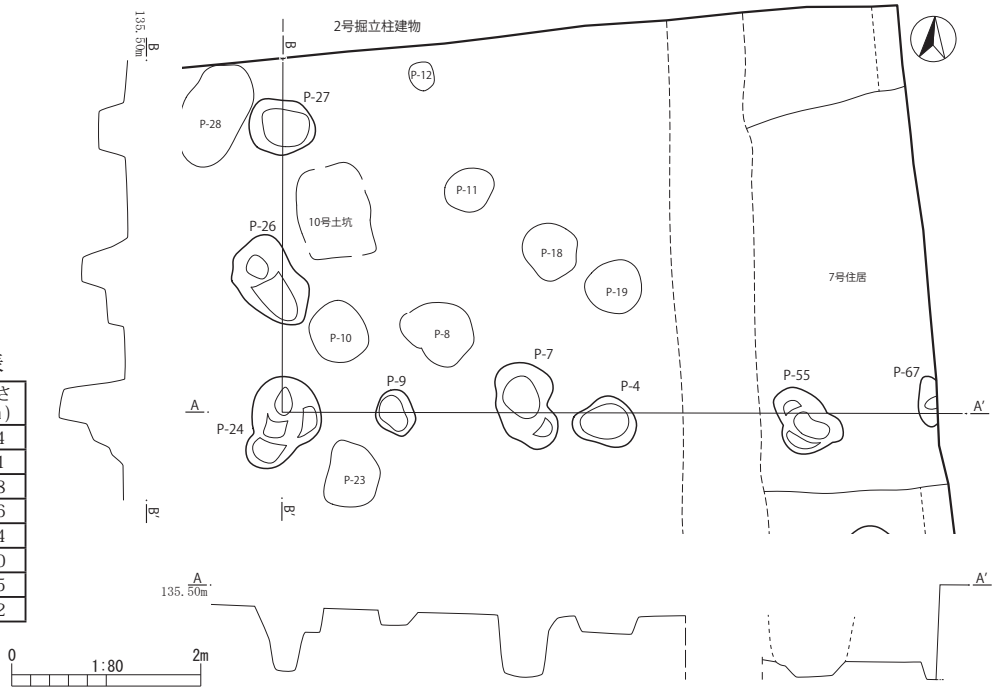
１号柵列ピット計測表

遺構番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)
P-57	(68)	(38)	15
P-53	95	(71)	13
SK-3	73	68	49
P-58	81	72	46
P-59	59	51	24
P-60	76	41	27

第 35 図　１号掘立柱建物・１号柵列

２号掘立柱建物

位置　調査区北東部　E,F-1　１号掘立柱建物の東に所在。７号住居と重複。**状況**　東および北は調査区外となる。また７号住居に切られている。**形状・規模**　南北３間以上、東西３間以上の建物となり、残存値は東西6.95m、南北　3.75m、深さ平均 38㎝で建物の北面の部分のみ。方位 N-4°-W。**柱穴**　８基を検出したが、深さは一定しない。**遺物**　出土していない。**時期**　遺物はないが、８世紀前半代の住居に切られており、８世紀以前の建物と考えられる。



２号掘立柱建物
ピット計測表

遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(㎝)
P-27	0.71	0.58	34
P-26	1.00	0.60	51
P-24	1.00	0.75	68
P-9	0.47	0.40	16
P-7	0.93	0.68	64
P-4	0.66	0.55	20
P-55	0.75	0.58	25
P-67	0.54	(0.20)	22

第 36 図　２号掘立柱建物

４．柵列

柵列は１基が検出された。

１号柵列

位置　調査区北部　C-3,D-2　１号掘立柱建物の南、15 号掘立柱建物と重複。**状況**　P-57、P-53 は 15 号住居に切られている。また P-58、P-59、P-60 は撹乱などにより不明瞭で、本来の確認面を掘り下げて確認を行った。また、北に位置する１号掘立柱建物の南辺と平行しており、庇などの付属構造の可能性がある。**形状・規模**　直線的に配列し、長さは　6.00m、方位 N-69°-E。**柱穴**　６基を検出した。**遺物**　P-53 から土師器の坏が出土した。**時期**　９世紀代の住居に切られているほか、P-53 の８世紀前半代の土師器の坏がある。

第 37 図　１号柵列出土遺物

第 20 表　１号柵列出土遺物観察表　　各単位は口径(長さ)・底径(幅)・器高(厚さ)＝㎝

掲載No.	遺構名	出土位置(注記)	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
105	柵列	覆土＋SI 15	土師器坏	3/8	(15.0)・―・(3.1)	橙色	雲母・白色粒・黒色岩片	体～底部外面手持ちヘラケズリ 内面横ナデ	15 号住居と接合

5．溝

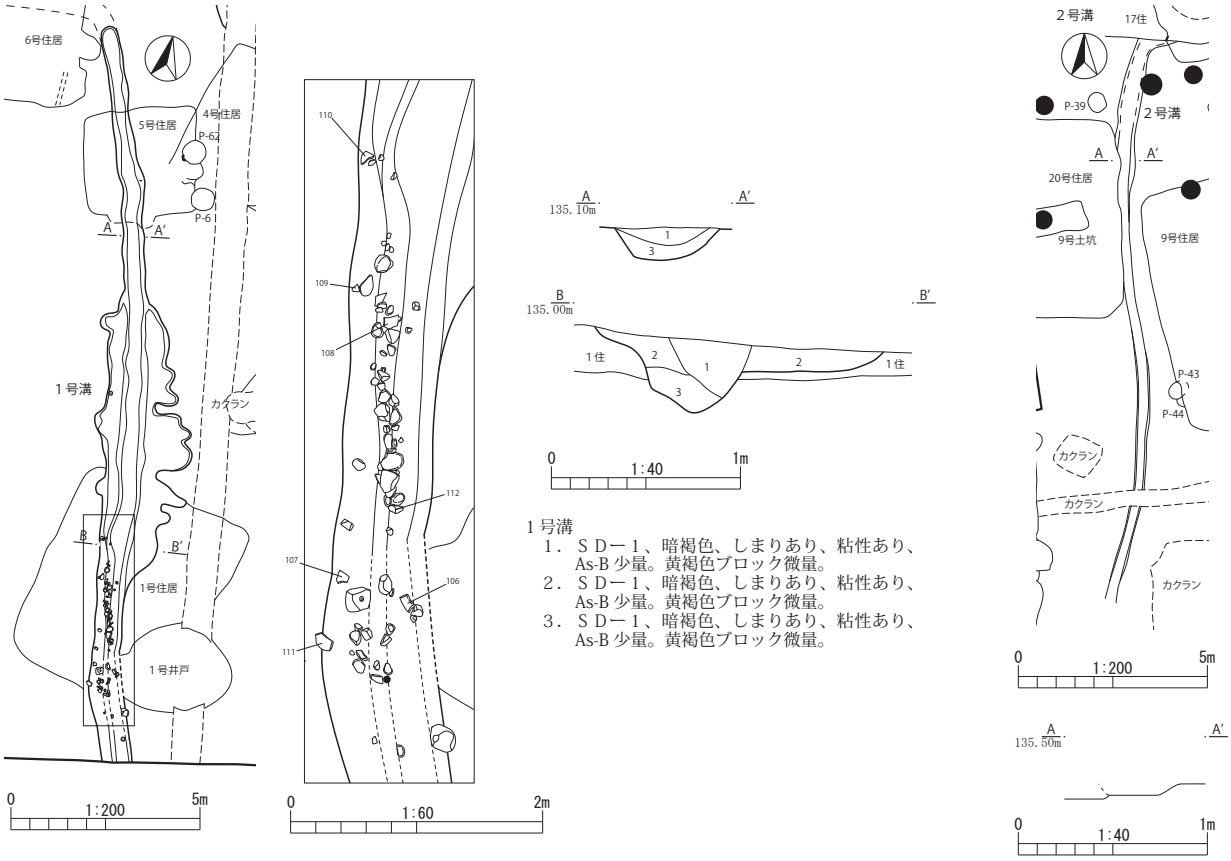
溝は２条を検出した。両溝ともに As-B 軽石を含んでおり、中世の遺構と推定される。

１号溝

位置　調査区東　E-2 ～ F-6　１号・５号住居などと重複する。**状況**　平面精査により As-B 軽石を含む遺構プランを検出。本址は１号・５号住居、１号井戸を切る。**形状・規模**　遺構は南北に走行する。また遺構の上部は一部が広がりを持つ不正成形なプランが認められるが、下部は緩やかに蛇行するがはっきりとしたプランとなる。上下のプランで時期差の存在が想定されたが、明瞭な違いは確認できず、同一の遺構とみなした。全長 19.6m、幅 (上部)0.65 m・幅 (下部)0.70 m、深さ (上部)17.5㎝・深さ (下部)39㎝、断面は段状。**遺物**　遺物の多くは遺構上部から礫とともに出土し、このうち６点を掲載した。(108・104) は軟質陶器の内耳鍋、(110) は擂鉢。(111) は軟質陶器の皿または盤類とみられ、見込部に印花文がある。(112) は凹みのある石製品であるが用途は不明。このほかは須恵器の甕・壺類 (106・107) で古代の遺物である。**時期**　出土遺物は内耳鍋などから 14 世紀終わり～ 15 世紀前半と推測される。

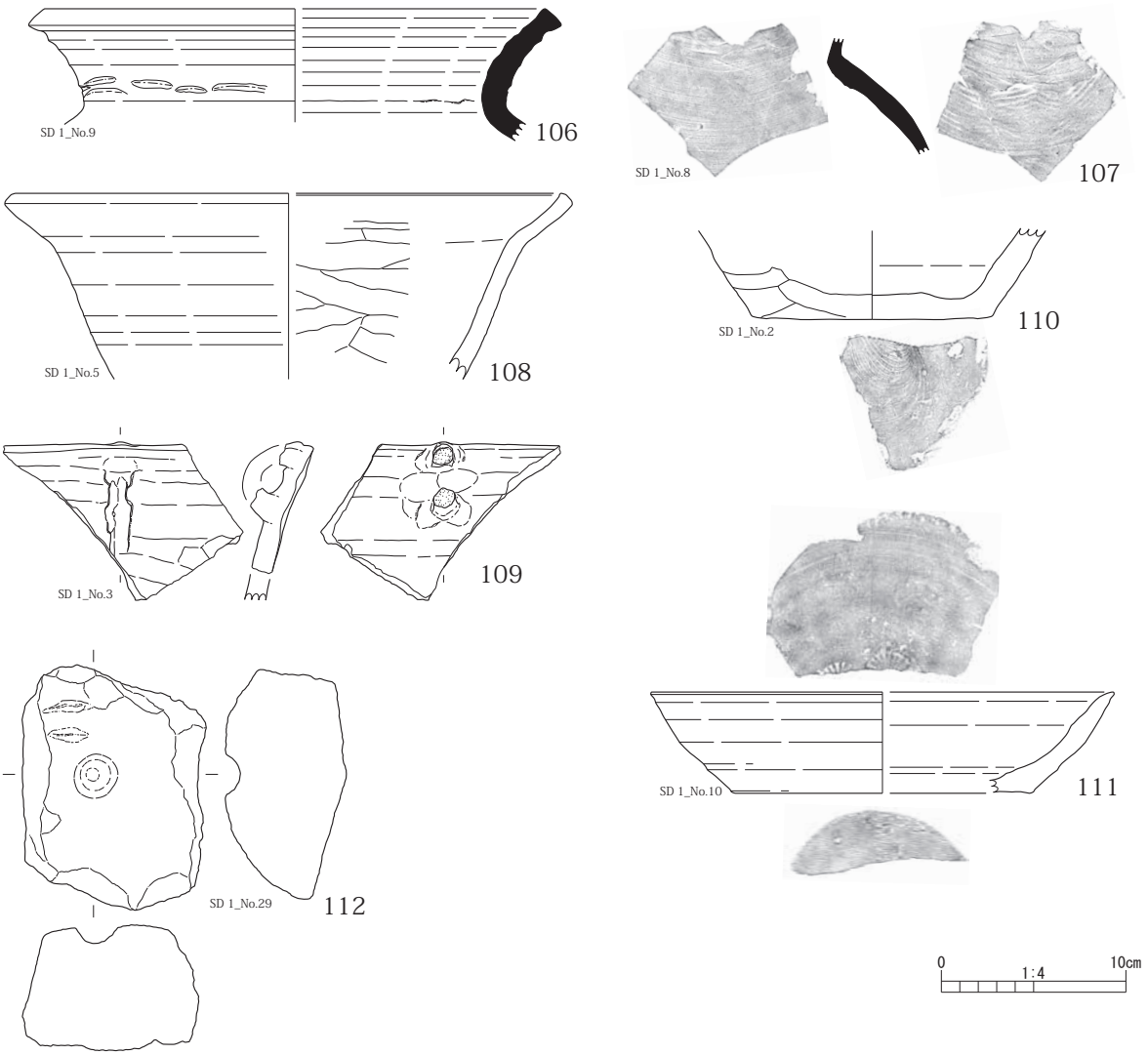
２号溝

位置　調査区西　B-3~B-6　17 号・20 号住居などと重複する。**状況**　平面精査により As-B 軽石を含む遺構プランを検出。本址は 17 号・20 号住居を切る。**形状・規模**　遺構は南北に走行する。本址の上部は後世の盛土により削平されたものと推定され、掘削後は底部がわずかに確認できる程度であり残存状況は悪い。覆土には軽石を含んでいた。全長 15.2m、幅 0.6 m、深さ９㎝・断面は皿状。**遺物**　出土していない。**時期**　覆土には As-B 軽石を含んでおり、１号溝と同様の中世の所産と推測される。



第 38 図　１・２号溝

1号溝



第 39 図　1 号溝出土遺物

第 21 表　1 号溝出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝cm

掲載No.	遺構名	出土位置 (注記)	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
106	1 号溝	覆土	須恵器 甕	口縁～頸部	(27.0)・—・—	灰黄色	白色粒・片岩	頸部外面棒状凹痕 内面横ナデ	
107	1 号溝	覆土	須恵器 甕	胴部片	—・—・(6.3)	褐灰色	白色粒	外面櫛描き状横ナデ、内面同心円状当て具痕	
108	1 号溝	覆土	軟質陶 土鍋	口縁～胴部	(30.0)・—・(10.0)	暗灰黄色	片岩	内外面横ナデ	
109	1 号溝	覆土	軟質陶 内耳鍋	口縁～胴部片	—・—・(7.0)	暗灰黄色	石英・雲母・白色粒・黒色粒	外面横ナデ 内面内耳部指頭痕	
110	1 号溝	覆土	軟質陶 擂鉢	胴～底部	—・(13.0)・(4.8)	灰黄色	赤褐色岩片・白色粒	底部外面回転糸切り離し 底部内面摩耗	
111	1 号溝	覆土	軟質陶 皿	口縁～底部	(25.0)・(16.4)・(5.4)	暗灰色	雲母・白色粒	底部外面回転糸切り離し 内面印花文	産地不明

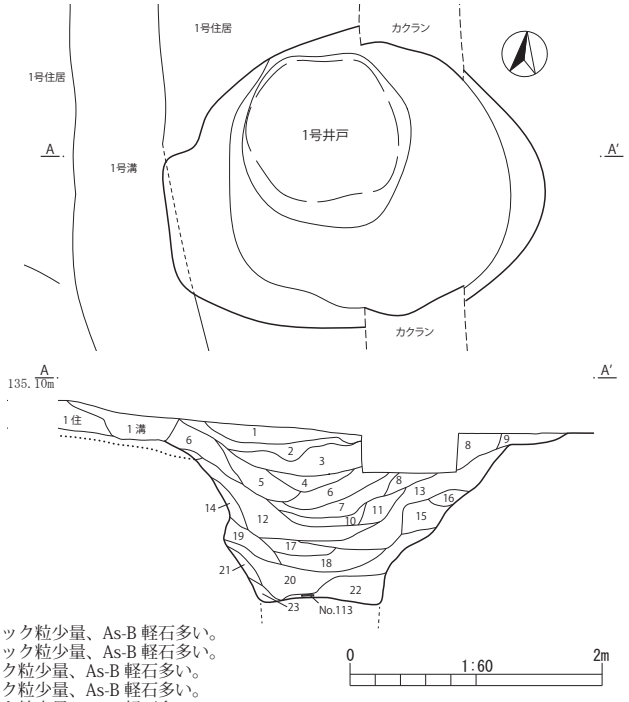
掲載No.	遺構名	出土位置	種別	長さ・幅・厚さ (cm)・重さ (g)	石材	形態・特徴	備考
112	1 号溝	覆土	石製品	19.9・14.9・10.2・3129	輝石安山岩	全体的に自然面と剥離面となる。正面の中央部に円形の窪みがある。	用途不明

6．井戸

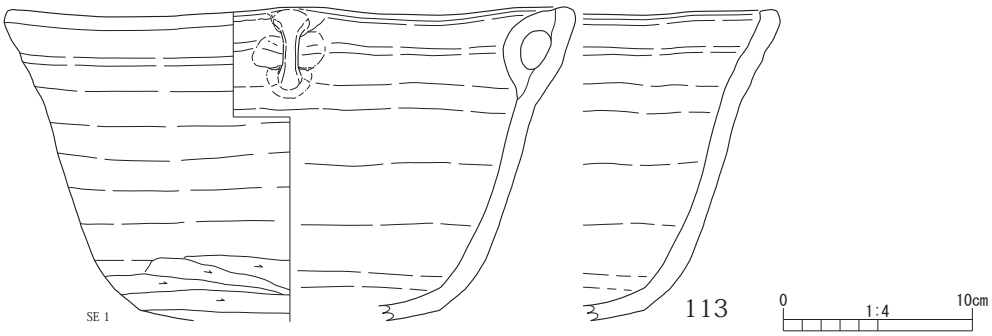
井戸は 1 基を検出した。

1 号井戸

位置　調査区南東　F-5,6　1 号住居と重複する。**状況**　平面精査により As-B 軽石を含む遺構プランを検出。本址は 1 号住居内にありこれを切る。また遺構の西側は 1 号溝があり、これに切られる。**形状・規模**　楕円形。長軸 300㎝、短軸 234㎝、深さ 162㎝、断面は逆台形状。**遺物**　遺構底面付近から内耳鍋 (113) が出土したほか、土師器および須恵器の破片が出土した。**時期**　遺構底面から出土した内耳鍋から 14 世紀後半代と推測される。



1 号井戸
1．井戸覆土、暗黒褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
2．井戸覆土、暗黒褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
3．井戸覆土、暗赤色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
4．井戸覆土、暗赤色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
5．井戸覆土、暗赤色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
6．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
7．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
8．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
9．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒中量、As-B 軽石多い。
10．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
11．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
12．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック粒少量、As-B 軽石多い。
13．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック多量、As-B 軽石多い。
14．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック少量、As-B 軽石多い。
15．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック少量、As-B 軽石多い。
16．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック少量、As-B 軽石多い。
17．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック少量、As-B 軽石多い。
18．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック少量、As-B 軽石多い。
19．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック少量、As-B 軽石多い。
20．井戸覆土、黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック多量、As-B 軽石多い。
21．井戸覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、As-B 軽石多い。
22．井戸覆土、黄色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック多量、As-B 軽石多い。
23．井戸覆土、暗灰色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、As-B 軽石多い。



第 40 図　1 号井戸及び出土遺物

第 22 表　1 号井戸出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝㎝

掲載№	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
113	1 号井戸	底面	軟質陶内耳鍋	口縁～底部	(29.4)・(15.8)・(16.4)	黒色	雲母・白色粒	胴部外面下端横位ヘラケズリ	

７．性格不明遺構

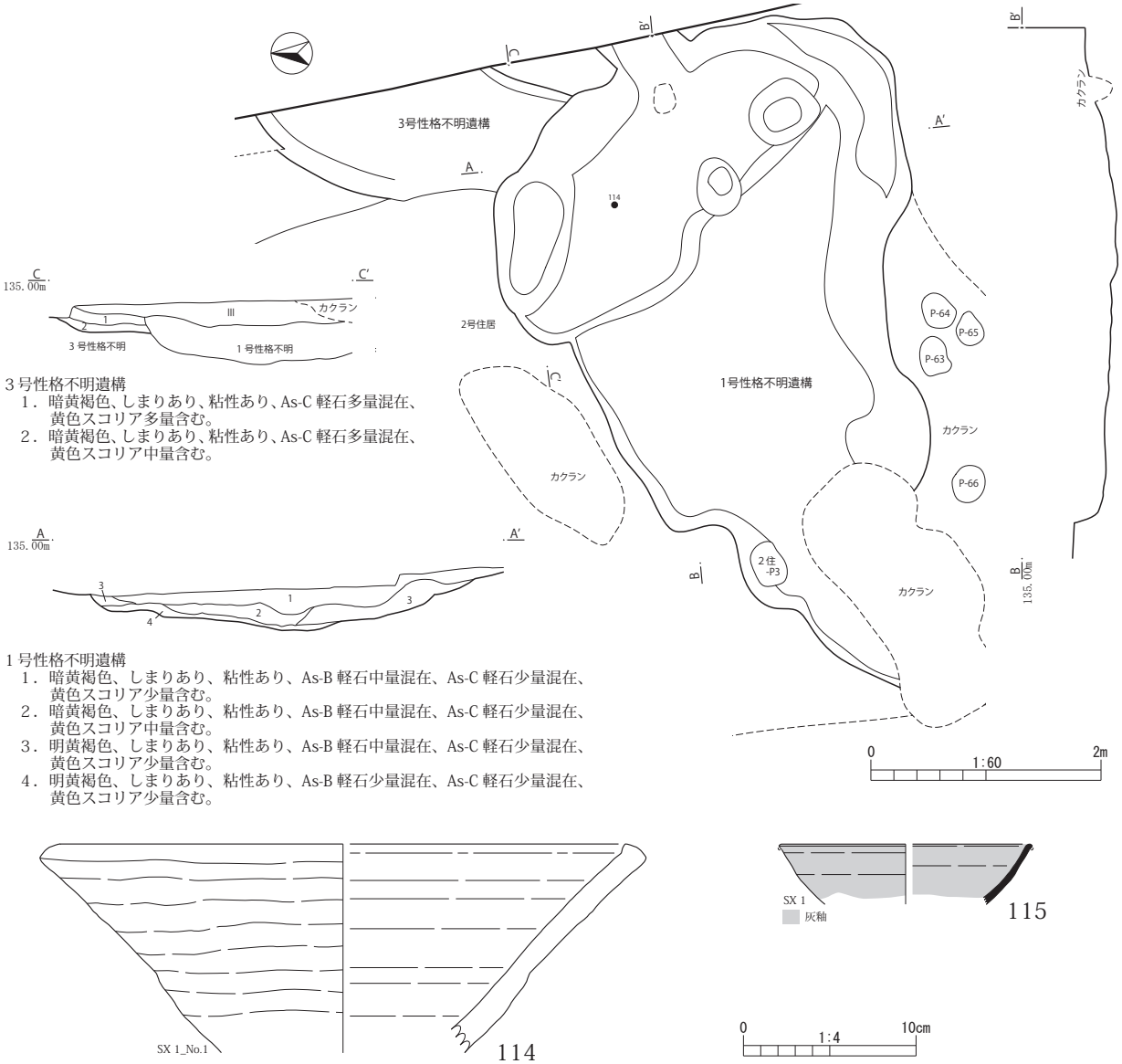
性格不明遺構は２基を検出した。

１号性格不明遺構

位置　調査区西端　B-4　２号住居と重複。**状況**　遺構の東は調査区外で、西と南は撹乱が著しい。２号住居および３号性格不明遺構を切っている。**形状・規模**　不整形。長軸 609㎝、短軸 36.12㎝、深さ最大で 54㎝、断面はやや起伏のあるレンズ状。**遺物**　２点を掲載し、(114) は軟質陶器の擂鉢、(115) は灰釉陶器片である。このほか、土師器、須恵器片が複数出土している。**時期**　出土遺物に擂鉢があり中世の所産と推測される。

３号性格不明遺構

位置　調査区西端　B-4　２号住居と１号性格不明遺構が重複。**状況**　１号性格不明遺構に切られている。２号住居との切り合いは新旧不明であった。覆土の２層には面的な硬化面が確認でき、道状遺構の可能性が考えられる。**形状・規模**　溝状。長軸 (残存部)141㎝、短軸 138㎝、深さ 24㎝、断面は皿状。**遺物**　土師器、須恵器片が少量出土している。**時期**　遺構覆土には As-B 軽石はなく古代の所産と推測される。



第 41 図　性格不明遺構及び出土遺物

第 23 表　性格不明遺構出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ) ・底径 (幅) ・器高 (厚さ) ＝cm

掲載№	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
114	不明遺構	覆土	軟質陶 擂鉢	口縁～胴部	(34.0)・―・(12.1)	黒色	雲母・白色岩片・赤褐色岩片	内面横ナデ・下部摩耗	
115	不明遺構	覆土	灰釉陶 坏	口縁～体部	(14.4)・―・(3.4)	灰白色	白色粒	内外面施釉	

8．土坑

本遺跡では土坑は 10 基を検出した。このうち 5 基は住居内の土坑や掘立柱建物や柵列を構成する遺構となり、最終的に土坑として認められた遺構は 5 基である。

1 号土坑

位置　調査区南西　B-6　8 号住居の西に所在。**状況**　平面精査により円形のプランを検出。**形状・規模**　円形。長軸 106㎝、短軸 96㎝、深さ 19㎝、断面は深い皿状。**遺物**　出土していない。**時期**　遺構覆土に As-B 軽石はなく、古代の所産と考えられる。

6 号土坑

位置　調査区西端　A-3　20 号住居の北に所在。**状況**　平面精査により遺構プランを検出。遺構内に 30・31・32 号ピットがあるが遺構の切り合いは不明である。**形状・規模**　遺構の西は調査区外となるが確認された平面形はおおむね不整形。長軸 (274)㎝、深さ 54㎝、断面は皿状と推定される。**遺物**　出土していない。**時期**　遺構覆土に As-B 軽石はなく、古代の所産と考えられる。

7 号土坑

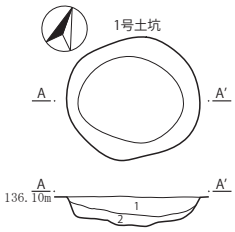
位置　調査区南端　E-6　21 号住居と重複。**状況**　平面精査により遺構プランを検出。本址が 21 号住居を切っている。**形状・規模**　遺構の南は調査区外となるが確認された平面形は長楕円形と推定される。長軸 160㎝、深さ 42㎝、断面は深い皿状と推定される。**遺物**　出土していない。**時期**　遺構覆土に As-B 軽石はなく、古代の所産と考えられる。

9 号土坑

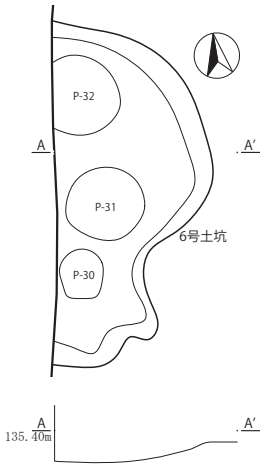
位置　調査区西端　B-4　20 号住居と重複。**状況**　20 号住居掘削により、住居底面で遺構プランを検出。本址が 20 号住居を切っている。**形状・規模**　遺構の西は調査区外となるが確認された平面形は長楕円形と推定される。長軸 (残存部)200㎝、短軸 73㎝、深さ 20㎝、断面は鍋底状。**遺物**　土師器、須恵器片がわずかに出土した。**時期**　出土遺跡から平安時代の所産と推測される。

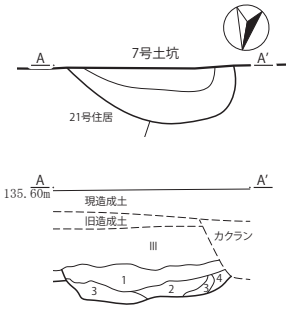
10 号土坑 (旧 25 号ピット)

位置　調査区西端　E-1　2 号掘立柱建物の範囲内に位置する。**状況**　平面精査により遺構プランを検出。調査段階では 25 号ピットとして掘削を行ったが、改めて土坑に変更した。**形状・規模**　隅丸方形。長軸 97㎝、短軸 78㎝、深さ 12㎝、断面は段状で起伏がある。**遺物**　土師器の坏 (116)、須恵器の蓋 (117)、坏 (118) などが出土した。**時期**　出土遺跡から平安時代の所産と推測される。

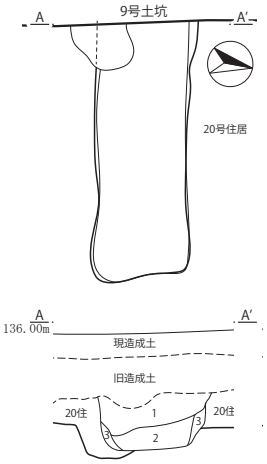


1号土坑
1．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック少量。
2．覆土、褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色ブロック少量、褐色土強い。

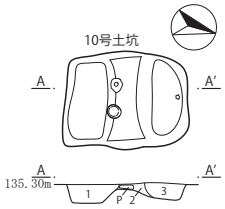




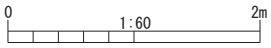
7号土坑
1．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量。
2．覆土、暗黄褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量　赤橙色土多量。
3．覆土、黒褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、炭化物少量。
4．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア中量。

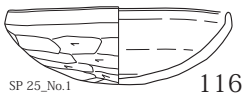


9号土坑
1．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、赤色粒少量。
2．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア少量、赤色粒少量。
3．覆土、暗黄色、しまりあり、粘性あり、As-C 軽石少量、黄色スコリア多量、赤色粒少量。



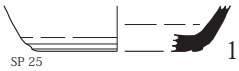
10号土坑
1．覆土、暗褐色、しまりあり、粘性弱い、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック少量。
2．覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック中量。
3．覆土、暗褐色、しまり強い、粘性あり、As-C 軽石多量混在、黄色ブロック細粒大量、炭化物少量。



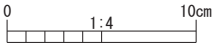


116

117



118



第 42 図　土坑及び出土遺物

第 24 表　土坑出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝cm

掲載 No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
116	10 号土坑	底面	土師器坏	口縁～底部	11.6・―・4.1	明赤褐色	雲母・白色岩片	体～底部外面手持ちヘラケズリ	
117	10 号土坑	底面	須恵器蓋	鈕～体部	―・鈕径 2.9・(1.9)	褐灰色	白色粒	天井部外面回転ヘラケズリ 内面磨耗状 (転用硯)	ボタン状鈕
118	10 号土坑	覆土	須恵器坏	体～底部片	―・(9.0)・(2.4)	内 : 灰 外 : オリーブ黒	白色粒	体部外面施釉 内面横ナデ	外面に自然釉

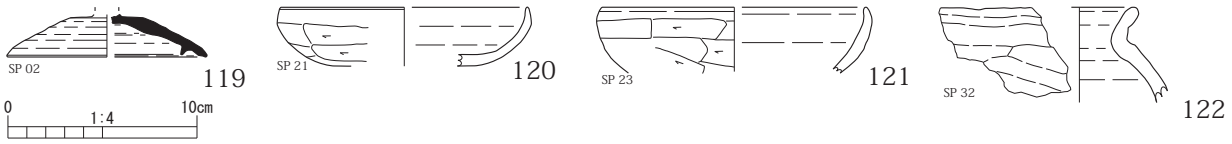
9．ピット

調査段階で 72 基を検出したが、整理の結果、住居内ピット、掘立柱建物、柵列、土坑に変更するものがあり、最終的にピットとみなしたものは 52 基である。ピットの配置は全体図 (第 4 図) を用い、詳細は第 25 表で掲載する。ピットから出土した遺物としては 2 号ピットからは須恵器の蓋 (119)。21 号ピットからは土師器の坏 (120)。23 号ピットからは土師器の坏 (121)。32 号ピットからは土釜 (122)。

第 25 表　ピット計測表

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
1 号ピット	92	62	21	
2 号ピット	(97)	(31)	29	
3 号ピット	(61)	(25)	29	
4 号ピット	2 号掘立柱建物			33 頁
5 号ピット	欠番			
6 号ピット	61	59	27	
7 号ピット	2 号掘立柱建物			33 頁
8 号ピット	81	66	36	
9 号ピット	2 号掘立柱建物			33 頁
10 号ピット	64	59	19	
11 号ピット	55	46	27	
12 号ピット	30	26	30	
13 号ピット	80	77	21	
14 号ピット	57	35	26	
15 号ピット	40	34	36	
16 号ピット	60	45	56	
17 号ピット	52	46	48	
18 号ピット	61	56	31	
19 号ピット	60	57	46	
20 号ピット	116	40	11	
21 号ピット	71	65	31	
22 号ピット	54	54	25	
23 号ピット	73	63	33	
24 号ピット	2 号掘立柱建物			33 頁
25 号ピット	10 号土坑に変更			38 頁
26 号ピット	2 号掘立柱建物			33 頁
27 号ピット	2 号掘立柱建物			33 頁
28 号ピット	116	66	55	
29 号ピット	51	42	34	
30 号ピット	39	35	16	
31 号ピット	62	58	9	
32 号ピット	(53)	(64)	42	
33 号ピット	45	33	67	
34 号ピット	53	49	28	
35 号ピット	61	54	32	
36 号ピット	28	25	14	

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
37 号ピット	46	40	25	
38 号ピット	43	43	59	
39 号ピット	51	46	27	
40 号ピット	60	(43)	47	
41 号ピット	100	48	53	
42 号ピット	41	35	51	
43 号ピット	(37)	41	30	
44 号ピット	(27)	(16)	9	
45 号ピット	57	49	47	
46 号ピット	15 号住居柱穴「15 住 -P10」に変更			24 頁
47 号ピット	15 号住居柱穴「15 住 -P9」に変更			24 頁
48 号ピット	15 号住居柱穴「15 住 -P8」に変更			24 頁
49 号ピット	(88)	53	16	19 住に切られる
50 号ピット	(88)	53	16	
51 号ピット	24	21	6	
52 号ピット	39	(37)	29	
53 号ピット	1 号柵列			32 頁
54 号ピット	36	29	23	
55 号ピット	2 号掘立柱建物			33 頁
56 号ピット	15 号住居柱穴「15 住 -P5」に変更			24 頁
57 号ピット	1 号柵列			32 頁
58 号ピット	1 号柵列			32 頁
59 号ピット	1 号柵列			32 頁
60 号ピット	1 号柵列			32 頁
61 号ピット	36	33	5	
62 号ピット	63	63	44	
63 号ピット	33	24	21	
64 号ピット	33	27	21	
65 号ピット	30	24	30	
66 号ピット	33	28	57	
67 号ピット	2 号掘立柱建物			33 頁
68 号ピット	56	49	60	
69 号ピット	1 号掘立柱建物			32 頁
70 号ピット	54	47	14	
71 号ピット	77	58	28	16 住に切られる
72 号ピット	41	41	12	



第 43 図　ピット出土遺物

第 26 表　ピット出土遺物観察表

各単位は口径 (長さ)・底径 (幅)・器高 (厚さ) ＝cm

掲載 No.	遺構名	出土位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	調整	備考
119	2 号ピット	覆土	須恵器 甕	天井～口縁部破片	(10.4)・—・(2.3)	褐灰色	小礫・白色粒	天井部外面回転ヘラケズリ・施釉、内面かえり	
120	21 号ピット	覆土	土師器 坏	口縁～底部	(13.0)・—・(3.1)	橙色	雲母・石英・白色岩片	体～底部外面手持ちヘラケズリ	
121	23 号ピット	覆土	土師器 坏	口縁～体部	(14.0)・—・(3.4)	橙色	雲母・石英・白色岩片	体～底部外面手持ちヘラケズリ	
122	32 号ピット	覆土	須恵器 土釜	口縁～胴部片	—・—・(5.0)	橙色	結晶片岩・雲母・白色粒	内面横ナデ	

第Ⅳ章　分析

１．棟高南八幡街道遺跡３出土炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

１－１．はじめに

棟高南八幡街道３遺跡は群馬県高崎市棟高町字南八幡街道に所在する。
本分析調査では、平安時代と考えられる住居跡から出土した炭化材について、用材選択を検討する目的から樹種同定を実施した。

１－２．試料

試料は、16 号住居の床面上を中心に出土した炭化材である。20 点 (W 1 ～ 20) を採取し、その中から位置と保存状態を考慮して 13 点を選択した。

１－３．分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

１－４．結果

樹種同定結果を表１に示す。炭化材は、広葉樹４分類群 (コナラ属クヌギ節・コナラ属コナラ節・クリ・エゴノキ属) とイネ科に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

第 27 表　樹種同定結果

遺構	番号	位置	形状	種類
16 号住居	W1	カマド前の床面	板状	コナラ属コナラ節
	W2	カマド前の床面	棒状	コナラ属コナラ節
	W3	カマド前の床面	棒状	コナラ属コナラ節
	W5	住居中央付近	棒状	コナラ属コナラ節
	W6	住居中央付近	棒状	コナラ属コナラ節
	W7	住居中央付近	棒状	クリ
	W8	住居中央付近	棒状	コナラ属クヌギ節
	W9	住居中央付近	棒状	コナラ属コナラ節
	W10	住居中央付近	棒状	コナラ属コナラ節
	W12	住居西壁沿い	不明	イネ科
	W13	住居西壁沿い	棒状	コナラ属コナラ節
	W16	住居西壁沿い	棒状	エゴノキ属
	W17	住居西壁沿い	棒状	コナラ属コナラ節

・コナラ属クヌギ節（Quercus sect. Cerris）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～ 20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ節（Quercus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～ 20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～ 15 細胞高。

・エゴノキ属（Styrax）　エゴノキ科

試料は保存状態が極めて悪い。散孔材で、道管単独または２～４個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。また、晩材部では道管の分布密度が低くなる傾向がある。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互

状に配列する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～20細胞高。

・イネ科（Gramineae）

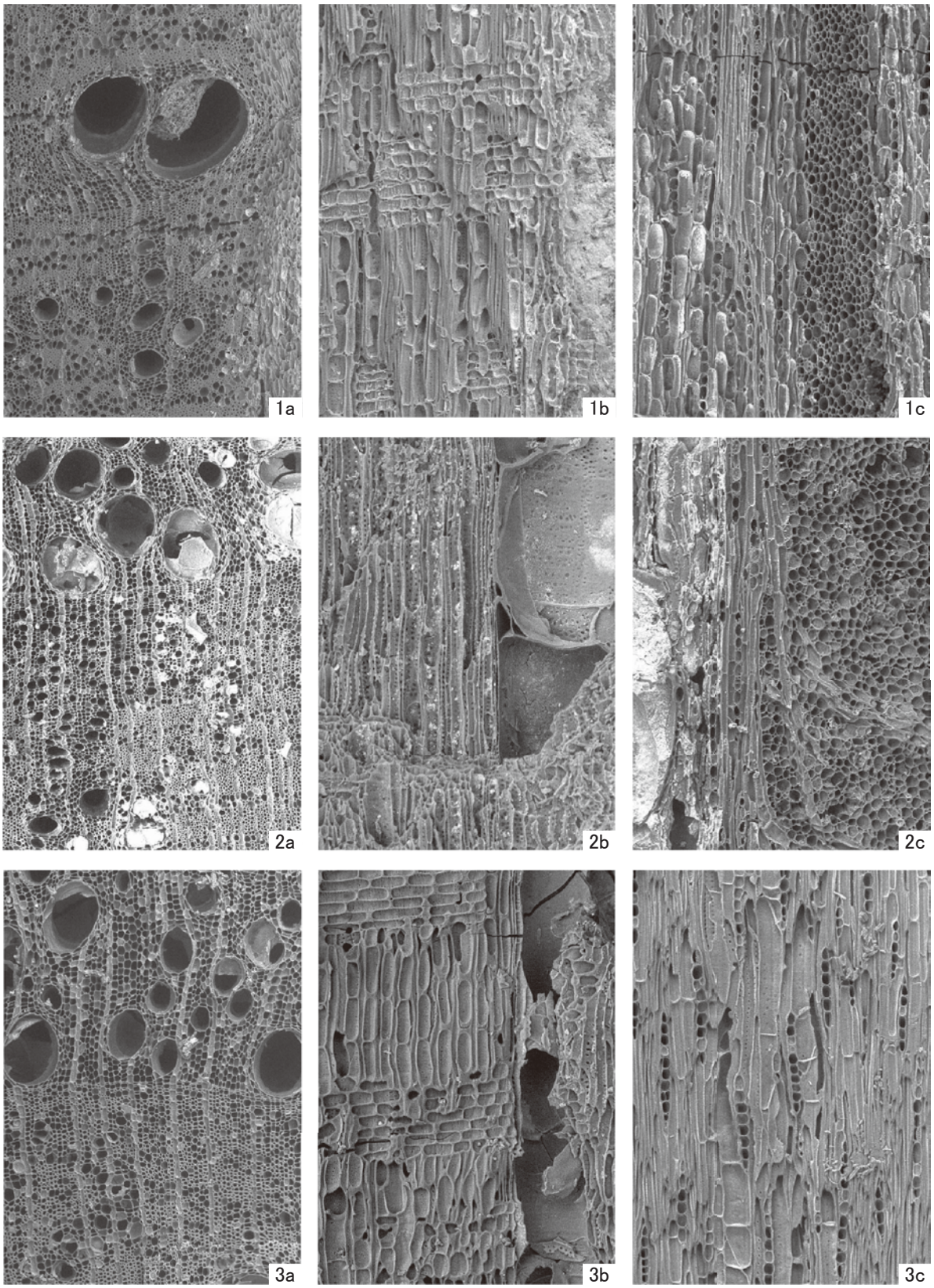
試料は、微細な破片が固結した状態である。横断面では、２対４個の道管の外側に師部細胞があり、これらをやや厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

１－５．考察

平安時代に帰属するとされる16号住居は、住居北側の一部が調査区外となる。炭化材は、住居跡床面を中心に出土しているが、いずれも細い棒状あるいは板状の小片であり、木取りが観察できる試料は無かった。多くは建築部材の可能性があるが、垂木などとするには細いため、垂木の焼けた部分のみが残り、多くは消失した可能性や、垂木以外の細い材でも利用可能な部位が炭化・残存した可能性等が考えられる。なお、W6は、床面上に一部が残るのみであるが、残存部位から削出丸木状を呈すると考えられ、大きさから柄等の木製品に由来する可能性もある。

これらの炭化材には、５種類が確認された。広葉樹４種類のうち、クリを除く３種類は、遺跡周辺の現植生や分布等を考慮すれば、クヌギ節はクヌギ、コナラ節はコナラ、エゴノキ属はエゴノキの可能性が高い。各種類の材質等についてみると、広葉樹のクヌギ節(クヌギ)、コナラ節(コナラ)、クリは二次林等に生育する落葉高木で、エゴノキ属(エゴノキ)はその林縁部等に生育する落葉小高木である。クヌギとコナラは、関東地方の二次林の主要な構成種であるが、コナラが比較的乾いた環境に生育するのに対し、クヌギはより湿った環境を好み、時にエノキやムクノキと共に河畔林に生育することもある。木材の材質をみると、いずれも重硬な部類に入り、強度は高い。検出された炭化材が建築部材とすれば、強度の高い木材を利用したことが推定される。クヌギ節やコナラ節は、二次林の主要な構成種として、遺跡周辺で比較的容易に多量の木材を得ることができたと考えられる。一方、木製品の可能性もあるW6はコナラ節に同定され、建築部材と同様の木材が利用されたことが推定される。なお、W12はイネ科の稈(茎)であった。実体顕微鏡で観察した範囲では、少なくとも５～６本がまとまった状態で炭化している。この状況から、屋根を葺く萱材等に由来する可能性がある。

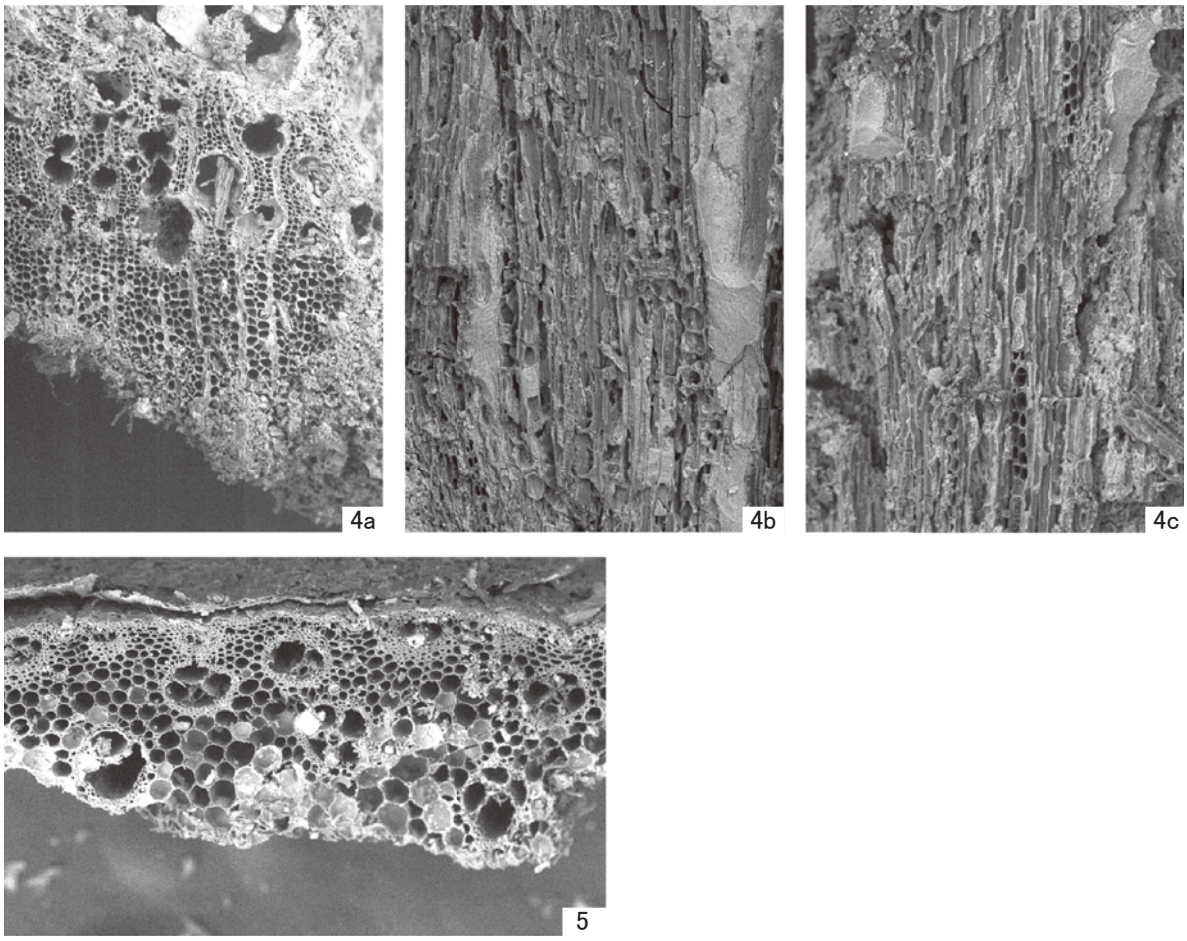
伊東・山田(2012)のデータベースによれば、旧群馬町では、保渡田八幡塚古墳において、10世紀後半以前とされる竪穴住居跡から出土した、上屋材とされる炭化材について樹種同定が実施されており、クマシデ属、フサザクラ、コナラ節、カエデ属、イヌエンジュ、ヤナギ属などが報告されている。また、比較的近い地域で地形的に似たような環境に立地した遺跡では、下東西清水上遺跡(前橋市)の９世紀中葉とされる住居跡でクリ、ヤマグワ、ケヤキ、サクラ属、10世紀中葉とされる住居跡でモミ属、ヒノキ科、イヌシデ節、コナラ節、クリ、ケヤキ、ヤマグワ、サクラ属、トネリコ属が報告されている。元総社西川・塚田中原遺跡(前橋市)では、９世紀後半とされる住居跡出土炭化材に、クリとケヤキを中心に、ヤナギ属、ヤシャブシ亜属、クヌギ節、ヤマグワ、ウメまたはモモ、カエデ属が報告されている。いずれもコナラ節は認められるが、コナラ節が主体となる住居は認められず、似たような地形環境であっても、植生の局所的な違い等を反映して利用状況が異なっていた可能性がある。なお、コナラ節を主体とした住居跡は、本遺跡からはやや離れ、地形的にも榛名山東麓の台地上で若干異なる、田中Ⅱ遺跡(渋川市)の10世紀末～11世紀初頭とされる住居跡で確認されている(伊東・山田,2012)。クリが若干混じる点も、本遺跡に近い用材選択として注視される。



1.コナラ属クヌギ節(SI-16;W8)
2.コナラ属コナラ節(SI-16;W1)
3.クリ(SI-16;W7)
a:木口,b:柾目,c:板目

100 μ m:a
100 μ m:b,c

第 44 図　炭化材①



4.エゴノキ属(SI-16;W16) a:木口,b:柾目,c:板目
5.イネ科(SI-16;W12) 横断面

100μm:4a,5
100μm:4b,4c

第 45 図　炭化材②

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .
伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.
伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.
伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.
伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.
伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.
伊東隆夫・山田昌久 (編),2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,449p.
島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

第Ⅴ章　補遺

1．8号住居の竈 (カマド) 構造について

はじめに　竪穴建物の壁に作り付ける竈は、燃焼室 (焚口・懸け口・燃焼室壁) と煙出し (煙道) の二つの施設から成り立つ。この燃焼室と煙道の位置関係が煮炊きにおける熱効率に大きく関係していると考えられる。

筆者は、近年の調査検討 (参考文献 1・2) から、竪穴建物に作り付ける竈の基本的な構造は「倒炎方式」であると考え提唱している。この「倒炎方式」では、焚き口で加熱された熱気が、一旦竈天井部に上昇し、還流して燃焼室奥壁下部に設けられた煙道を通って屋外に排出される。燃焼室内での熱滞留時間が長く、保温効果が高い構造である。(註 1) また竈の構造を検討するにあたっては、その構築方法や手順も検討してきた。その結果、竈構築の際には必ずと言ってよいほど数度の「空焚き」を行っており、使用時の煙道や燃焼室はその内側に構築されていたことが確認できた。(参考文献 3 ～ 5)

従来、竈は調査時点でその多くが崩落しているものと思われていた。しかし、改めて検討しなおした結果、燃焼室部分は鍋釜類 (甕) 撤去による天井部の崩壊と、燃焼室側壁 (袖) を壊す行為や、焚口天井石を移動させる行為を行っているため、本来の形状をのこしていないが、煙道部分は手付かずの状態であることが多いことが分かってきた。本遺跡の調査では燃焼室と煙道の位置関係、煙道空間の形状を検証することを目的の一つとした。

また調査方法としては、「西太田遺跡 6 」などでの調査経験から竈正面から煙道出口にかけての縦方向断面観察を優先した。これによって一部横断面の情報が失われるリスクはあるが、煙道空間の残存状況や燃焼室奥壁の位置を探るためには有効と考えた。

8号住居の竈について　8号住居は本調査区中でも大型とされる竪穴建物で 8 世紀初頭に属する。確認面から床面までの遺存深度も深く (およそ 70㎝)、従って竈の良好な遺存状況が期待された。しかし多くの竈遺構に見られるように、焚口部分や燃焼室上部は崩壊していた。ただし、その土層断面観察からは多くの情報が得られたので、詳述して竈の構築と構造について検討しておきたい。

8号住居の竈は新旧 2 基の竈が確認されており、当初は北辺東寄りに設置されたものが東辺北寄りに作り替えられている。(第 14・15 図)

北竈 (旧竈) 第 15 図　煙道部先端のみ残存する。掘方の痕跡が認められており、掘り込んで構築するオープンカットの手法を採用している。床面上 5 ㎝のあたりから壁外に導き出されている。角度は 42 度。さらに床から 30㎝あたりで角度を変換して直角に立ち上がる。壁から残存する煙道先端部までは 40㎝であった。東竈 (新竈) に対して煙道の角度が急であり、煙出し口が建物壁や屋根構造に近い印象である。竈を作り替える際の竈スタイルに変化がある例として注意したい。(註 3)　同じ「倒炎方式」ではあっても建物との関係、特に屋根のふきおろし位置、壁立位置に連動して燃焼室位置にも違いがあると考えられる。なお、北に竈を設置する 9 号住居とは残存状況、特に床面までの深度が大きく異なるので竈構造の詳しい対比はしがたい。

東竈 (新竈) 第 15 図・第 46 ～ 52 図　本竈は煙道入口と燃焼室奥壁との位置関係、煙道空間の形状を確認することを重要な検証目的としたため、縦断面の土層観察を優先して調査を進めた。

掘り方　本遺構の特徴の一つに、大きな掘り方を持っていることがあげられる。袖部は住居壁に直接取り付けるのではなく、この壁外に大きく掘り込んだ掘り方の内側にひとまわり小さく土を貼り付けてゆくのと連動して袖も住居内に形造ってゆく構造である。竈を構成する左右の袖は特に壁に取り付ける際の堅牢さを要求されるのであろう。8号住居では掘り方を掘り、しっかりとした暗褐色土を充填している。この充填土は特別な土を使っている様子はない。地山の褐色土や黒色土、黄褐色土 (ローム) の混合土である。また、同時に燃焼室などの竈本体下部も掘りこんでいるようで、この段階で設計がきちんとされていることがわかる。(第 15 図)

空焚き痕跡　本遺構では強い空焚き痕跡が確認された。平面確認の時点で、両袖先端から東壁へ全長 180㎝ほどのはっきりした被熱痕跡が馬蹄形に認められた。掘り方に土を充填し、あらかたの形状を作ってのち強い空焚きを行っている。その際も仮の天井は造られていたと考えられる。この天井は空焚き後さらに本体を造るために壊されるので、上部から少しずつ土をはがしても天井部は確認できない。しかし横断面には空焚き時の側面がオーバーハングしている状況が観察でき、天井部の存在を示している (第 54 図)。さて、空焚き後破壊した天井部を取り除き、あらかた燃料や残滓をどけ (註 4)、煙道空間を確保し (註 5)、煙道部全体を充填土で覆う。さらに仮の燃焼室奥壁と燃焼室両側壁を積み上げ、この段階で煙道と燃焼室各辺の空焚きを行っているようだ。奥壁と考えられる面には被熱痕跡が明確でほぼ方形の被熱した遺構が確認できる。縦断面図 (第 46 図) にみられる煙道空間上の充填土が☆印土層と接する面は、第 46 図で示したように被熱痕跡が認められる。平面的に探ってみても、この面がかなり均質に被熱しており、単なる使用による被熱や赤化とは考えられない。さらに断面による観察では、☆印の土が三角形にみられるが焚口側の土はこれほど被熱していない。日常的な使用時点ではこの程度の赤化しか生じないのだろう。奥壁の項でも述べるが、この☆印の土は使用時点で鍋釜を燃焼室内に固定するための土で、側止め、あるいは奥壁、燃焼室天井部の土と解釈できよう。燃焼室空間と煙道部の空焚きは、竈構築最終段階の重要な作業といってよいだろう。この最終段階の空焚きは鍋釜類をセットして行ったものか、仮に天井を塞いで行ったものかについてはさらに検討が必要とされる。本遺跡の観察だけでは結論付けられない。また掘り方段階でも空焚きを行っている場合もあるが、本遺構で第一回目とした空焚きは充填土の様相から再検討したい。類例の詳細な対比を行いたい。

焚口部　燃焼室　焚口天井石は見られなかった。両袖先端は石の抜き取り痕跡が見られた。床面上でも天井石や袖石に相当するような石の出土はないようなので、再利用されたかと考えている。

燃焼室　左右の壁は空焚き痕跡の内側に沿うように作られていた。特に右側の袖は調査時点で一部を飛ばしてしまったため空焚き痕跡の袖に接しているように見えるが、基底面ではそれぞれ内側に粘土が確認できているので (第 52 図破線部分) 焚口幅、燃焼室幅ともに 40㎝ほどであろう。鍋釜類 (甕などの煮炊具) が抜かれ、天井部は崩落している。空焚きの項でも述べたように、燃焼室は強い空焚き (図上で第 2 回としたもの) の後煙道空間を作り周りに土を充填し、あらかた形作った燃焼室と煙道をさらに強く空焚きする。これによってほぼ方形の燃焼室が確保される。燃焼部奥行きはおよそ 40㎝である。支脚位置は不明である。使用時点の火床面奥に一部柔らかい部分が認められたが、明確に支脚痕とは認識できなかった。

火床面　上下二枚の火床面が確認されている。(第 46・47 図) 上面は数枚の炭・灰層に挟まれた火床面で、およそ 5 枚確認できた。使用時点の火床面は上部のものと判断している下部の火床面は竈設計時点の床面であったらしく、比較的平坦面にあり被熱も均質で強い。日常的な使用状態の使用とは考えられない。単色で強い被熱から考えても、空焚き時点の火床面とすべきだろう。ほぼ直径 30㎝の赤化である。

煙道部 (煙道空間の遺存と形状の把握)　燃焼室奥壁の下部に幅 20㎝高さ 5 ㎝程の灰・焼土の柔らかい土が確認できた。横断面からはこの空間はしっかり赤化した焼土によってくるまれており、これが煙道空間とその側壁、天井であると確認できる。やや潰れてはいるが、横長方形である。縦断面によれば、上面に焼土が確認でき、燃焼室の底面から緩やかな角度 (煙道は 3 段に作られており、 1 ・ 2 段目はおよそ 20 度、 3 段目で傾斜変換して 50 度である) で壁外に導かれている煙道である (建物壁から 120㎝離れて煙道出口が確認できた。平面形状は方形)(第 46 ～ 49 図)。一部天井部が崩落している様子も観察できるが、基本的に煙道空間は保持されていた。この空間天井部にしっかりとした焼土化した粘土が巻きつけてあるように観察できるが、その上部やわきの空間 (空焚き空間と煙道設置との間) にはガラガラとした焼土ブロック、灰、炭化物、粘性の強い褐色土などが充填されていた。これは煙道空間を確保すれば、その上や空間にはある程度湿気のないこれらの土を充填すれば良しとする様子が見て取れる。数度の空焚きなど多くの手順を踏むのは、煙道空間を保持するためであると考えてよ

いだろう。本遺構では明確ではないが、竈燃焼室に対して、煙道は右側に寄せて設計しているようだ。他の遺跡でも確認されている。設計の基本には建物構造との関係もあり、また室内の空間認識の問題もある。総合的に合わせて検討すべきだが、竪穴建物に作り付ける竈において、煙道が重要視されていたといえよう。

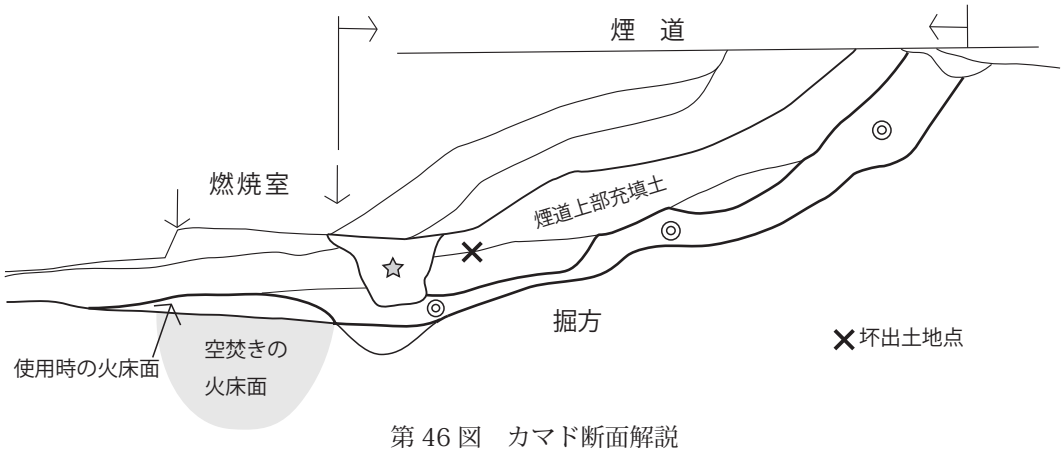
燃焼室奥壁位置と煙道入口との特定　ここまで断面による観察とその解釈を行ってきたが、煙道入口が燃焼室奥壁の低い位置にあることは疑いのないところであろう。ところで縦断面の当初奥壁とした◎印の位置は、先の空焚きの説明では仮の燃焼室奥壁という表現をした。赤化した焼土の壁に接する三角に堆積して見える土は (☆印の土) その形状や、被熱痕跡から竈に鍋釜をセットして後ろ側の空間を止める側止の土と解釈した。三角に掘り込んだように見えるが、その上面には竈構造材が覆っていることから、当初から使用されていた土と考えられる。上面は黄褐色土で、下部はやや暗褐色土が混入する粘性が強い土である。平坦であることからも、意図的に積まれた土である。この☆印の土の下部に観察できる灰層や焼土などは、煙道空間内の土と同様に柔らかく、その一部として機能していたことになるのだろう。であるとすれば、燃焼室奥壁の位置はさらに内側 (焚口側) にあるとするべきで、煙道の長さも変わってくだろう。残念ながらこれを解き明かすには、さらに類例を待たねばならない。

竈構築時の祭祀行為の存在　縦断面を調査中に、煙道の上部充填土中に坏が伏せた状態で出土した。(第 46 図出土レベルは×印、第 50 図) 断面土層観察からは次の手順が推定できる。煙道空間を確保・設置し、周りを充填土で成形して坏を設置。その後また土を充填する。使用時点では見えない状態で土器類が埋納 (埋設) されていることになる。こうした竈煙道成形過程での土器類埋納は「西太田遺跡 6 」の H-002 号住居の竈でも確認されており、竈構築時の祭祀行為と考えられよう。今後の類例を待ちたい。

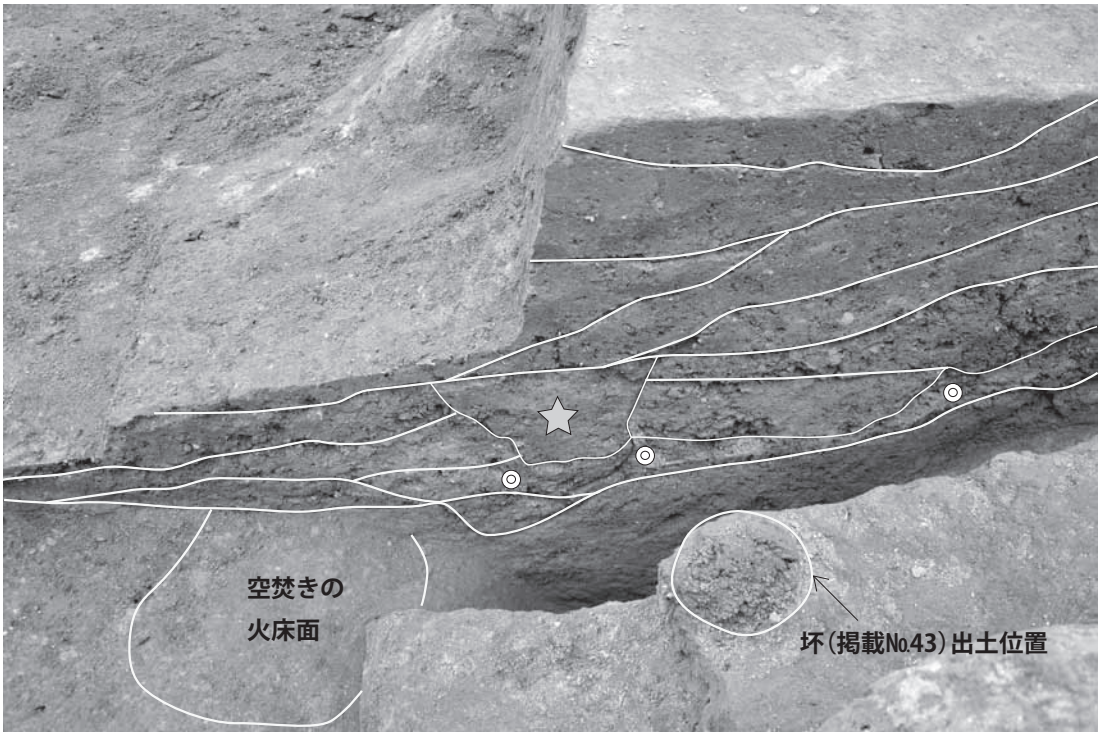
おわりに　今回調査対象となった 3 区ではおよそ 21 棟の竪穴住居 (竪穴建物) が確認された。各竪穴建物の所属する時期は出土遺物の検討によって、7 世紀から 8 世紀と平安時代の 10 世紀であった。そのうち 14 棟で竈が作り付けられている。個々の竈については遺構の残存状況が異なるため詳述できないが、土層断面観察や平面形状から見て、すべての竈構造は、煙出し部 (煙道) を燃焼室奥壁の低い位置に設置し煙を屋外に排出する「倒炎方式」であろう。また、煙道空間の「支え石」と思われる石の存在も確認できた (17 号住居)。奈良・平安時代に「倒炎方式」の採用が確認できたことは、注目すべきである。竈も竪穴建物も廃絶された古代の人々の生活痕跡であり、廃絶にあたって行われる破壊行為やその後の埋没過程、あるいは開発による削平などの様々な原因によってその多くが本来の形を保っていないことが多い。従って竈もすべて崩落していると思い込んでいたが、煙道部は空間が保持されていた。「倒炎方式」の重要な要素である煙道形状を確認することで、本体の燃焼室形状も推測できる。2017 年の調査時点ではその構築方法や構築手順に対しては確認例も少なかった。そうした中で、8 号住居の竈の観察によって煙道空間と竈本体の成形に、空焚き時の残滓土などを充填している様子がはっきり確認できたことは、竈構造解明への大きな一歩であると考える。今後竈構築技術や手順を検討する上で、一つのモデルとなりうるだろう。本竈の外形はかなり大きく作られている印象であるが、実は空焚きを含めた大きさであって、その使用時の燃焼室としては古墳時代の一般的な規模と同様である (ただし焚口の高さについては不明)。また、竈構築技術の中で特に注目されるのが、「空焚き」技術である。今回検討したように、数度の空焚きを実施し、より堅牢に作り上げる技術 (註 6) については、他の窯業や製鉄、炭窯などの技術ともつながり、竈導入期の社会のうねりが見えてくるようだ。

このように「空焚き」技術の存在によって導かれる問題は大きく、例えば従来計測してきた数値には厳密には使用時点ではなく、空焚き痕跡、あるいは掘り方まで含んだ数値が提示されている可能性もある。どの調査段階で、どこを計測すれば良いのかも含めて、調査者間で共通認識を持つことが緊急の問題とされよう。

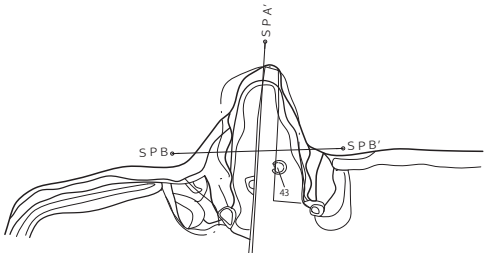
変動する時代の中で、食生活の中心に竈を採用した人々の生活実態を探るために、竈構造と構築技術を改めて検討しなおす必要を感じている。(外山)



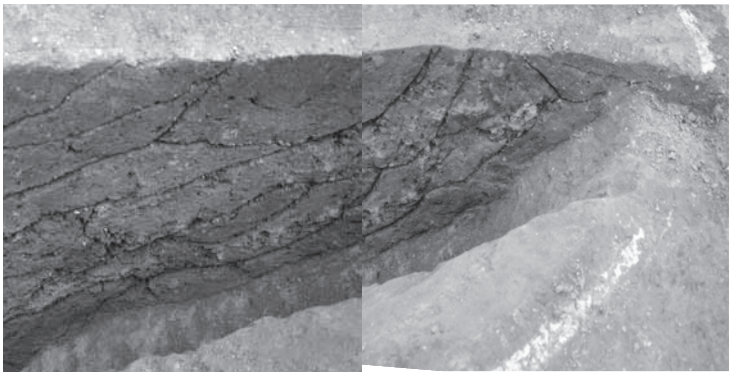
第 46 図　カマド断面解説



第 47 図　カマド断面 (焚口～煙道部)



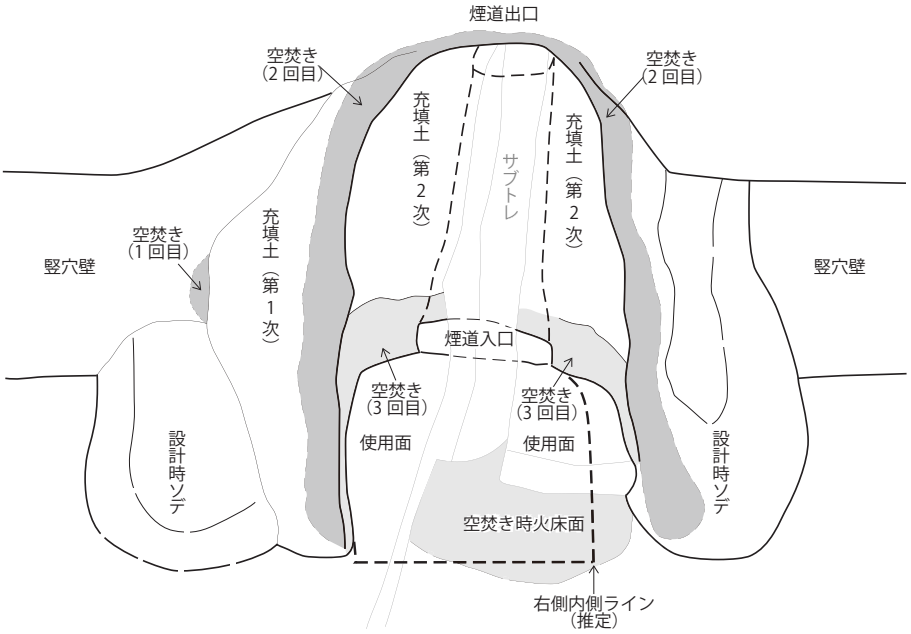
第 48 図　セクションポイント模式



第 49 図　カマド断面 (煙道部～排出口) 合成

第 50 図　煙道入口上部の充填土中に埋設された坏

第 51 図　カマド平面形　調査経過



第 52 図　カマド平面形　調査経過の解説

註 1　この呼称は近世陶器窯、特に連房式窯の構造に使われているが、ほかの窯類の構造説明にも援用されており、ここではそれらの援用例から「倒炎方式」と呼ぶこととする。笠原仁史氏のご教示による。また、2017 年月 2 月の食文化研究検討会の席上でも木立雅朗氏より同様の指摘とアドバイスをいただいている。

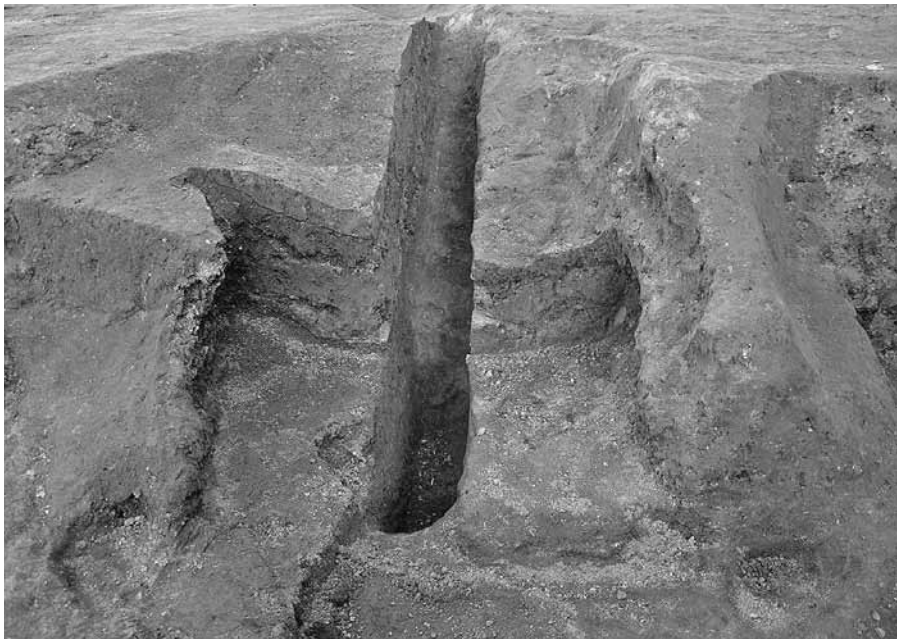
註 2　安中市加賀塚遺跡の再検討による。井上慎也氏のご教示によるところが多い。

註 3　本遺構の場合は、その壁溝の検討から建物規模は大きく変わらないと考えられる。

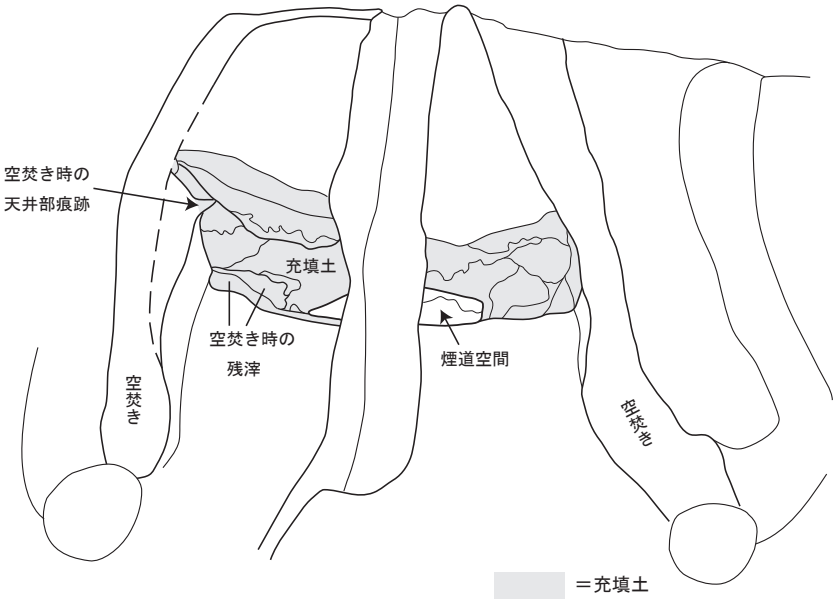
註 4　竈成形にあたって重要なのは、煙道本体部の成形であって、周囲の空間は前段階の空焚き残滓も交えて充填するようだ。特に底面に残る焼土と灰、炭などが使用時点のものと混同されることが多い。(第 53・54 図)

註 5　板などの材料で形をつくり、まわりを粘性土で固めて煙道空間を確保している。その際煙道断面状は方形、あるいは隋円形を呈するようだ。具体的な材、その他については次に期したい。(第 52 図)

註 6　空焚きを行う意義については、①　構造材土の徹底的乾燥　②　焼きしめによる構造の収縮が指摘できる。



第 53 図　煙道空間と充填土 (SPB-B')



第 54 図　カマド横断面図 (SPB-B')

参考文献

1. 外山政子 2018「東日本の竈構造と構成要素再考―東西日本の煮炊きの違いを考えるために―」『物質文化』98 物質文化研究所
2. 外山政子 2017「西太田遺跡 6 のカマドについて」『西太田遺跡 6 』伊勢崎市教育委員会
3. 井上慎也 2004『中野谷地区遺跡群 2』安中市教育委員会
4. 井上慎也 2007『加賀塚遺跡Ⅰ』安中市教育委員会
5. 井上慎也 2011『加賀塚遺跡Ⅱ』安中市教育委員会

２．８号住居出土遺物について

８号住居は一辺７ｍを超える大規模な竪穴建物で、南半分が調査区外となるにもかかわらず、他の住居と比較して突出するほどの多量の遺物が出土した (第 28 表)。出土した土器はほとんど破片で接合率も低いものであったが、須恵器の比率が高く、器種も豊富であった (第 29 表)。本節では図示し得なかった土器について、補足として作成した図表の説明をしておきたい。

土師器　坏はその口縁部形態から、須恵器坏蓋を模倣した模倣坏の系統と、半球状で内屈口縁のいわゆる北武蔵型坏の系統で大別された。口縁部が内側に屈曲する北武蔵型坏は 122 点 (42・43・44・45・46・47)、口縁部下に稜をもち口端の外反する模倣坏は 40 点 (40・41)、他に図示し得なかったが皿も 4 点確認された。土師器の皿は律令成立期の北武蔵で成立・分布する「北武蔵型皿」(註 1) と言われるものである。

須恵器　注目される器種として小型短頸壺 (第 55 図：65) がある。白灰色で胎土は緻密、(51) の坏や (54) の蓋と非常に似た、目を引く胎土である。周辺遺跡に類例を探すと、北原遺跡、北原・萩林遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域、国府南部遺跡群Ⅱ、保渡田東遺跡、棟高水窪Ⅱ遺跡等で確認される。小型短頸壺は仏教系遺物である可能性がある。その他、盤 (高盤？)・転用硯は、一定階級の人物を想定させる。(高橋)

８号住居出土遺物群の性格　上記補足した多様な遺物群は、その過半が覆土中から出土した接合率の低いもので、出土した８号住居の性格を直接に示すものでは無い。ただ、層中に漫然と混入した出土状態と、分層困難な堆積環境 (比較的短期間で埋没した可能性が高い) から、遺構周辺の恒常的な清掃行為によってもたらされた (塵芥と共に竪穴窪地に投棄されるような) 比較的まとまりのある資料群と思われた。

次章で触れるが掘立柱建物が本住居と同時期の可能性を踏まえれば、覆土中から出土した土器が本来使用されていた場所は、掘立柱建物とその周辺であった可能性が考えられる。覆土中に炭化物が多く含まれていた事を積極的に評価するなら、饗宴等に使用されていた可能性も想定される。(永井)

註 1　丸底で口縁部が大きく外反していることが大きな特徴である。(鶴間正昭 2001)
※須恵器については (公財) とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター池田敏宏氏に鑑定していただいた。

参考文献

群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987『上野国分僧寺・尼寺中間地域 (2)』
群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『上野国分僧寺・尼寺中間地域 (4)』
群馬町教育委員会・群馬県教育委員会ほか 1986『北原遺跡』
群馬町教育委員会 2000『国府南部遺跡群Ⅰ・Ⅱ』
群馬町教育委員会 1986『保渡田東遺跡』群馬町埋蔵文化財調査報告第 17 集
考古学から古代を考える会 2000『古代仏教系遺物集成・関東』
高崎市教育委員会 2008『棟高遺跡群　棟高水窪Ⅱ・棟高辻の内Ⅳ遺跡』
高崎市教育委員会 2012『北原・萩林遺跡』
鶴間正昭 2001「関東における律令体制成立期の土師器供膳具」『東京考古 19』東京考古談話会

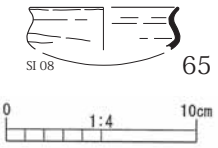
第 28 表　竪穴建物出土土器一覧

	種別		土師器		須恵器	
	器種		小型品（坏・埦）	大型品（甕類）	小型品（坏・埦）	大型品（甕類）
SI-1	実測個体		1	1	3	
	破片資料	口縁部	28	5	2	
		体部	13	76	1	8
		底部	2	2		
	種別合計		128 点		14 点	
	合計		計 142 点			
SI-2	実測個体		3	3	2	
	破片資料	口縁部	18	22	9	1
		体部	63	126	4	24
		底部	3	5	2	4
	種別合計		243 点		46 点	
	合計		計 289 点			
SI-4	実測個体			1	1	3
	破片資料	口縁部	6	1	1	
		体部	11	20	1	6
		底部	1			
	種別合計		40 点		12 点	
	合計		計 52 点			
SI-5	実測個体		4	1		
	破片資料	口縁部	3	2		
		体部		8		
		底部				
	種別合計		18 点		0 点	
	合計		計 18 点			
SI-6	実測個体		4	2	4	1
	破片資料	口縁部	40	8	4	4
		体部	32	86		6
		底部	4	4	3	1
	種別合計		180 点		23 点	
	合計		203 点			
SI-7	実測個体		1	1	2	1
	破片資料	口縁部	38	18	9	
		体部	40	43		4
		底部	6	2	4	
	種別合計		149 点		20 点	
	合計		計 169 点			
SI-8	実測個体		9	4	13	3
	破片資料	口縁部	162	51	38	3
		体部	60	539	23	11
		底部	26	23	24	1
	種別合計		874 点		116 点	
	合計		計 990 点			
SI-9	実測個体		1		1	
	破片資料	口縁部	21	12	4	
		体部	16	127	1	
		底部	3	2		
	種別合計		182 点		6 点	
	合計		計 188 点			
SI-10	実測個体			2		
	破片資料	口縁部	1	1		
		体部	4	33	1	1
		底部				
	種別合計		41 点		2 点	
	合計		計 43 点			

	種別		土師器		須恵器	
	器種		小型品（坏・埦）	大型品（甕類）	小型品（坏・埦）	大型品（甕類）
SI-11	実測個体			1		
	破片資料	口縁部				
		体部		3		
		底部				
	種別合計		4 点		0 点	
	合計		計 4 点			
SI-12	実測個体		1	1	1	
	破片資料	口縁部	25	8	1	1
		体部	62	114		10
		底部	5	1		
	種別合計		217 点		13 点	
	合計		計 230 点			
SI-13	実測個体					
	破片資料	口縁部		1		
		体部		5		
		底部				
	種別合計		6 点		0 点	
	合計		計 6 点			
SI-14	実測個体				2	1
	破片資料	口縁部	3	2		1
		体部	4	24	2	14
		底部				1
	種別合計		33 点		21 点	
	合計		計 54 点			
SI-15	実測個体			2		
	破片資料	口縁部	1	5		
		体部	6	36		
		底部		1		
	種別合計		51 点		0 点	
	合計		計 51 点			
SI-16	実測個体				3	1
	破片資料	口縁部	1		1	
		体部				5
		底部				1
	種別合計		1 点		11 点	
	合計		計 12 点			
SI-17	実測個体				2	1
	破片資料	口縁部		1		
		体部		8		
		底部		1		
	種別合計		10 点		3 点	
	合計		計 13 点			
SI-18	実測個体		1	1	2	
	破片資料	口縁部	4	2	6	
		体部	52	38	5	1
		底部	1			
	種別合計		99 点		14 点	
	合計		計 113 点			
SI-19	実測個体				2	
	破片資料	口縁部		2	1	
		体部	1	3		1
		底部		1	1	
	種別合計		7 点		5 点	
	合計		計 12 点			

第 29 表　SI-8 須恵器器種一覧表

器種	坏	盤	蓋	小形短頸壺	甕	壺	マリ	転用硯
実測個体	5	1	4	1	1	2	1	1
破片	41	3	42		13			1
計	46	4	46	1	14	2	1	2



第 55 図　SI-8 出土の小型短頸壺（掲載№ 65）

第Ⅵ章　総括

今回の棟高南八幡街道遺跡３の調査では、竪穴住居 (竪穴建物)22 軒、掘立柱建物２棟をはじめとし、溝２条、土坑５基、井戸２基、ピット多数を検出し、土師器・須恵器等の土器、陶器・石製品の出土をみた。以下に竪穴住居出土遺物の時期を確認しながら先ず年代軸を設け、集落遺跡としての変遷を把握しておきたい。

1. 集落の変遷

竪穴住居の時期を出土遺物等から大別すると、古墳後期～奈良時代 (７世紀前半～８世紀後半) と判断されるものが 13 軒 (１・２・４・５～ 12・14・15 号)、平安時代 (９世紀後半～ 11 世紀) が 4 軒 (16 ～ 19 号) の二時期である。これ以外に時期判断できる遺物が無く不明なものが３軒 (13・20・21 号) あるが、遺構の角度から 13・21 号は古墳後期～奈良時代、20 号は鉄滓の検出から鍛冶炉をもつ 18 号と同時期の平安時代と考えられる。

古墳後期～奈良時代はⅠ～Ⅳ期に区分される。最も古いのは新相の土師器模倣坏と厚手の土師器甕を出土した５号住居で、７世紀前半でも初頭に近い時期と推定され、本遺跡の過去の調査成果を踏まえれば集落形成期に相当する (**Ⅰ期**)。次いで古相なのが２号住居で、口縁部の内屈する初期の北武蔵型の土師器坏から７世紀末頃と推定され、Ⅰ期とした５号住居との間には一定期間 (数十年) 見込まれる (**Ⅱ期**)。この２号住居と先の５号住居を切る４号住居は須恵器坏の形態から８世紀初頭と考えられ、１・６～９・14 号住居がほぼ同時期と考えられ、集落として一つのピークをなす。土師器坏は北武蔵型、土師器甕は武蔵型、須恵器は蓋坏以外に湖西産の大甕・高盤・長頸壺といったやや特異な器種組成で、転用硯の可能性のある須恵器片も出土していることから、集落が一定の政治的機能を備えた可能性がある。掘立柱建物２棟についても、当該時期と考えられる (**Ⅲ期**)。次ぐ段階は 10 ～ 12・15 号住居で、肩の張る武蔵型甕からは８世紀後半頃を中心とする時期と推定される。土器は一般的な器種のみで構成されており、政治的機能を思わせた前段階に比して一般集落の印象である (**Ⅳ期**)。

平安時代は、古墳後期～奈良時代との間に空白期を挟み、古新二段階に区分される。また、古新二段階の間にも一定の空白期を挟んでいる。平安時代古段階は 18 号住居で、「コ」字断面の口縁部をもつ土師器武蔵甕と箱形となった最終形態の北武蔵型の土師器坏、須恵器坏と灰釉陶器輪花碗が出土しており、９世紀後半と考えられる。竪穴部中央に設置された鍛冶炉と周辺からの鉄滓・鍛造薄片の検出、砥石・金床石の出土から、鍛冶工房群と理解される。遺物が無い為に時期不明の 20 号住居も、鉄滓小片の検出から同時期と考えられる (**Ⅴ期**)。平安時代新段階は 16・17・19 号住居で、酸化焔焼成の小皿と土釜から 10 世紀後半～ 11 世紀代と推定される。16 号住居は焼失家屋で、床面が焼結するほどに焼けている部分もあった (**Ⅵ期**)。

2. 注目される遺構とその諸特徴

次に調査遺構の中で特に注目された遺構の諸特徴 (構造等) について、調査者としての見解を示しておきたい。

大型竪穴建物と掘立柱建物の性格　Ⅲ期に相当する８・９号住居は、長軸で７ｍを超えるもので、大型竪穴建物とすべきものであった。８号住居はカマドを北から東へ付け替え、その際に竪穴部を一回り拡張しており、量の土器片を含む自然堆積であったのに対し、９号住居は北カマドの状態で人為的に埋め戻された状態と判断された。出土遺物から厳密な前後関係は判断できなかったが、上記状況からは９号→８号という推移が想定される。８号を掘削した排土で９号を埋めたとすれば､大型竪穴建物を南へ移動させたものと考えられる。その背景には、同時期と推定される掘立柱建物２棟の存在が影響していると思われる。大型竪穴建物の性格については諸説あるが、仮に集落内の集会施設的な機能を考えれば、公的かつ政治的な機能が想定される掘立柱建物とは対となる施設であったのだろう。前章２で指摘されるように８号住居から出土した小型短頸壺を仏具の一種と捉えるなら、

宗教的な雰囲気も有していたとも言い得る。付け加えると短頸壺は８号住居の覆土中出土である為に直接伴う遺物では無いが、一方で掘立柱建物とその周辺で使用された後の廃棄の可能性があり、むしろ掘立柱建物の性格を示している可能性が高い。今回報告した大型竪穴建物と掘立柱建物の組み合わせが当該期において普遍的であるか否かは今後の課題としたいが、集落内における中心的な場であったと考えておきたい。

カマドの設置方位と位置　今回調査された住居のカマドは、全時期通じて東側の設置が基本であるが、先の大型建物２軒のみ北ないしは北から東への付け替えであった。住居の出入口は採光の関係から南側と考えられるので、東側設置は右側、北側設置は正面という事になる。笹森健一氏が指摘するように建物内の左右をジェンダーと関連付けて理解することには慎重を期する必要があるが、集会施設が想定され特定世帯の使用では無い可能性をもつ大型竪穴建物２軒（８・９号住居）のカマドが北側設置であったことは興味深い点である。

また、最深段階Ⅵ期の３軒が竪穴部南東コーナー部対角線上にカマドを設置していた点は、集落内での何らかの規範を思わせる事象として注目される。コーナー部のカマドが上屋構造とどう関係するのか、あるいはその利点が何であったのか、今後事例の集成を行った上で検討したい点である。

柱穴脇の排土山　８号住居で確認された柱穴脇の土山は、事実記載でも触れたように柱の抜き取りに際して柱根脇を掘削した際の排土山であったと考えられる。当該遺構が大型であったことが柱を大きく太くし、その結果として生じた事象であることは疑い無いが、通常の調査ではほとんど確認されない事も事実である。建物の上屋解体の方法や、解体後の柱材の再利用と関係する可能性も考慮される。今後の事例増加を俟つと共に、遺跡調査者への注意喚起をしておきたい。

道路状遺構？　３号性格不明遺構とした溝状の遺構は、底面近くに硬化面が認識されたもので、道路状遺構と言えるものであった。調査時には判然としなかったが、Ⅱ期の２号住居を切る可能性が考えられたことから、時期としてはⅢ期に機能していた可能性が高い。道路は調査区外へと伸びているが、その先にあるのは渓谷状に開析された天王川である。現状では川へ昇降する為の生活通路であったと考えておきたい。

鍛冶工房と関連施設　Ⅴ期の 18 号住居からは、竪穴部のほぼ中央から鍛冶炉が検出された。当該遺構は竪穴部面積は小さいながらもカマド・貯蔵穴を有しており、半工半住的な様相と言える。一方で 20 号住居は鉄滓の集中から同時存在の建物であったと考えられるが、竪穴部は極端に浅く、床面にいくつかの土坑が開き、炭化物粒子と焼土が多く残されていた。カマドは後世の溝に破壊された可能性があるが、それにしても痕跡すら見られなかったので、カマドを持っていなかった可能性もある。一般的な住居とはかなり異なる趣きで、金床石の出土からは専業的な鍛冶工房であった可能性を想定することも無理ではない。18 号の後継施設である可能性も考慮しつつ、平安期の鍛冶工房の在り方を示す例として位置付けたい。

3. 小結

今回の棟高南八幡街道遺跡３の調査では、狭小な調査区に対して多様な時期･性格の遺構と遺物が確認された。特に古墳～平安時代の集落としては、一般的な古墳時代集落から律令的な雰囲気の強い場へ変化した後、空白期を挟んで平安時代鍛冶工房、再度空白期を挟んでコーナー部カマドのやや特異な集落へと変遷していることが判明した。中世については検討を加えることが出来なかったが、南方に位置する胸形神社周辺に広がる棟高館址に関係する遺構群と推定された。

本遺跡周辺は、今まであまり発掘調査が行われてこなかったエリアであり、今回の調査は一昨年の棟高南八幡街道遺跡２、さらにその数年前の棟高南八幡街道遺跡の成果と共に、今後検討が深められ、地域史が編まれていく際の一助となる事が期待される。（永井）

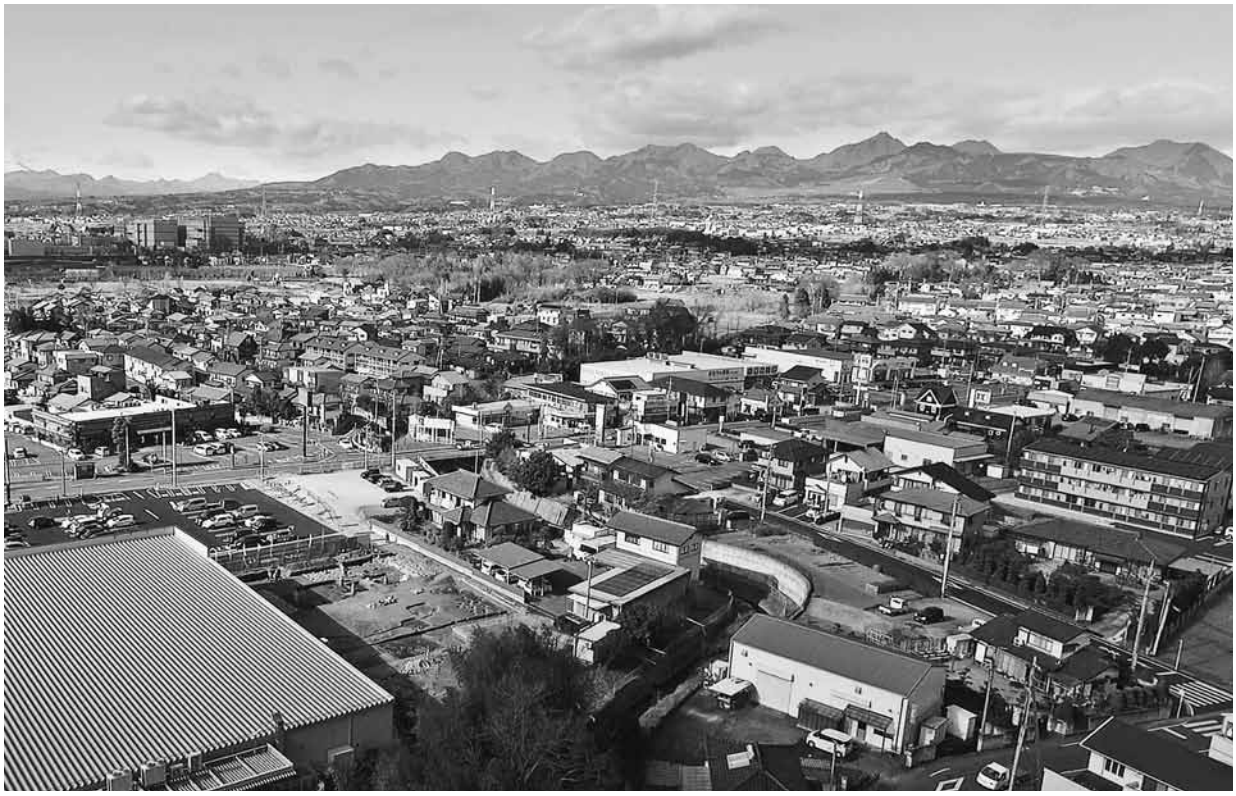
参考文献

笹森健一 2007「古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居」『住まいの考古学』学生社

写　真　図　版

図版 1

1.　調査区全景



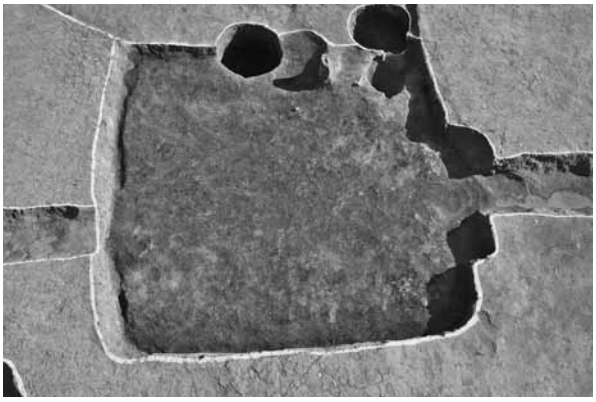
2.　調査区の立地　南東から (榛名山を望む)

１．　調査区全景　南東から

２．　基本土層

３．　１号住居・２号住居・１号溝　東から

４．　４号住居　東から



５．　５号住居　東から

図版３

１．　６号住居　西から

２．　６号住居 遺物出土状況　西から

３．　７号住居　西から

４．　８号住居　北東から

５．　８号住居 カマド　東から

６．　８号住居 柱抜き取り痕跡断面　南から

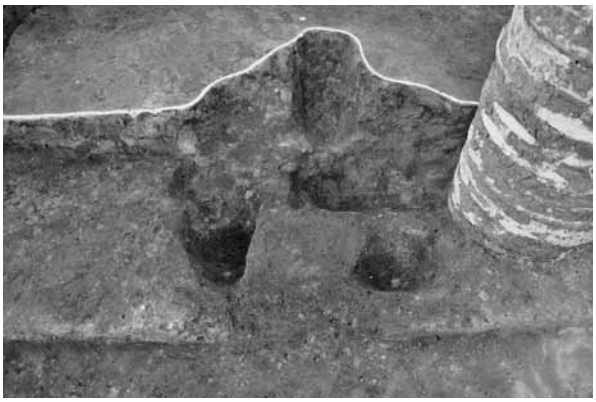
７．　８号住居 柱抜き取り痕跡　東から

８．　８号住居 掘方　東から

1．　10 号住居　西から（9 号住居を切る）

2．　10 号住居 カマド　西から

3．　9 号住居　南から（10 号住居に切られる）



4．　9 号住居 カマド　南から

5．　11 号・12 号・13 号住居（奥から）

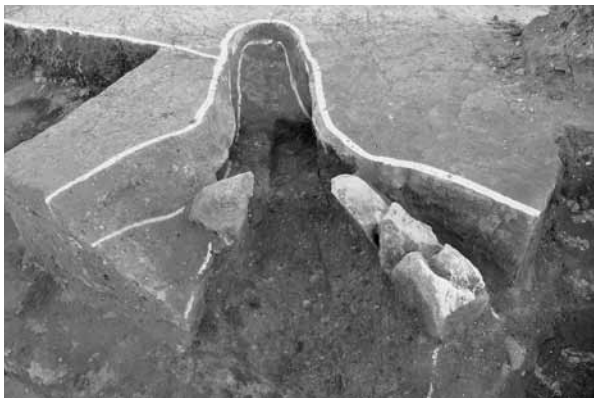
6．　11 号住居　北西から

7．　12 号住居　西から

8．　13 号住居　西から

1．　14 号住居　西から

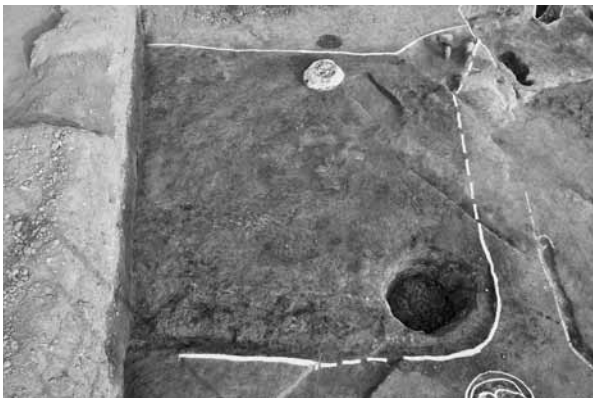
2．　17 号住居　西から（15 号住居を切る）



3．　17 号住居 カマド　北西から

4．　15 号住居　西から（17 号住居に切られる）

5．　15 号住居 カマド　西から



6．　16 号住居　西から

7．　16 号住居 カマド　北西から

8．　16 号住居 遺物出土状況　南西から

1．　18 号住居　西から

2．　18 号住居 鍛冶炉　近接

3．　19 号住居　西から

4．　19 号住居 カマド　北西から

5．　20 号住居　南から

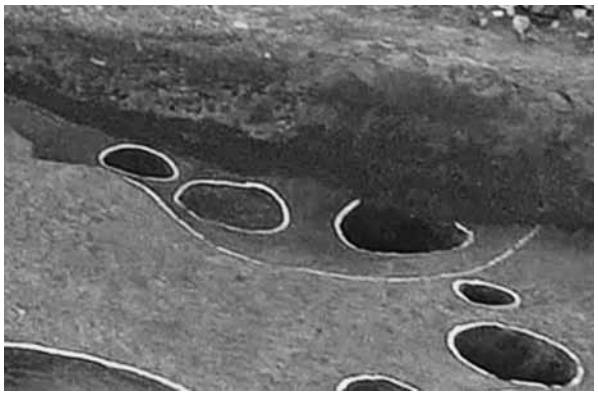
6．　20 号住居 炭化物出土状況　東から

7．　21 号住居　北から

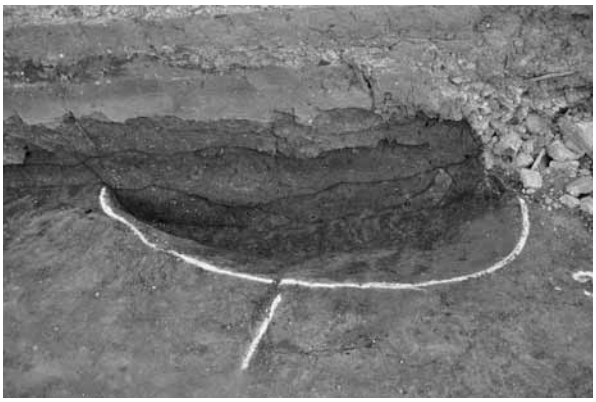
8．　22 号住居　北から

１．　１号掘立柱建物　南から

２．　１号土坑　東から



３．　６号土坑　北から



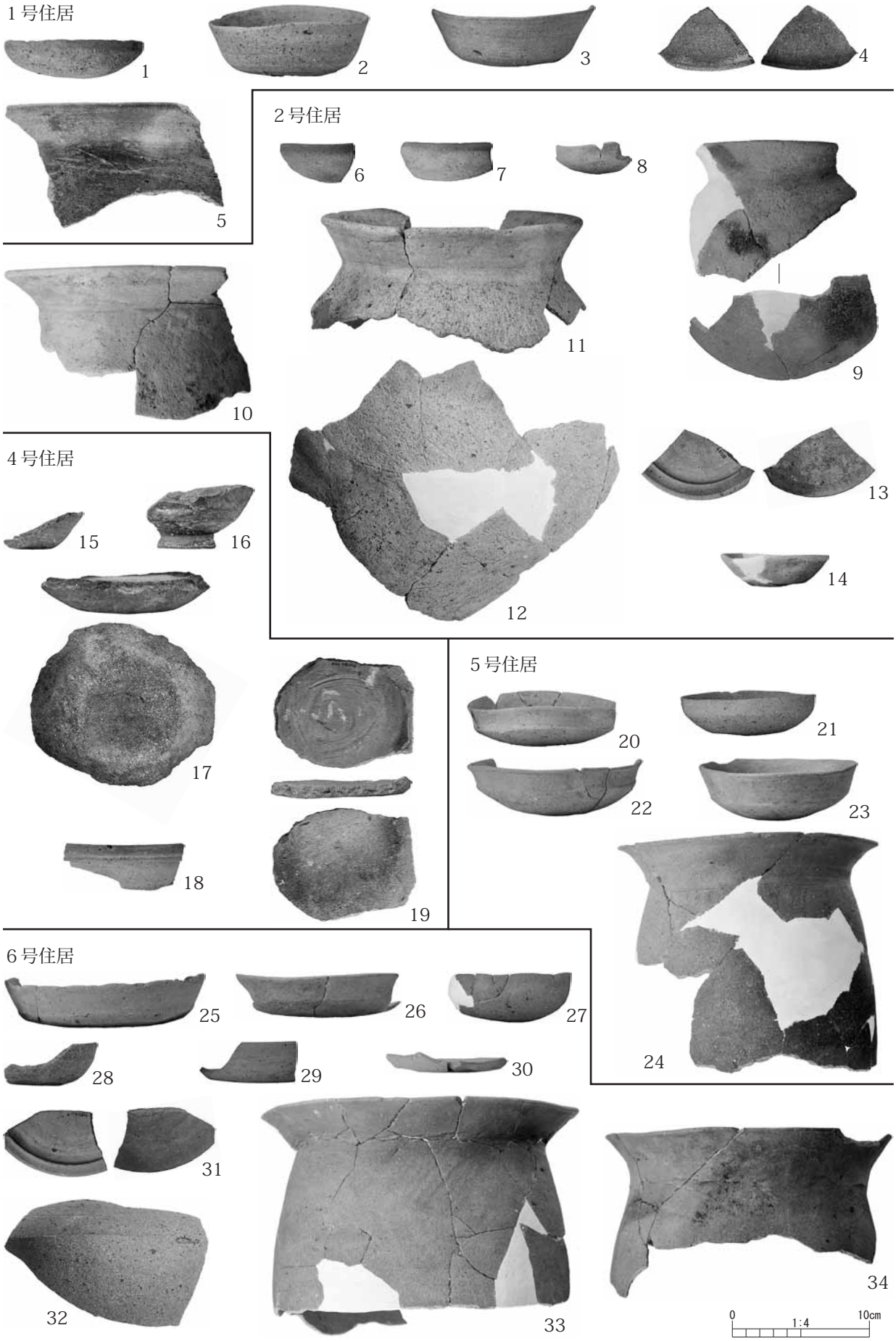
４．　７号土坑　北から

５．　９号土坑　北から

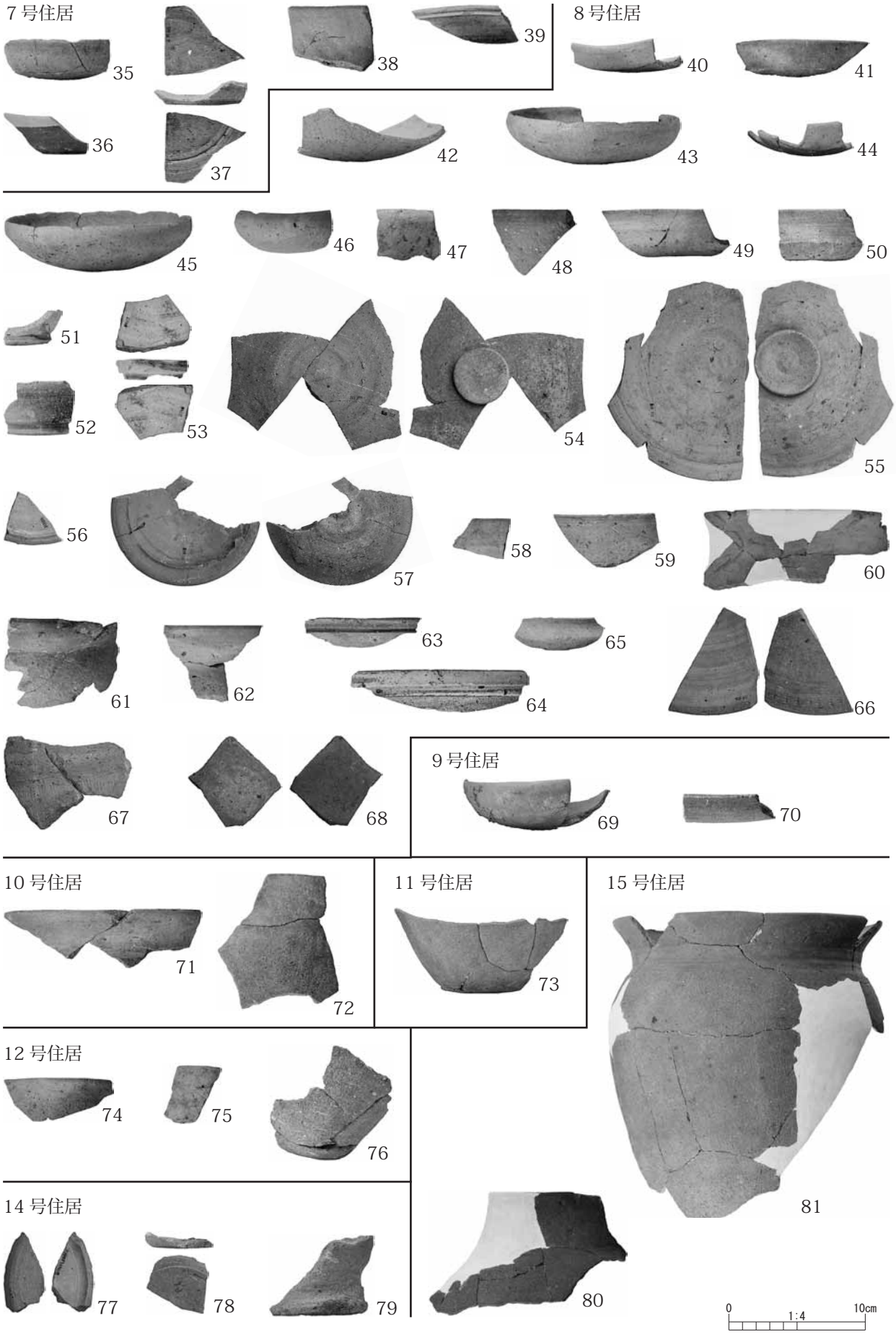
６．　１号井戸 セクション　南から

７．　１号・３号性格不明遺構　西から

８．　１号溝 遺物出土状況　南から


1 号住居
2 号住居
4 号住居
5 号住居
6 号住居
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
1:4
10cm

出土遺物（1）


7 号住居
35
36
37
38
39
8 号住居
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
9 号住居
69
70
10 号住居
71
72
11 号住居
73
15 号住居
81
12 号住居
74
75
76
14 号住居
77
78
79
80
0
1:4
10cm

出土遺物（2）

16 号住居

82

83

84

85

88

86

87

17 号住居

89

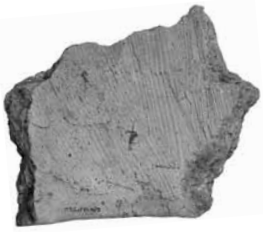
90

91

92

93

94



95

18 号住居

96

97

98

99

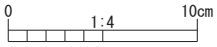
100

101

19 号住居

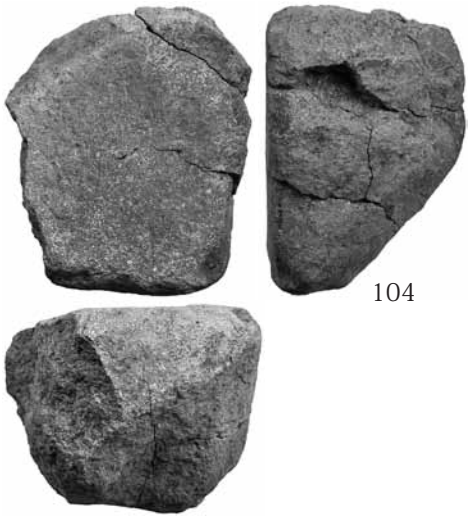
102

103



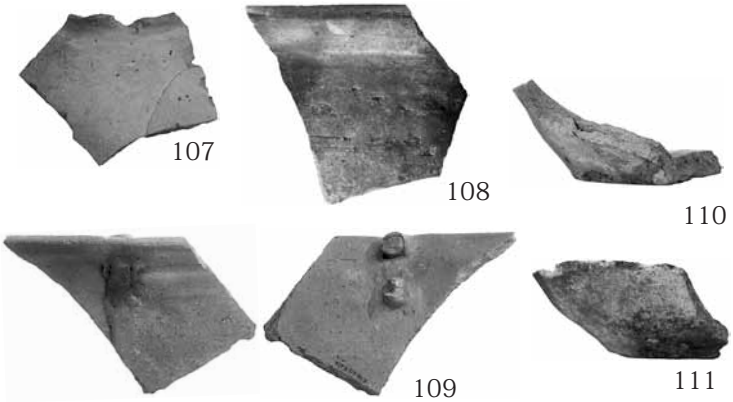
出土遺物（3）

20 号住居



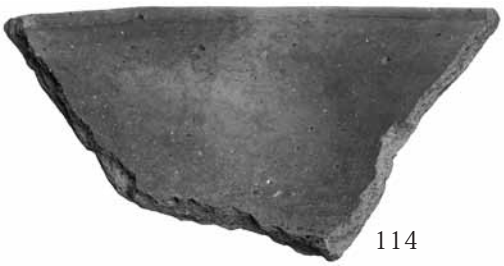
1 号柵列

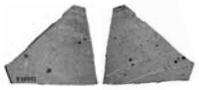
1 号溝



1 号井戸

1 号性格不明遺構





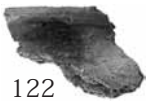
10 号土坑

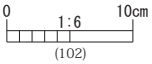
2 号ピット

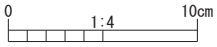
21 号ピット

23 号ピット

32 号ピット







出土遺物（4）

報告書抄録

ふりがな	むなだかみなみやわたかいどういせきさん
書名	棟高南八幡街道遺跡３
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 423 集
編著者名	矢島 浩・青木 利文・石塚 久則・永井 智教・外山 政子・高橋 実果
編集機関	山下工業株式会社
	〒 371-0244　群馬県前橋市鼻毛石町 207-8
発行機関	高崎市教育委員会　文化財保護課
発行年月日	2019 年 2 月 19 日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
棟高 南八幡街道 遺跡３	群馬県高崎市 棟高町字南八幡街道 138 番地、139 番地 1 143 番地 1、144 番地	102020	717	36° 23'04	139° 00'03	2017.11.13 ～ 2018. 1.10	852.22m^2	店舗建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
棟高 南八幡街道 遺跡３		古墳時代		埴輪	古墳時代は 17 号住居のカマドで使用された埴輪片のみ。 奈良、平安時代は棟高南八幡街道遺跡および棟高南八幡街道遺跡２同様に集落の一部とみられる。また８号住居では柱穴の脇に、柱の抜き取り痕跡とみられる土山が確認された。 中世は棟高南八幡街道遺跡２に比べ、遺構が散漫となり、耕作地などの可能性が指摘される。
	集落跡	奈良・平安時代	住居跡　21 軒 掘立柱建物　２棟 柵列　１基 土坑　５基 性格不明遺構　１基 ピット　52 基	土師器 須恵器 石製品	
		中世以降	溝　２条 井戸　１基 性格不明遺構　１基	陶器 石製品	

棟高南八幡街道遺跡３
―店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2019 年　２月 12 日　印刷
2019 年　２月 19 日　発行

発　行　高崎市教育委員会
編　集　山下工業株式会社
印　刷　朝日印刷工業株式会社